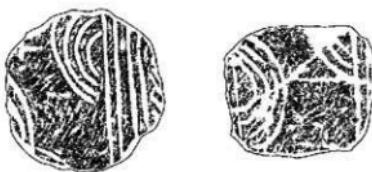


# 坂 本 堰 下 遺 跡

— 横川駅周辺地域整備事業(二点間輸送事業)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —



2004

松井田町教育委員会  
坂本堰下遺跡調査会

# 坂本堰下遺跡

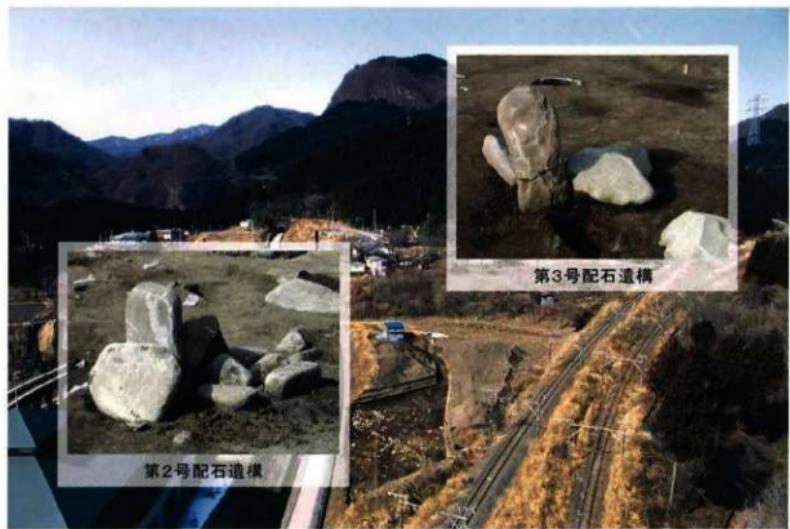
— 横川駅周辺地域整備事業(二点間輸送事業)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2004

松井田町教育委員会  
坂本堰下遺跡調査会



遺跡全景



遺跡遠景

## 序

群馬県の南西部、長野県との境に位置する碓氷郡松井田町は、奇峰妙義山・清流碓氷川などを有する緑豊かな町です。町の大部分を山地が占め、全国に知られる通行難所碓氷峠のある松井田町は、古来より交通の要衝として栄えてきました。即ち、古代律令体制下の官道である東山道、江戸時代の五街道の一つ中山道、そして明治以降においてはアプト式鉄道などにより様々な文化がもたらされてきました。それらが礎となり現在の松井田町が築かれているのです。

さて、ここに報告いたします「坂本堀下遺跡」は、松井田町による「横川駅周辺地域整備事業 二点間輸送事業」に伴うトロッコ峠の湯駅（仮称）建設に先立ち調査された遺跡です。遺跡地は碓氷川と霧積川に挟まれた台地上に位置しています。発掘調査の結果、本遺跡からは縄文時代の住居跡や配石遺構などが検出されました。同じ台地上に位置する坂本北裏遺跡（平成9年度調査）でも環状列石などの配石遺構が確認されています。真南に裏妙義の岩峰を望むこの台地上は、縄文時代の人々にとって特別な空間であったと考えることができます。また出土した遺物の中には、長野県産の黒曜石や同地方の影響を受けたと考えられる文様を持つ上器などもあり、「峠のまち」としての源を見ることもできます。本遺跡の調査範囲は決して広くはありません。しかし、このような調査を一つ一つ積み重ねてゆくことが、私たちの祖先が生きてきた道を探ることであり、私たちがこれから進むべき方向を考えることにつながると信じています。

最後になりましたが、発掘調査に従事された方々をはじめ、現地調査から本書刊行に至るまで多くのご理解・ご協力をいただきました皆様に心より感謝を申し上げて序といたします。

平成16年9月30日

坂本堀下遺跡調査会  
会長 小林 一郎

## 例　　言

1. 本書は、群馬県碓氷郡松井田町大字坂本字坂下1,211-1他に所在する坂本坂下遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、松井田町による「横川駅周辺地域整備事業 二点間輸送事業」に伴うトロッコ駅の湯駅(仮称)建設に伴い、事前の記録保存を目的として実施されたものである。
3. 発掘調査は、坂本坂下遺跡の約550m<sup>2</sup>を対象として実施した。
4. 発掘調査期間は以下のとおりである。  
自 平成16年1月19日  
至 平成16年2月28日
5. 整理調査期間は以下のとおりである。  
自 平成16年3月19日  
至 平成16年9月30日
6. 発掘調査および整理調査は、坂本坂下遺跡調査会が実施し、同調査会の指導のもと、有限会社毛野考古学研究部が担当した。実施にあたっては、和久裕昭(同研究所主任調査研究員)と山本千春(同研究所調査研究員)が作業の進行を担当した。
7. 本文の執筆は、第1章を松井田町教育委員会事務局が、第2章を長井正欣(有限会社毛野考古学研究所)が、その他を和久が担当した。また、本書の編集は和久が担当した。
8. 本書に掲載した出土遺物、遺構および遺物の実測図ならびに写真、その他報告書に関する資料は、松井田町教育委員会が保管している。
9. 発掘調査から整理調査、報告書の刊行に至るまで、以下の方々・機関から貴重なご助言、ご指導、ご協力を賜った。ご芳名を記し、あらためて感謝申し上げる(順不同・敬称略)。  
伊藤明宏　金子哲郎　北爪恭泰　鎌木健雄　大工原豊　山口逸弘  
カネコハウス有限会社　J-T空撮　有限会社和光建設

10. 坂本坂下遺跡の調査にあたって受けられた調査会組織の内容は、以下のとおりである。

### 「坂本坂下遺跡調査会」平成15年度

会　　長	小林 一郎	松井田町教育長
副会長	松木 次男	松井田町教育委員会事務局　社会教育課長
理　　事	清水 博	松井田町企画財政課長
	石井 道夫	松井田町教育委員会平野局 社会教育課社会教育係課長補佐兼係長
監　　事	中山 博一	松井田町企画財政課企画係長
事務局長	二浦 尚明	松井田町教育委員会事務局 社会教育課文化財係長
事務局員	堀 伸明	松井田町教育委員会事務局 社会教育課指導主事

### 「坂本坂下遺跡調査会」平成16年度

会　　長	小林 一郎	松井田町教育長
副会長	伊藤 秀樹	松井田町教育委員会事務局　社会教育課長
理　　事	内山 守	松井田町企画財政課長
	石井 道夫	松井田町教育委員会事務局 社会教育課社会教育係課長補佐兼係長
監　　事	中山 博一	松井田町企画財政課企画係長
事務局長	二浦 尚明	松井田町教育委員会事務局 社会教育課文化財係長
事務局員	堀 伸明	松井田町教育委員会事務局 社会教育課指導主事

11. 発掘調査から整理調査、報告書の刊行に至る坂本原下遺跡の発掘調査および整理調査の参加者は、以下のとおりである(順不同・敬称略)。

〔発掘調査〕	岩崎 駿	片貝 誠二	片貝 好雄	櫻井 きん	佐藤なみ江	高橋 稔
	中島 佑吉	長谷 純則	矢島 嶽	矢島 博文	古澤 ミサ子	吉本 律子
〔整理調査〕	青木英美子	石川 橋理	職 梓子	今泉 昌子	小野沢絹子	小佐野博子
	田口富美子	武久美子	半澤 利江	真下 弘美		

## 凡 例

- 本書所収の各種遺構図における方位針は、座標北を示す。
- 各遺構断面図に付記した水準数値は、東京湾平均海面(T.P.)に基づく海拔をm単位にて示したものである。
- 本書掲載の地形図については、各図の間に出典を明記している。
- 今回の調査では、進行上の都合により、遺物の位置記録・表記用(4mグリッド)、遺構用(5mグリッド)と2通りのグリッドを併用している。前者については、本文において「H○-○区」と表し、遺物の件記には「前○-○区」という表現を用いている。
- 本書掲載の遺構図ならびに遺物実測図の縮尺は、原則として以下のとおりとし、個別の図におけるスケールに縮尺を明示した。

〔遺構図〕	遺跡全体図	… 1:150	個別の遺構平面図	… 1:60	個別の遺構断面図	… 1:40
〔遺物実測図〕	土器	… 1:3				
- 土坑・ピット一覧表中、および本文中の遺構に関する事実記載においては、単位としてmまたはcmを用い、小数点以下第1位までの数値を四捨五入のうえ示している。
- 遺物観察表中の単位については、法量にcm、重さにgを用いている。〔 〕内の数値は最大残存値、( )内の数値は推定値をそれぞれ示す。
- 遺構探査中の土層説明、および遺物観察表において示した色調名は『新版標準土色帖』(2002年版 著者: 小山正忠・竹原秀雄、監修: 肥林水産省水産技術会議事務局、色票監修: 財團法人日本色彩研究所)に従つている。ただし、実際の色の識別は調査担当者の主観による。
- 本書にて引用、ないし制作にあたって参考した文献については、その主なものと本文本にまとめて記載した。
- 本書巻末に掲げた報告審査録では、遺跡の位置表示として、2002(平成14)年4月1日施行の測量法改正で採用された世界測地系(新国家座標)に基づく緯度・経度、および改正以前の日本測地系(旧国家座標)に従つた緯度・経度の両者を併記している。

# 目 次

表題写真

序

例 言

凡 例

目 次

第1章 調査に至る経緯 .....	1
第2章 地理的・歴史的環境 .....	2
第1節 地理的環境 .....	2
第2節 歴史的環境 .....	2
第3章 調査の方法と経過 .....	5
第1節 調査の方法 .....	5
第2節 調査の経過 .....	5
第4章 調査の成果 .....	6
第1節 基本層序 .....	6
第2節 検出された遺構と遺物 .....	10
(1) 概 要 .....	10
(2) 住居跡 .....	10
(3) 配石遺構 .....	25
(4) 土坑・ピット .....	34
(5) 遺構外出土遺物 .....	39
第5章 ま と め .....	50

主要参考文献

写真図版

報告書抄録

## 挿図目次

第1図	坂本塙下遺跡の位置	1	第22図	第1号配石遺構出土遺物(3)	29
第2図	周辺の遺跡	3	第23図	第1号配石遺構出土遺物(4)	30
第3図	遺跡の微地形と基本層序(1)	6	第24図	第2号配石遺構実測図	32
第4図	坂本塙下遺跡全体図	7	第25図	第3号配石遺構実測図	32
第5図	遺跡の微地形と基本層序(2)	9	第26図	第4号配石遺構実測図	33
第6図	第1号住居跡実測図(1)	11	第27図	第3号土坑実測図	34
第7図	第1号住居跡実測図(2)	12	第28図	第3号土坑出土遺物	34
第8図	第1号住居跡遺物分布図	13	第29図	第4号土坑実測図	35
第9図	第1号住居跡出土遺物	14	第30図	第4号土坑出土遺物	36
第10図	第2号住居跡実測図(1)	15	第31図	第9号土坑実測図	36
第11図	第2号住居跡実測図(2)	16	第32図	第10号土坑実測図	37
第12図	第2号住居跡実測図(3)	17	第33図	第1号ピット実測図	37
第13図	第2号住居跡遺物分布図	18	第34図	第2号ピット実測図	38
第14図	第2号住居跡出土遺物(1)	19	第35図	第2号ピット出土遺物	38
第15図	第2号住居跡出土遺物(2)	21	第36図	第3号ピット実測図	38
第16図	第2号住居跡出土遺物(3)	22	第37図	遺構外出土遺物(1)	40
第17図	第1号および周辺の配石遺構	24	第38図	遺構外出土遺物(2)	42
第18図	第1号配石遺構実測図	25	第39図	遺構外出土遺物(3)	44
第19図	第1号配石遺構 遺物分布図	26	第40図	遺構外出土遺物(4)	46
第20図	第1号配石遺構出土遺物(1)	27	第41図	遺構外出土遺物(5)	48
第21図	第1号配石遺構出土遺物(2)	28			

## 表目次

第1表	第1号住居跡 山土遺物観察表	14	第10表	第2号ピット 出土遺物観察表	38
第2表	第2号住居跡 山土遺物観察表(1)	20	第11表	土坑・ピット一覧表	39
第3表	第2号住居跡 出土遺物観察表(2)	22	第12表	遺構外出土遺物観察表(1)	41
第4表	第1号配石遺構 出土遺物観察表(1)	27	第13表	遺構外出土遺物観察表(2)	43
第5表	第1号配石遺構 出土遺物観察表(2)	28	第14表	遺構外出土遺物観察表(3)	45
第6表	第1号配石遺構 出土遺物観察表(3)	29	第15表	遺構外出土遺物観察表(4)	47
第7表	第1号配石遺構 出土遺物観察表(4)	30	第16表	遺構外出土遺物観察表(5)	49
第8表	第3号土坑 出土遺物観察表	34	第17表	遺構外出土遺物 グリッド別集計表	49
第9表	第4号土坑 出土遺物観察表	36			

## 写真図版目次

- 写真図版 1 遺跡の位置および周辺の地形  
写真図版 2 遠跡遠景（東から）  
遠跡遠景（西から）  
写真図版 3 遺跡全景  
写真図版 4 第1号住居跡  
第1号住居跡 P-2  
第1号住居跡 P-19  
第1号住居跡 P-26  
第1号住居跡 P-27  
写真図版 5 第2号住居跡 敷石検出状況  
第2号住居跡 ピット  
写真図版 6 第2号住居跡 沖  
第2号住居跡 P-14  
第2号住居跡 P-16  
第2号住居跡 凹石出土状況  
配石遺構群  
写真図版 7 第1号配石遺構 サブレンチ調査状況  
第1号配石遺構 サブレンチ内遺物出土状況  
第2号配石遺構  
第3号配石遺構 検出状況  
第3号配石遺構 立石復元状況  
写真図版 8 第3号土坑 遺物出土状況  
第4号土坑  
第9号土坑  
第10号土坑  
第1号ピット  
第2号ピット  
第3号ピット  
調査風景  
写真図版 9 第1号住居跡 出土遺物  
第2号住居跡 出土遺物(1) -①  
写真図版 10 第2号住居跡 出土遺物(1) -②  
第2号住居跡 出土遺物(2)  
写真図版 11 第2号住居跡 出土遺物(3)  
第1号配石遺構 出土遺物(1)  
写真図版 12 第1号配石遺構 出土遺物(2)  
第1号配石遺構 出土遺物(3)  
写真図版 13 第1号配石遺構 出土遺物(4)  
第3号土坑 出土遺物  
写真図版 14 第4号土坑 出土遺物  
第2号ピット 出土遺物  
遺構外出土遺物(1)  
写真図版 15 遺構外出土遺物(2)  
写真図版 16 遺構外出土遺物(3)  
写真図版 17 遺構外出土遺物(4)  
遺構外出土遺物(5)

# 第1章 調査に至る経緯

今回埋蔵文化財発掘調査が実施された地域は、長野県との境をなす碓氷峠の麓に位置している。松井田町の歴史は碓氷峠を抜きにして語ることはできない。碓氷峠の東麓は、律令体制期の官道である東山道の坂本駅家、近世における中山道碓氷関所跡・坂本宿などが所在する町の歴史の表舞台となり続けた地域である。明治以降においてもこの状況は変わらず、明治26年太平洋側と日本海側を結ぶ大動脈として日本の近代化に大きな役割を果たしたアプト式鉄道が横川・軽井沢間を結んだ。このアプト式の鉄道は、昭和38年粘着運転方式の新線に替わり、さらにその新線も平成9年反戦新幹線開業に伴い廃止された。横川地域は峠越えの要衝として発展してきた地域だけに、信越本線横川・軽井沢間の廃止後のあり方が懸念されていた。

このような状況の中、松井田町を特徴づける当エリアの地域振興策の一として、横川・軽井沢間周辺整備基本計画が策定された。この中で、横川駅に隣接する「鉄道文化むら」の国内遊具施設として、同所から碓氷峠の森公園交流館「峠の湯」まで信越線の废線跡を利用してトロッコ列車を走らせる計画が打ち上がった。これが四大拠点の一点を連携する二点間輸送事業である。この事業の着手にあたり、平成15年6月27日、松井田町長（企画財政課）より松井田町教育委員会（以下教育委員会）に、峠の湯駅（仮称）建設予定地域内における埋蔵文化財確認のための試掘調査依頼が提出された。これを受け同年7月3日から19日にかけて教育委員会が試掘調査を実施したところ、部分的に繩文時代の遺構・遺物が検出された。

この保護について開発主体である松井田町と教育委員会で協議を重ね、①工事内容を変更することにより遺跡の保護が可能な部分については、内容変更による保護を図る。②工事に伴う掘削により遺跡が破壊される範囲は、発掘調査により記録保存を図る。③調査は教育委員会内に事務局をおく坂本塙下遺跡調査会（以下調査会）で実施することの3点で合意した。この後、松井田町と教育委員会で埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結した。また、両者で調査実務の民間機関への委託を申し合わせたうえで、調査会と毛野考古学研究所とで埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結し、平成16年1月19日発掘調査が開始された。



第1図 坂本塙下遺跡の位置

© 横川町編集部 1997.12.30 長野県教育委員会 164 号付印

## 第2章 地理的・歴史的環境

### 第1節 地理的環境

松井田町は群馬県の南西部に位置し、北方は倉渕村、東方は安中市、南方は妙義町および下仁田町、西方は長野県北佐久郡軽井沢町と接している。北西部・西部および南西部を山地で囲まれ、長野県との県境には北から旧碓氷峠、碓氷峠、矢ヶ崎峠、入山峠、和美峠などの峠がある。

本遺跡(1)はJR信越本線横川駅の北西約3.3km、坂本丘陵の北西端部に位置する。坂本丘陵は北西から南東にのびる細長い丘陵で、北東側を霧積川が、東西側を碓氷川がそれぞれ深い谷をつくって南東流している。霧積川は原付近で碓氷川に合流する。坂本丘陵の背後には、愛宕山(530m)・刎石山(710m)・子持山(1107m)が北西方向に向かって稜線をなし、かつては旧碓氷峠に至る中山道として利用されていた。さらに、遺跡南方には丁須の頭など裏妙義の俳谷が眼前に迫っている。刎石山は本遺跡から直線距離にして北西1.5km弱ほどの位置にあり、山頂部には500mほどの平坦面が形成されている。その下位からは板状もしくは柱状節理の安山岩が産出され、刎石(羽根石)という名称の由来になっているようである。なお、板状節理の安山岩は敷石住居跡の主要石材として多用されるものである。

また、本遺跡の西北西19kmには度重なる噴火をくり返してきた浅間山(2668m)がある。遺跡地からは背後にある愛宕山などによって眺望することはできないものの、調査地点では1108(天仁元)年の大噴火による浅間B型石の厚い堆積が確認されており、当地への被害の甚大さを物語っている。

ところで、本遺跡は信越本線の旧線と新線にはさまれた地点にある。信越本線高崎一横川間が開通したのは1885(明治18)年、横川一軽井沢間がアプト式で開通したのは1893(明治26)年のことである。1963(昭和38)年には新線が人線され、旧線が廃止となっている。その後、1997(平成9)年に長野新幹線の開業に合わせて横川一軽井沢間が廃止となり、残された線路のみが往時をしのばせている。また、旧線は整備され遊歩道として活用されている。

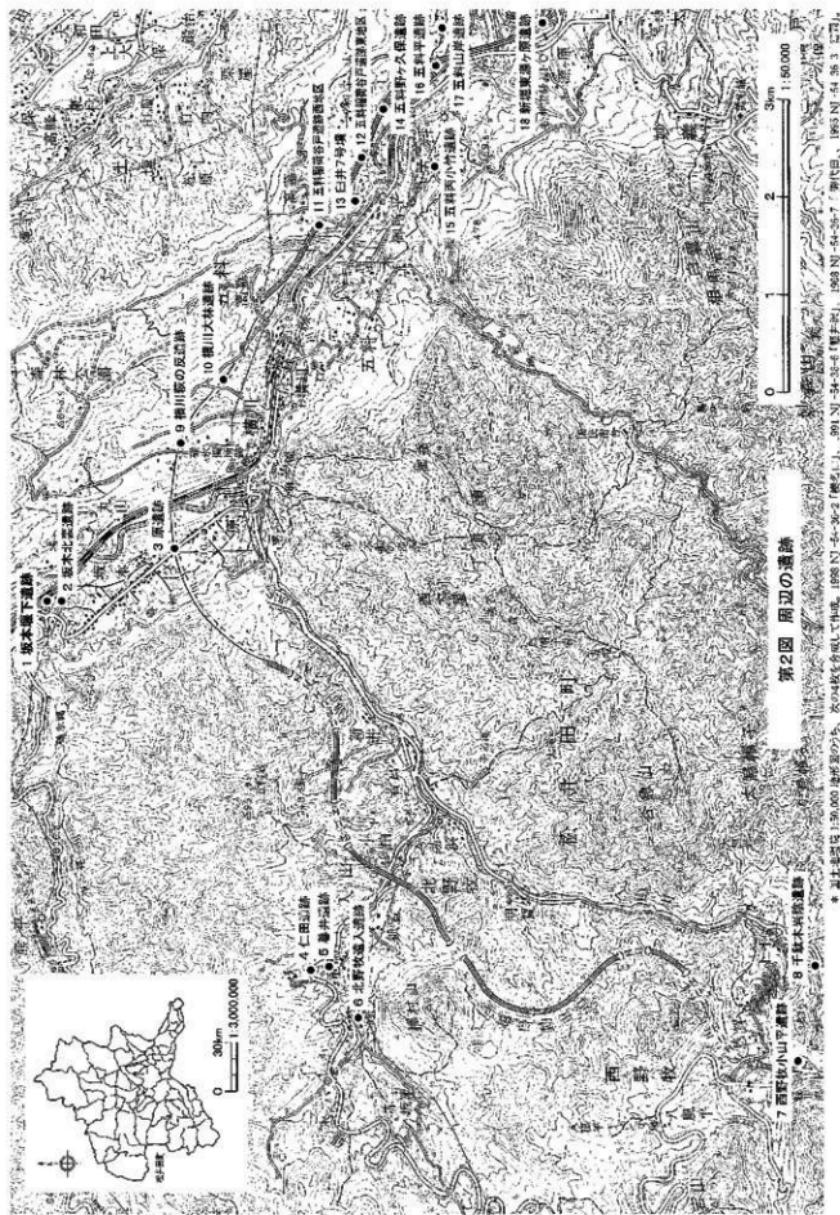
### 第2節 歴史的環境

本遺跡の所在する坂本は、律令期には東山道駅家が置かれ、近世には中山道の宿場として栄えた地である。上信越自動車道建設に伴って発掘調査された原遺跡(3)では、布堀り工法を用いた大形の掘立柱建物跡が検出され、東山道駅家の一部である可能性が指摘されている。

旧石器時代では細石刃核が碓氷川右岸に位置する行田大道北邊跡から出土している程度であるが、縄文時代以降では中近世に至るまで数多くの遺跡が周知されている。以下、本遺跡周辺の遺跡について縄文時代を中心概説する。

本遺跡近傍では南東方向200mほどの地点において坂本北裏遺跡(2)が調査されている。縄文時代中期後半～後期前半とみられる環状列石4基や敷石住居跡1軒などが検出されており、本遺跡との関連がうかがえる。

入山には、仁田遺跡(4)・暮井遺跡(5)・北野牧道入遺跡(6)がある。仁田遺跡では縄文時代中期末～後期前葉にかけての敷石住居跡4軒、暮井遺跡では後期初頭の敷石住居跡1軒や環状列石などが調査されている。なお、両遺跡とも平安時代の住居跡も調査されている。北野牧道入遺跡からは後期加曾利B式土器が検出されている。



第12図 周辺の道路

西野牧・恩賀には、縄文時代中期後半の石棒製作遺跡として全国的に注目された西野牧小山平遺跡(7)と群馬県指定史跡の千駄木岩陰遺跡(8)がある。西野牧小山平遺跡の石棒は最長1mを測る大形品で、原石・未製品・破損品・完成品が総計125点出土している。このほか、破片・剥片・石棒製作工具と想定される敲石、加曾利BIII式土器などが伴う状況で出土している。千駄木岩陰遺跡は妙義山から崩落した巨大な転石2石を利用した岩陰遺跡で、縄文時代前期～晩期・弥生時代・古墳時代前・中期の遺物が出土している。前述のような山間遺跡のほか、碓氷川の段丘上にも縄文時代の遺跡が分布している。

碓氷川左岸には、横川大林遺跡(10)や五料野ヶ久保遺跡(14)がある。横川大林遺跡は現在の横川サービスエリアの地点で、縄文時代早期後葉の絡条体圧痕文系土器を伴う土坑群・集石・焼上跡のほか、早期前半の住居跡5軒・前・中期住居跡4軒などが調査されている。さらに、黒曜石を主体とする石器製作関係の資料が大量に出土している。五料野ヶ久保遺跡では、縄文時代後期の配石遺構・配石墓28基が検出され、堀之内式・加曾利B式・高井東式土器が出土している。また、前期住居跡7軒・中期住居跡3軒・後期住居跡2軒・敷石遺構2基・集石土坑・埋設土器などのほか、奈良・平安時代の住居跡2軒も調査されている。碓氷川右岸には、五料西小竹瀬跡(15)や新堀東源ヶ原遺跡(18)などがある。五料内小竹瀬跡では、縄文時代中期の配石遺構1基のほか、平安時代の住居跡1軒が調査されている。新堀東源ヶ原遺跡は、縄文時代中期を中心とする集落遺跡で住居跡182軒・土坑1,030基などの遺構が調査されている。住居跡のうち3軒は早期押型文期のものである。また、前期初頭の花積下層式期の滑石製飾玉の製作状況も確認されている。さらに、弥生時代前～後期の遺物も出土しており、古墳時代終末期の古墳2基や平安時代の住居跡2軒などの遺構も検出されている。

このほか、地形図には明示できなかったが、新堀東源ヶ原遺跡遺跡の東方に行田梅木平遺跡および行出大道北遺跡が続いている。行田梅木平遺跡では、縄文時代中期～後期前葉にかけて形成されたとみられる配石墓群が3群検出されている。配石墓群は上部の列石と下部の配石墓（墓穴）から構成され、列石は弧状に配されている。同遺跡でも敷石住居跡が検出されているほか、縄文時代前期や弥生時代・平安時代の遺構・遺物も見られる。行出大道北遺跡は縄文時代前期を主体とする集落遺跡で、クッキー状炭化物や琥珀玉などの県内では稀少な遺物が出土している。また、後期初頭とみられる敷石住居跡も調査されている。なお、松井田町内での敷石住居跡は前述の遺跡のほか、国術森浦朝日遺跡や二軒在家二本杉遺跡などでの調査例がある。

縄文時代以外の遺跡では、本節冒頭でふれた原遺跡や横川萩の反遺跡(9)・五料船荷谷戸遺跡西地区(11)・向東地区(12)・臼井7号墳(13)・五料平瀬跡(16)・五料山岸遺跡(17)がある。横川萩の反遺跡では、焼失したとみられる平安時代の住居跡が調査されている。五料船荷谷戸遺跡では、奈良・平安時代の住居跡23軒・掘立柱建物跡4棟・大形構造遺構1条などが調査されている。大形構造遺構は道跡の可能性が指摘されている。臼井7号墳は東西10m・南北8m・高さ3mの終末期の円墳である。五料平遺跡は奈良・平安時代の集落遺跡で、住居跡7軒・土坑77基・溝4条・集石5基などの遺構が調査されている。遺物は、上野型短頭箭・圓面鏡などの須恵器が多量に出土しているほか、鍍銅鏡・刀子・鉄鏃・鐵矛・紡錘車などが見られる。五料山岸遺跡では、奈良時代の土坑1基・平安時代の住居跡1軒・須恵器片集中部1か所が調査されている。須恵器片集中部は廐棄場所と想定されている。

# 第3章 調査の方法と経過

## 第1節 調査の方法

試掘調査の成果などにかんがみ、遺構確認面を基本層序中の暗褐色土層上面と定め、その直上までは重機を用いて掘削した。その後、遺構の確認と調査は人力にて行った。現地実測の基準として方眼基準杭と基準点を設置し、各種測量図は手実測により縮尺1/20を原則として作成した。遺構の写真撮影には、35mmのモノクロ、リバーサルの各フィルム、およびデジタルカメラを使用した。

調査にあたっては、上記の杭とともにグリッドを設定し、遺構に伴っていないと判断された遺物については、このグリッドを採取位置の表示に用いた。また、住居跡付近の遺物についてはドット上げによる採取を行った。

遺跡の略号はSSとし、出土遺物の注記などにこれを用いた。遺物の取り扱いについては、接合にセメントインC、復元にエポキシ系樹脂、写真撮影に35mmと6×7判のモノクロフィルム、およびデジタルカメラをそれぞれ使用した。

## 第2節 調査の経過

発掘調査は、2004(平成16)年1月19日から同年2月28日にかけて実施された。調査日数は、のべ30日である。降霜と降雪に作業はしばしば整航したが、調査補助員の方により、全体としてはおおむね順調な経過であった。整理調査は同年3月19日から9月30日にかけて実施し、9月30日付で報告書を刊行した。以下、発掘調査の推移について概要を記す。

1月18日 調査開始に先んじ、仮設事務所・トイレ搬入。

1月19日 重機搬入。調査補助員を対象とし、関係者あいさつのち本遺跡調査のガイドンス。

1月20日 重機による表土掘削開始。暗褐色土層上面の露出を作業目標とする。ただし、大形礫が露出した箇所周辺の黒褐色土は残した。

1月28日 ジョレン用いた人力掘削開始。人力掘削の後半段階より本格的な遺構検出作業。人為的な礫の配列に加え、調査区南西部にて敷石が施された箇所を見いだす。また、調査区西侧においてピットが集中する箇所を確認。第1号住居跡として精査を進める。

2月9日 土坑・ピットの覆土半段開始。以後隨時、同覆土セクションの写真撮影、図化を行う。

2月12日 土坑・ピットの覆土完掘開始。

2月16日 配石遺構周辺の精査。

2月17日 遺跡全景の撮影、および写真測量用の撮影。

2月19日 配石遺構群のうち、エレベーション図を実測した範囲より、部材である礫の抜去、礫の下の調査を開始。調査区南西部にてピットが集中する箇所を新たに確認、至近範囲が柄鏡形(敷石)住居跡である可能性を認め、第2号住居跡と付称のうえ精査を進める。

2月26日 第2号住居跡、炉に対応する位置にある土坑を発掘、最下部より壇設土器とみられる深鉢の陶部破片と微量の焼土粒を検出。住居跡であることがほぼ確定する。またこの日、撤収の準備を開始。

2月27日 第2号住居跡のピット完掘状況の記録を主目的とする空中撮影、遺跡近景の撮影、および写真測量用の撮影。

2月28日 住居跡のエレベーション図作成を中心とする図化作業。仮設事務所など回送のもの撤収。

# 第4章 調査の成果

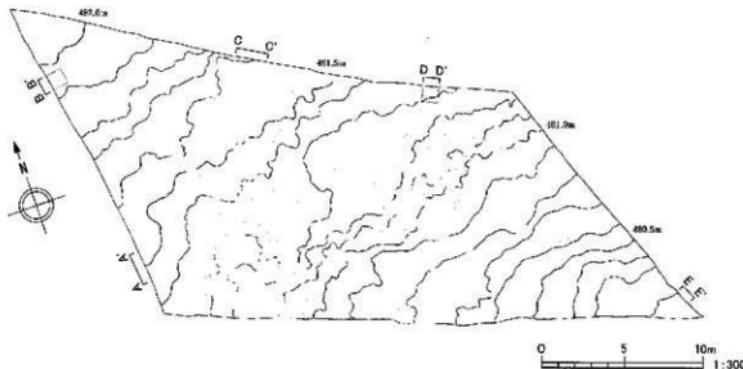
## 第1節 基本層序

今回の調査では、遺構覆土の出来を確認し、現在および往時における微地形の一端を復元することを主な目的とし、調査区縁辺の5か所にわたって壁面セクションの記録を行った。このうち第3図中のB-B' と D-D' の2か所については、およそ1m四方を遺構確認面より1m強掘り下げる形で、深層調査を行っている。

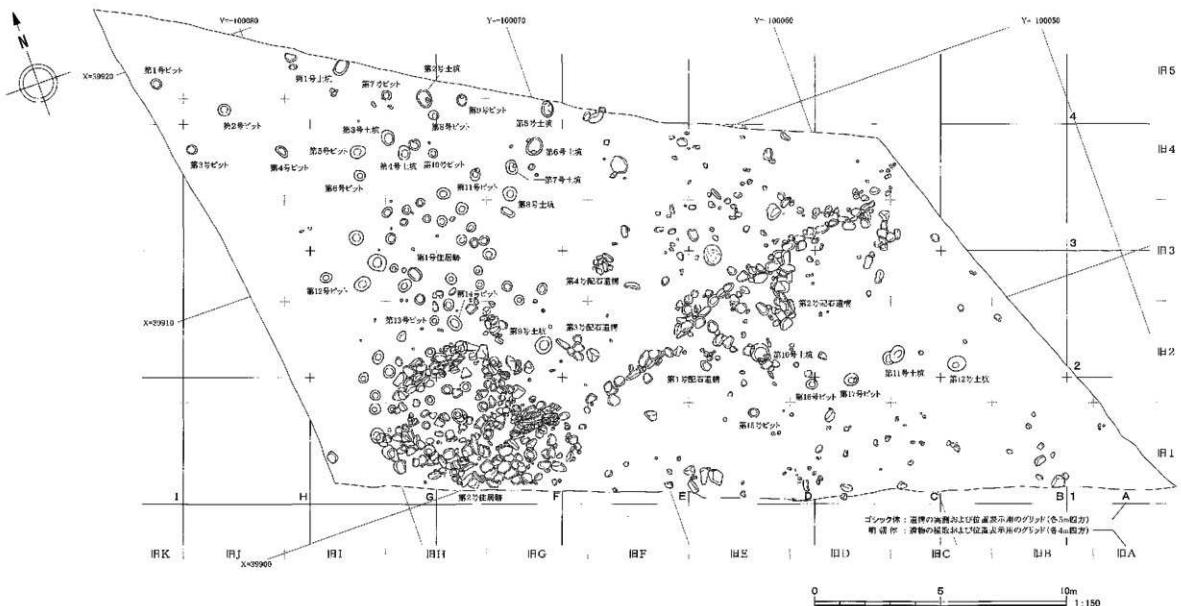
本遺跡は霧ヶ原川と碓氷川にはさまれた尾根状の丘陵上に位置する。縄文時代から現在までを通じ、調査区内の地形は概して北西から南東に向かってゆるやかに下ってゆく。ただし、調査区北西隅では、この傾向に反して第VI層および第VII層の下部がやや低いところに位置し、かつ層厚が50cm内外と他所の約2倍に及んでいる。また、下位の色調がやや明るく、含有するバミスが増加する点から、当該箇所におけるこれらの層はそれぞれ2層に細分される。以上のことから、縄文時代の当該箇所では、小さな谷に類する地形が形成されていた可能性がある。なお、第3図の等高線は、遺構確認面での起伏を表したものである。

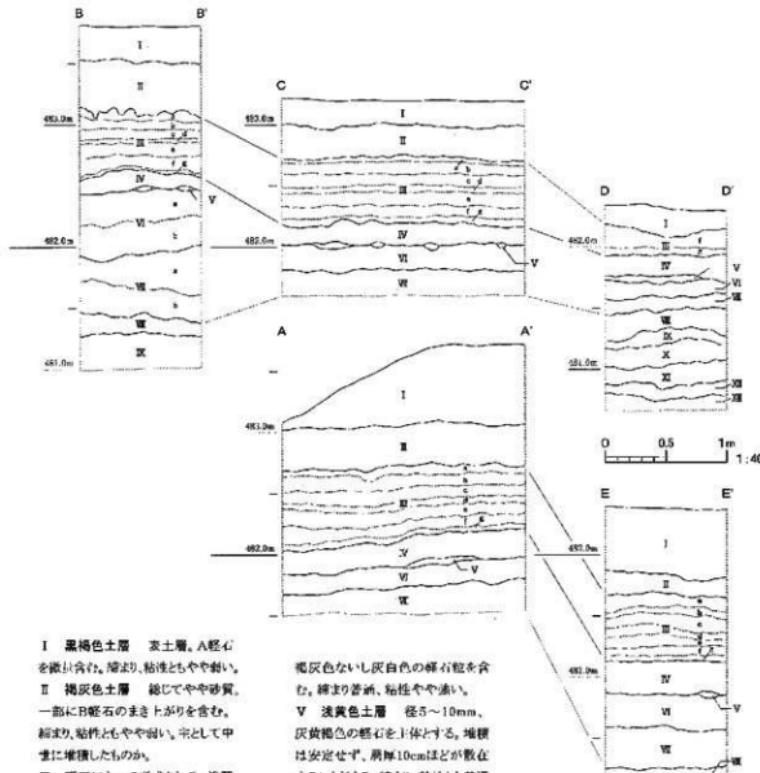
本遺跡の土層堆積状況のうち、第III層とした浅間B軽石層(As-B)の堆積が良好である点は特筆されよう。B軽石は調査範囲の全面に認められ、最大で70cm、後世の削平を受けたとみられる箇所でも10cm、平均にしておよそ50cmの層厚をもつ。近辺の山に限られ、本遺跡は直接浅間山を望む位置にないものの、浅間山噴火当時(1108年)の風向きなど、堆積に好適な条件がそろった結果と考えられる。また同層は、色調や含有物の粒径をもとに、7層に細分しうる。このうち最上のa層と最下のg層は砂質で、他は総じて発泡の度合いの高い軽石を主体とする。これらの層が示す差異は、浅間山の噴火活動の推移、すなわち時間に追って溶岩の質が変化していく過程を反映したものとみられる。一方、B軽石に比して浅間C軽石層(As-C)の堆積はごく低调で、第V層がそれに該当する可能性をもつものの、断定できない。

第VII層の最上部および第V層は、中期末～後期前葉と中期前葉～中葉の遺物をそれぞれ微量含む。これは試掘調査の所見より予測されていたことで、本調査にあたっては第VII層下部より遺構検出作業を開始し、第V層上面にて遺構の最終的な把握が行われた。



第3図 遺跡の微地形と基本層序(1)





- I 黒褐色土層 表土層。A輕石を多く含む。縮まり、粘性ともやや弱い。  
 II 暗灰色土層 緩じてやや砂質。一部にB軽石のまき上りが含む。縮まり、粘性ともやや弱い。字として中間に堆積したものか。  
 III 壓石によって形成される。浅間B相当層。縮まり、粘性ともなし。短期間(12世紀初頭)にて堆積した層であるが、本道跡では以下の特徴をもつ7層に細分できる。  
 a 梅灰色土層 砂質。層厚10mm前後。含有物の粒径は1mmほど。  
 b 反黄褐色土層 粒径5~40mmの颗粒状土体。  
 c 桃色土層 粒径5~30mmの颗粒状土体。  
 d 棕褐色土層 四層の中では最も暗い肉眼。粒径5~20mmの颗粒が主体。  
 e 灰褐色土層 粒径5~40mmの颗粒が主体。  
 f 淡黄褐色土層 粒径5~30mmの颗粒が主体。  
 g 棕灰色土層 砂質。層厚10mm前後。含有物の粒径は1mmほど。  
 IV 黑褐色土層 径5~10mm、

褐灰色ないし灰白色の軽石を含む。縮まり普通、粘性やや強い。  
 V 淡黄色土層 径5~10mm、灰褐色の軽石を上部とする。堆積は安定せず、層厚10cmほどが数段に亘る。縮まり、粘性とも普通。浅間C相当層(4世紀半ば)か。

VI 黒褐色土層 径2~5mmで赤褐色の軽石粒、および径2~10mmの黄褐色バミスを少々含む。縮まり、粘性とも普通。  
 VII 黑褐色土層 VI層に比べ色調が明るく、黄褐色バミスの含有量が減る。縮まり、粘性ともやや弱い。是下部において、高麗時代中期末~後期前期の遺物を微量包含する。  
 VIII 暗褐色土層 径2~10mmの黄褐色バミスを微量含む。縮まり、粘性とも強い。洪武時代中期前葉~中期の漆器を微量包含する。  
 IX 暗黄褐色土層 径2~10mmの黄褐色バミスを比較的多く含む。縮まり、粘性ともやや強め。

X 暗黃褐色土層 径5~20mmの黄褐色バミス、ロームブロックないしローム粒を多く含む。縮まり、粘性ともやや強め。  
 XI 暗黃褐色土層 ローム層。径5~20mmの黄褐色バミスおよび褐色バミスを多く含む。縮まり、粘性ともやや強め。  
 XII 灰黃褐色土層 XI層に比べバミスの含有量が減り、少变成なる。縮まり、粘性ともやや強め。  
 XIII 黑褐色土層 バミスの含有量がさらに減る。縮まり、粘性ともやや強め。

第5図 遺跡の微地形と基本層序(2)

## 第2章 検出された遺構と遺物

### (1) 概 要

調査の結果、遺構として敷石(梢鏡形)住居跡2軒、配石遺構4基、土坑12基(うち1基は埋設土器を伴う)、ピット17基、および遺物では縄文土器約2,600点、石器19点、土製品9点、石製品1点の検出をみた。構築ないし廃絶時期の想定が可能な遺構の大多数は、縄文時代後期初頭～前葉に属する。一方、遺構外出土もあわせた遺物の内容は、縄文時代前期後葉から後期前葉までの時期幅をもっており、上記以前の時期にも当地がなんらかの形で生活の場として用いられていた可能性を示唆している。

遺構・遺物の分布状況をみると、住居跡を含めた配石(敷石)を伴う遺構群がおおむね1軒の弧をなして展開するほか、その近辺で遺物の分布が密になる。その反面、北に向て凸となる弧状の遺構群の内側(南側)では、遺物の分布が希薄となる。土坑・ピットについては、やはり上記遺構群の近くに多く位置するように見えるが、有意な傾向としてとらえうるかどうか、判断としない。

### (2) 住 居 跡

#### ・第1号住居跡

位 置： I-G 2・3区、南の第2号住居跡と接するように位置する。遺構確認面の標高は481.4～481.5m、主軸方位は判然としないが、N 20°W 前後と推測される。

残存状態： 基本層序の第VII層(黒褐色土層)レベルでは平面プランは確認できず、また掘り方レベルでの精査を試みたが、壁面の立ち上がりを把握することはできなかった。遺物の分布状況から遺構のおおまかな規模と範囲を類推し、付随するピットを複数検出したことから、住居跡と認定した。

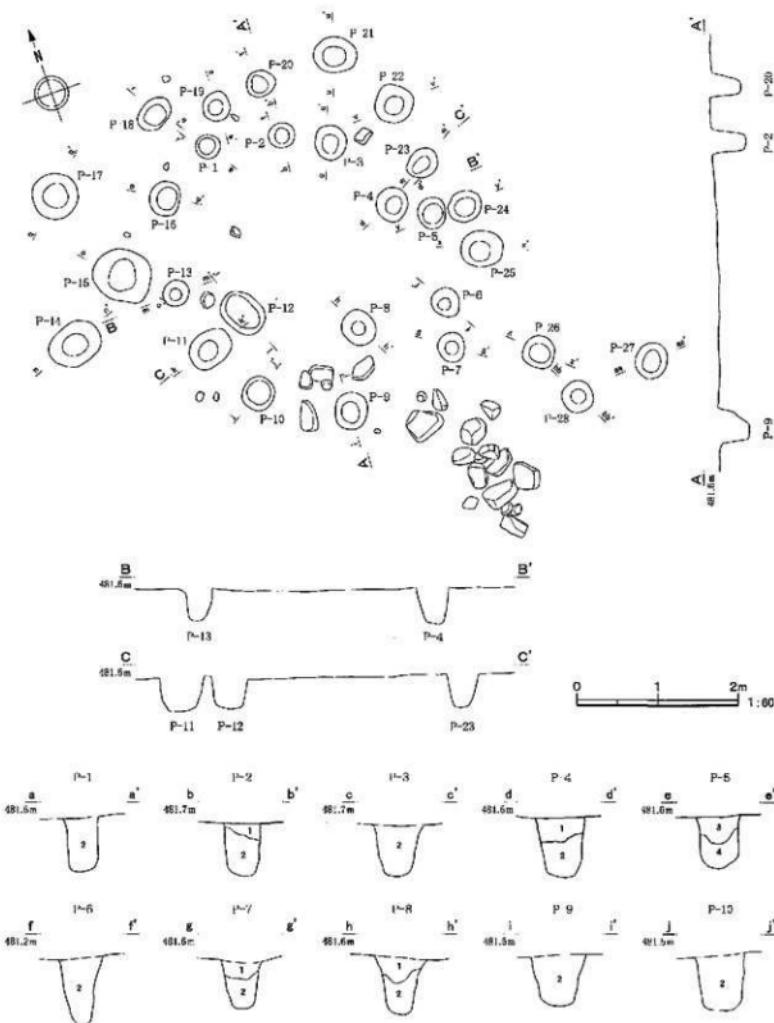
形 態： 上記の残存状態により、平面および断面形の詳細は不明であるが、後述するピットの配置状況から、平面梢鏡形を呈するものと推測される。

規 模： ピットの集中箇所を基準とし、主体部と張出部をあわせて長軸約8.5m、短軸約6.6mと推測される。

付帯施設： おおむね環状に分布するピット28基前後が、柱穴に相当すると考えられる。直径40.0cm、深さ50.0cmを上回る、しっかりとしたつくりのものが大半を占める。また、壁柱穴の内側にもう1群が、環状または方形をなして配置されているように見える。穴の角度が住居の上部中央へ向て顕著に傾く例は見受けられない。なお、埋甕など、他種の付帯施設は確認されなかった。

その他の所見： 明確な敷石は検出されていない。とくに、円形にピットがめぐる範囲の内側、すなわちおおむね主体部に相当すると見られる箇所では、比較的高いレベルでも礫は皆無に等しかった。ただし、本遺構西部において残っていた礫10箇点は、連結部および張出部の敷石に相当する可能性がある。

また、ピットのうち、かなり高い割合で内部から礫の検出される例が見受けられた。これをもって、本米は主体部縁辺にあつた敷石や周縁が、なんらかの原因により転落した結果とみるのも不可能ではない。しかし、用途に適さない形状の礫が多い点、ピットの壁面に突き刺さったような状態で検出される例が多い点、さらに地山である第Ⅳ層中に自然の転石が少なからず含有されている点から、これらの礫のほとんどは遺構建築物に属さないものと解釈したい。



#### 1 黄褐色土層

粒径3~6mmの灰白色粒、2mm前後の赤褐色粒をそれぞれ散在含む。緻まり、粘性とも強い。

#### 2 灰褐色土層

粒径2~6mmの黄褐色粒を多く、3mm前後の灰白色粒、1mm前後の赤褐色粒をそれぞれごく微量含む。緻まり、粘性とも強い。

#### 3 灰褐色土層

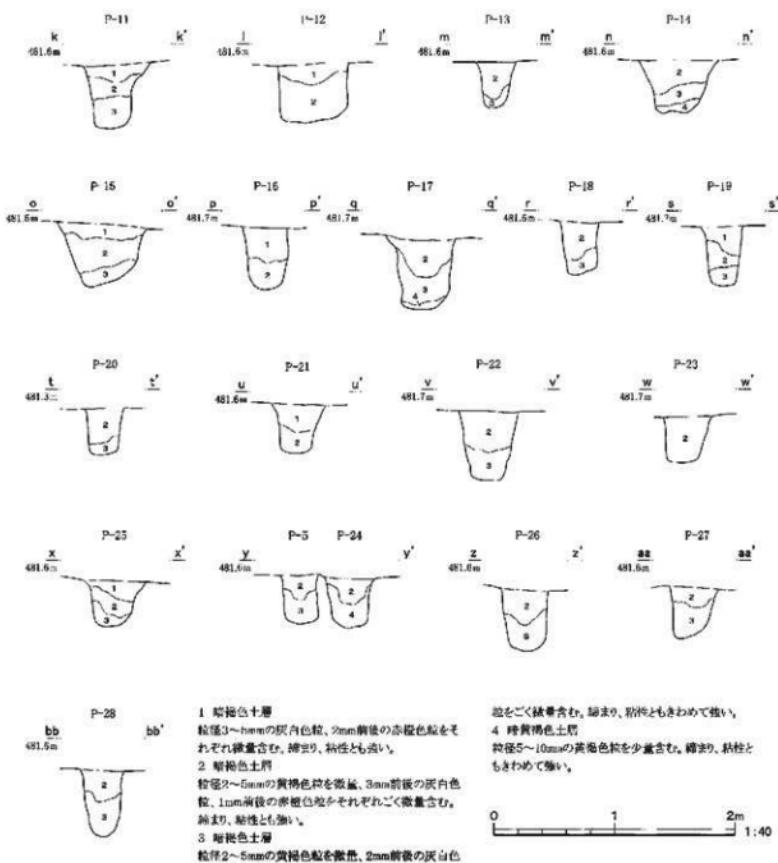
粒径2~5cmの黄褐色粒を微量、2mm前後の灰白色粒をごく微量含む。緻まり、粘性ともさわめて強い。

#### 4 灰褐色土層

粒径5~10mmの黄褐色粒を少々含む。緻まり、粘性ともさわめて強い。

0 0.5 1m  
1:40

第6図 第1号住居跡実測図(1)

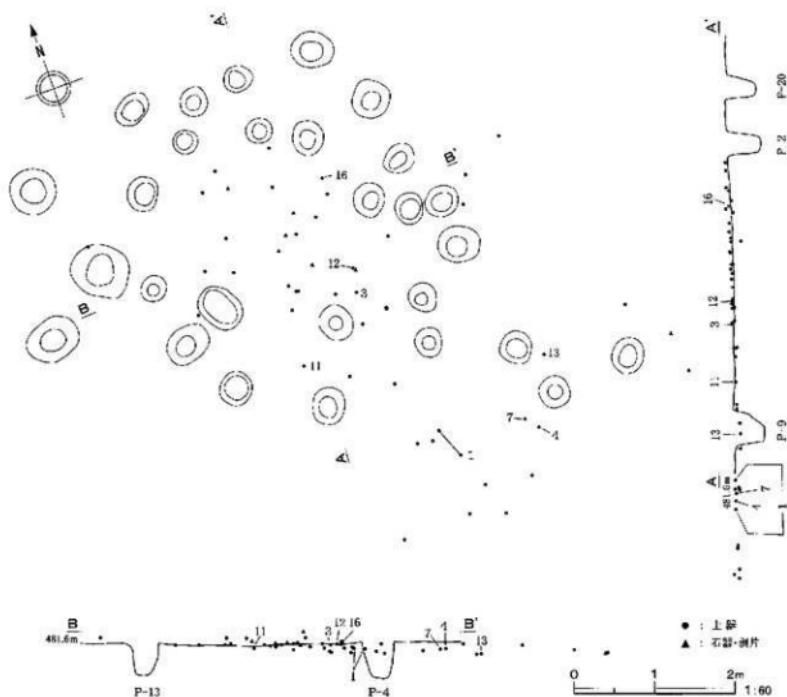


第7図 第1号住居跡実測図(2)

**出土遺物：** 土器破片 101点、剥片3点が出土した。遺物は主体部と想定される範囲に集中するほか、上述した張出部に相当する可能性がある位置にも散在している。見つかった時点での調査の追跡状況から判断して、遺物のほとんどが、標高ではなく掘り方レベルでの出土と考えられる。土器破片の総重量は1,556.7g、破片1点あたり15.4gあまりの計算となるように、そのほとんどが小片であった。なお、剥片の石質の内訳は、黒曜石2点、チャート1点となっている。

第9図に、出土した土器破片の実測図および拓影図を掲げた。遺物の主な製作時期は後期初頭から前葉まで、土器型式にしてほぼ3型式分の幅（称名寺1式～堀之内1式）を示す。ただし、加曾利R IV式と堀之内2式の例もわずかに含んでいる。

1・2の口縁部破片、および9・10の胴部破片は称名寺1式。円孔をもつ把手の内側に、1では円形削突



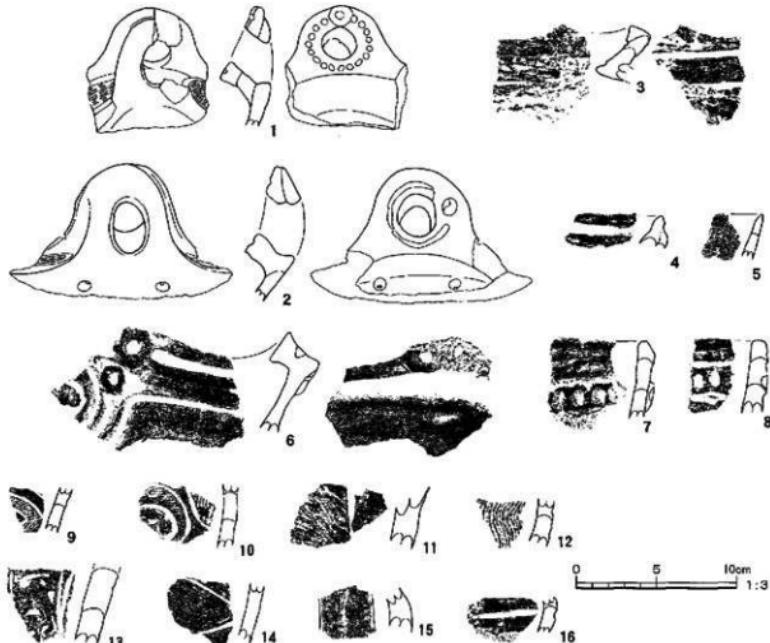
第8図 第1号住居跡遺物分布図

文、2では沈線がそれぞれC字状にめぐり、これに1例の瘤状貼付文ないし凹点が組み合わせられる。称名寺2式において発達する萬紋連繋沈紋（鈴木 1991）の先行的な形態と見なしうる。7・8の口縁部破片は、称名寺式期の粗製土器か。口縁部付近の鋸状隆帯、およびそれに類する意匠を沈線および刺突にて表現する例は、前橋市荒砥二之塙遺跡（石坂 1985）などに類例がある。11も同時期の粗製土器とみたが、あるいは加曾利E IV式に含めるべきかもしれない。12の縦位に蛇行する条線は、中期後葉から後期前葉までの深鉢（ないし鉢）胴部にしばしば用いられる加飾で、破片のみで細別時期を判断するのが難しい。

4～6の口縁部破片および13の胴部破片は、壠之内1式と考えられる。4、6では、口縁部付近に見られる1条の横位沈線が分類上の手がかりとなる。14の胴部破片は、壠之内2式の深鉢。幾何学文の一部が認められる。文様は、いわゆるアサガオ形の深鉢によく用いられるものであるが、くびれをもつ深鉢の胴部中位となる可能性もある。

15・16は、深鉢以外の器形とみられる個体。15は、加曾利E IV式～称名寺式の間に見られる鉢の把手。16は、浅鉢ないし鉢の胴部破片。器面の色調は後期中葉の加曾利B1式にも似るが、壠之内2式か。

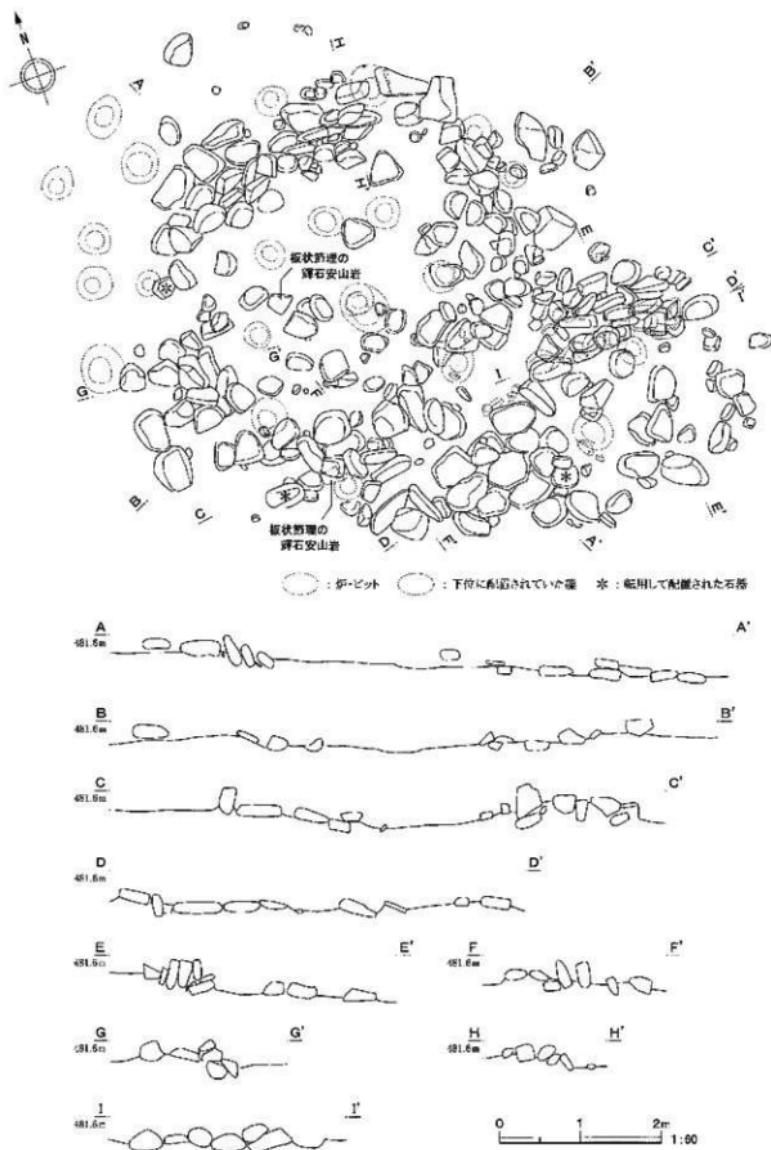
時期：断片的に把握しうる住居跡の特徴、掘り方・ベルより出土した遺物の内容から、縄文時代後期前葉に構築および廃絶されたものと推測される。



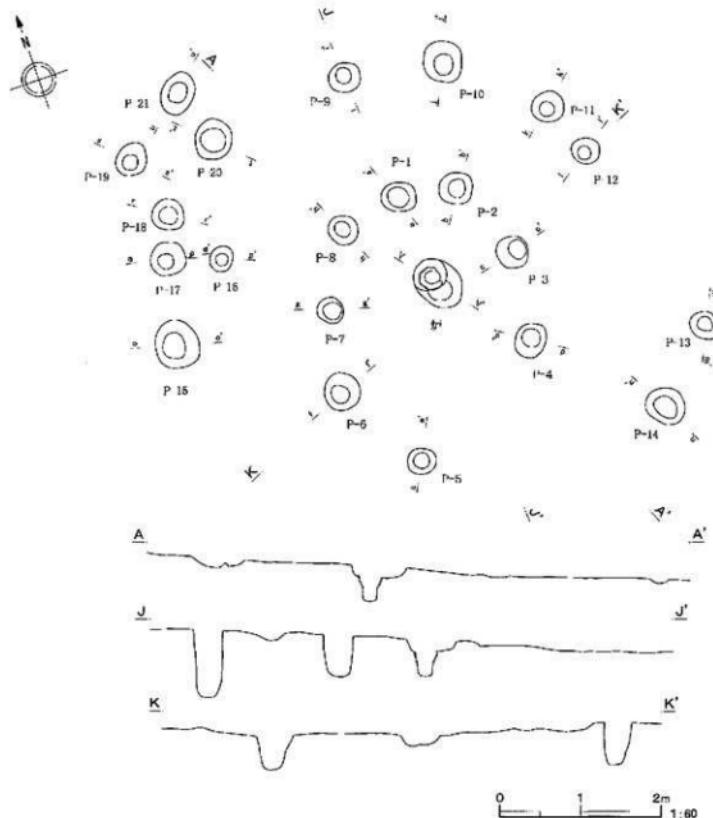
第9図 第1号住居跡出土遺物

No.	器種	計測値(cm)/現存	器形・文様などの特徴/備考	色調(外)	色調(内)	新上	計記
1	骨鉢	/把手部	直紋把手下部を削除して接合。内縁部に圓文竪文及び、沈底孔。内面、刃の両面に刃突起。頂部に直紋柄矢付。	黒色	墨色	石英、角閃石、白色 粒、滑面凹凸	P17
2	骨鉢	/把手部	直紋把手下部を削除して接合。内縁部は圓文竪文後、沈底孔。内面、刃の両面に刃突起。向かって右側に向突文。/把手部分下部は焼成後剥落。	にじむ青褐色	墨褐色	石英、晶葉石、白色 粒、漆面凹凸	124
3	骨鉢	/口縁部	口縁部内側に突出し突起部に向かう。内面に横位北緯2条。	にじむ青褐色	褐色	石英、角閃石、白色粒	107
4	骨鉢	/口縁部片	外面、口縁部に沈底孔。/内外面凹凸。	暗赤褐色	暗赤褐色	石英、晶葉石、白色粒	3
5	漆鉢	/口縁部片	断片内に残文。/化粧片もしくは生地片の可能性あり。	にじむ青褐色	にじむ赤褐色	角閃石、白色粒、漆面凹凸	P25
6	漆鉢	/口縁部片	口縁部は内側に逆曲。直紋把手付、漆面沈底孔および沈底孔。	にじむ青褐色	暗赤褐色	石英、晶葉石、白色粒	P17
7	漆鉢	/口縁部片	直紋把手付。	褐色	灰黄褐色	石英、晶葉石、白色粒	8
8	漆鉢	/口縁部片	横位沈底孔内側に埋立痕文。	黒色	灰黄褐色	石英、晶葉石、白色 粒、チャート	P17周辺 粒、チャート
9	漆鉢	/刷毛片	沈底区画内に埋入。	黒褐色	にじむ赤褐色	石英、晶葉石、白色粒	P11
10	漆鉢	/刷毛片	沈底区画内に埋文。	にじむ、赤褐色	墨褐色	白色粒、角閃石	一例
11	漆鉢	/刷毛片	埋文張、太めの底盤、埋文張り落し。	にじむ、黄褐色	黒色	石英、角閃石、白色粒、漆感	123
12	漆鉢	/刷毛片	波紋多角文。/内面は1半分なみ。	にじむ、褐色	墨褐色	石英、晶葉石、白色 粒、チャート	108
13	漆鉢	/刷毛片	沈底区画内に死立痕文。	にじむ、褐色	にじむ、黄褐色	角閃石、白色粒	138
14	漆鉢	/刷毛片	沈底区画内、埋文張り落し。	にじむ、赤褐色	墨色	石英、晶葉石、白色粒	P13
15	漆鉢	/把手補片	直紋把手。底盤沈底孔。	黒褐色	墨褐色	石英、晶葉石、白色 粒、漆感	一例
16	漆鉢	/把手補片	横位沈底孔。/内外面凹凸。	黒褐色	墨色	黑色粒、白色粒	110

第1表 第1号住居跡 出土遺物観察表



第10図 第2号住居跡実測図(1)



第11図 第2号住居跡実測図(2)

#### 第2号住居跡

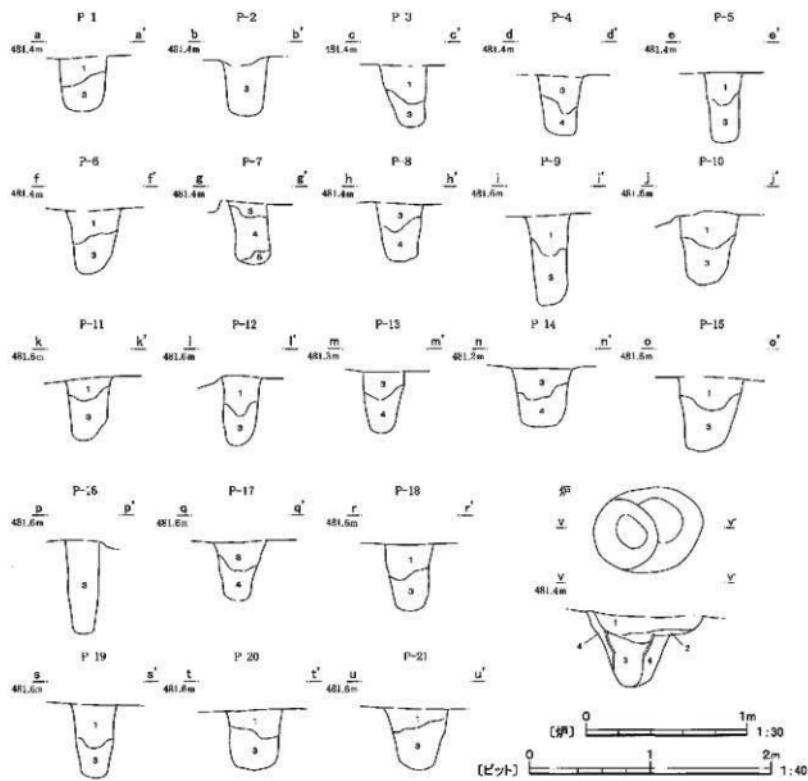
位 置 : F・G 1・2区、北の第1号住居跡、および東の第1号配石遺構と接するように位置する。遺構の露面の標高は481.0～481.4m、主軸方位は第1号住居跡と同じ、N-20°-W前後である。

残存状態： 基本層序の第VII層（黒褐色土層）上面を掘削し始めた当初から、すでに敷石らしき礫が当該箇所にて多數露出しており、その時点では調査担当者は配石遺構の一部と認識していた。しかし、ほどなくして現れたのは、平面柄鏡形に配置された砾であった。精査を進めたところ、柱穴に相当するピットと土器埋設炉が検出され、敷石（柄鏡形）住居跡であることがほぼ確定した。

形 態： 磯とピットの配置状況から、平面柄鏡形の敷石（柄鏡形）住居跡と見なされる。主体部の縁辺を固める礫の配置状況は、円形と方形の中間のような形状を呈する。また、主体部のうち連結部付近では、左右にまっすぐのびる配石があり、弧状の第1号配石遺構と連続するような形勢をとる。

規 模： 磯が配置された範囲、ピットの集中範囲とも、長軸約7.5m、短軸約6.0mを測る。

付帯施設： 主体部の中央にて土器埋設炉が検出された。掘り込み上部の平面形は南北に長い梢円形を



1 灰褐色土層

粒径3~5mmの灰白色粒、2mm前後の赤褐色粒をそれぞれ微量含む。締まり、粘性とも強い。

2 赤褐色土層

粒径3~5mmの灰白色粒、2mm前後の赤褐色粒、および2mm前後の黒土粒をそれぞれ微量含む。締まり、粘性ともやや強い。

3 灰褐色土層

粒径2~5mmの黄褐色粒を微量、3mm前後の灰白色粒、1mm前

後の小橙色粒をそれぞれごく微量含む。締まり、粘性とも強い。

4 灰褐色土層

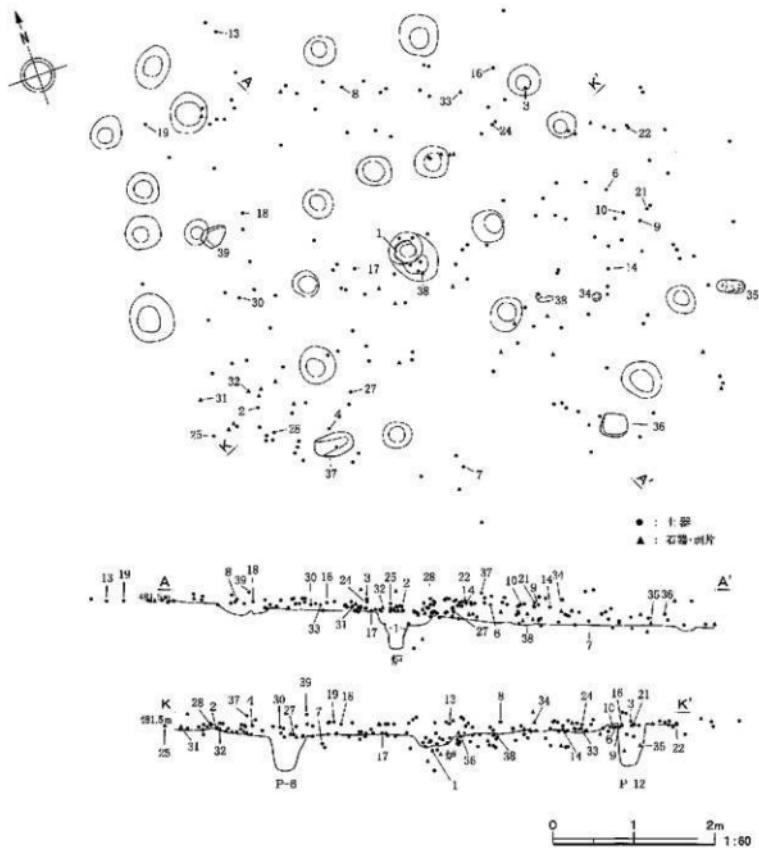
粒径2~5mmの黄褐色粒を微量、2mm前後の灰白色粒をごく微量含む。締まり、粘性ともときわめて強い。

5 灰褐色土層

粒径5~10mmの黄褐色粒を少量含む。締まり、粘性ともときわめて強い。

第12図 第2号住居跡実測図(3)

呈し、長径67.0cm、短径52.0cm、深さ15.0cmを測る。掘り込み下部は土器を擗えるための掘り方となつておらず、炉の北部に偏る。東西にやや長く、長径44.0cm、短径38.0cm、深さ30.0cmとなる。土器は深鉢の胴部中位で、細かく割れた状態ながら原位置をとどめており、全周の4分の3ほどが残っていた。炉の覆土は4つの層に細分され、このうち2層では微量の洗土粒が認められた。3・4層を分かつ線の形状から、埋設当初は出土部位より下まで残存していた可能性がある。反面、口縁部付近が本来残っていたかどうかは不明である。



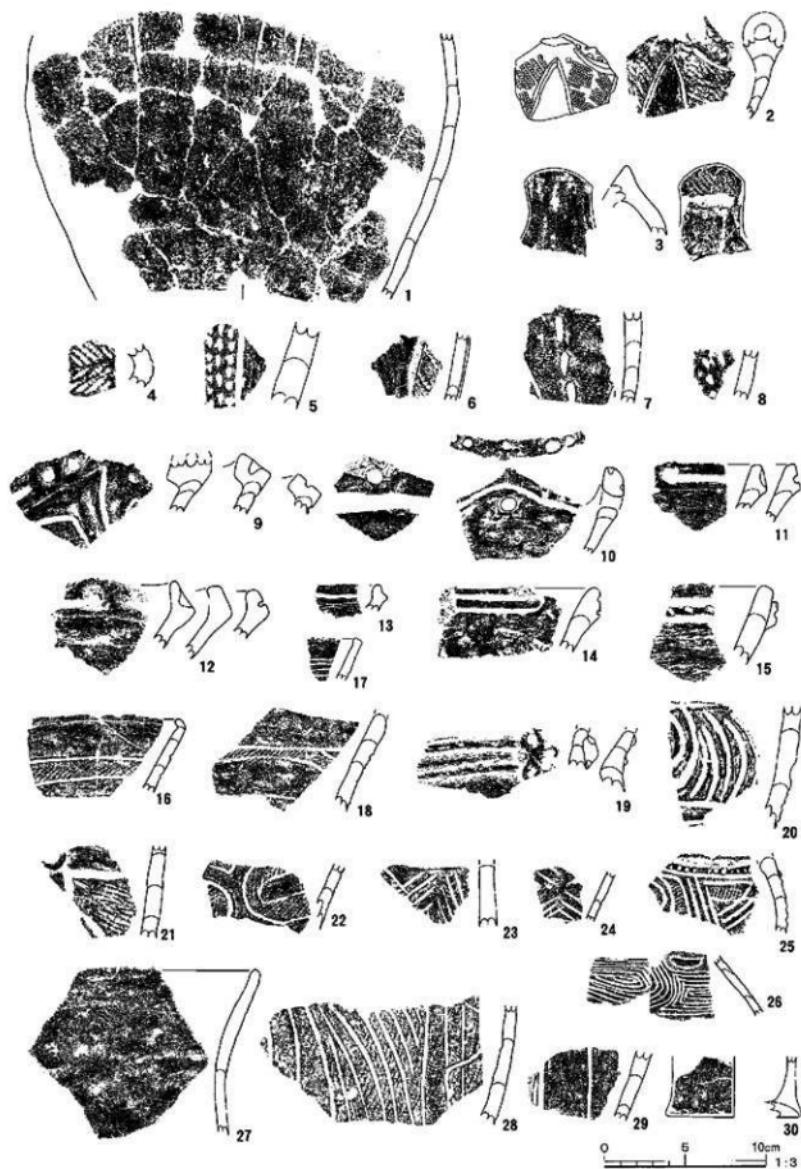
第13図 第2号住居跡遺物分布図

また、おおむね環状に分布するビット21基前後が、柱穴に相当すると考えられる。直径40.0cm、深さ50.0cmを上回る、しっかりとしたつくりのものが大半を占める。壁柱穴の内側にもう1つ、環状のビット群が配置されているように見え、そのようすは第1号住居跡に比べより顕著である。

なお、埋甃など他種の付帯施設は確認されなかった。

その他の所見： 遺跡の微地形とあいまって、住居は南向きの出入り口から北の奥に向かい、さらに東から西に向てもゆるやかな上り坂となっていたものと考えられる。

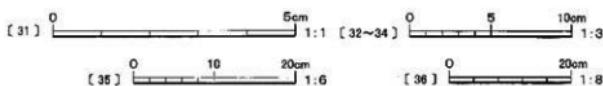
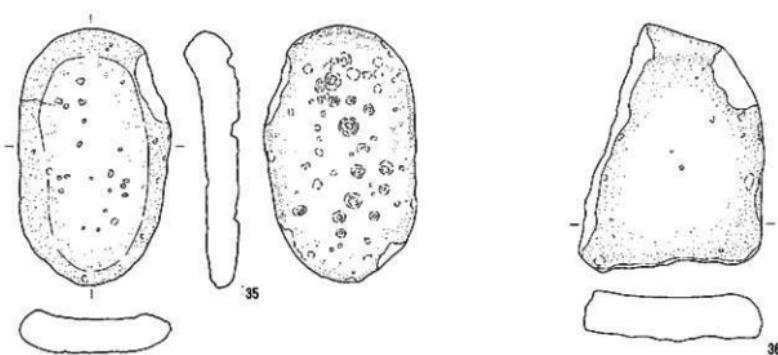
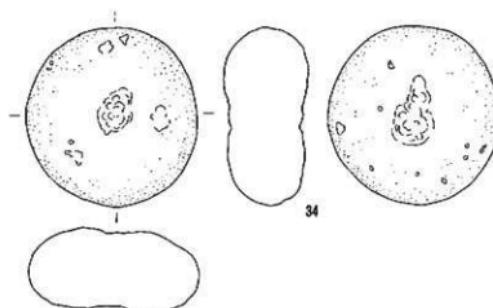
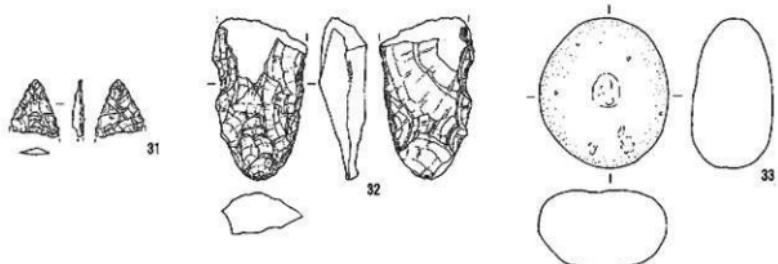
礎の配置状況には、①通例のように礎を平らに敷き詰めるものと、②立てかける、もしくは積み上げて礎を並べるものとの2者が認められる。①の状況は、南部の張出部で確認されるにすぎない。一方②は、本住居跡の主体部縁邊にて著しい。先述した連結部付近と奥にみられる礎の配置からは、念入りに行われた跡がうかがえる。とくに、前者では礎を3段前後積み上げられ、最も下の礎は丁寧に並べて埋め込まれていた。



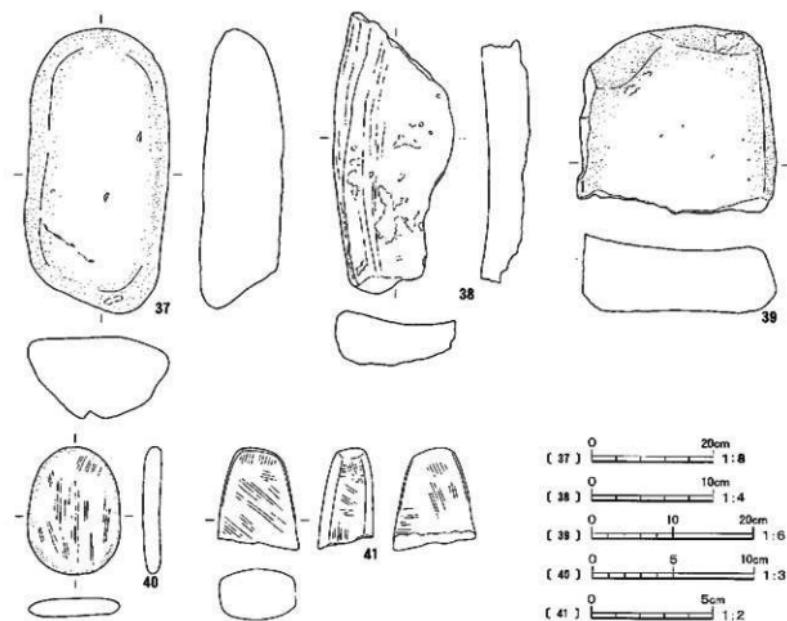
第14図 第2号住居跡出土遺物(1)

No.	器物	其類似 (cm) / 順番	剖面・文様などの特徴 / 備考	色調 (外)	色調 (内)	粘土上	注記
1	深鉢	/ 扇形片	盤文、内外面に模様があるが、表面平たく窪れる。網目状浮き寸27.0cm。	褐色	褐色	石英・黑色粒・白色粒	伊周
2	鉢	/ 口縁部片	把手部を欠損。把手部下は斜文後、「八」字に底線区画、幾文網目状浮き寸。口縁部に円形切妻文。	に赤い褐色	に赤い褐色	石英・角閃石・白色粒	91
3	鉢	/ 把手部片	口縁部につけられた網状把手。把手部斜文。	に赤い褐色	に赤い褐色	石英・黑色粒・白色粒・チャート	115
4	深鉢	/ 把手部片	網状把手部分。外型に模文。	明褐色	明褐色	石英・黑色粒・白色粒	128
5	深鉢	/ 制鉢片	底縁部区内に両面文を有する。	に赤い褐色	に赤い褐色	石英・角閃石・白色粒	一柄
6	深鉢	/ 脱鉢片	底径強張の陽溝文。模文後、底縁に沿って浮き。	に赤い褐色	褐色	角閃石・白色粒	136
7	深鉢	/ 脱鉢片	LH 模文後、底縁区画1、さらに側面状の刃状痕。	墨褐色	深黄褐色	石英・黑色粒	170
8	深鉢	/ 脱鉢片	側面刺突文。	に赤い褐色	に赤い褐色	石英・黑色粒・白色粒	83
9	深鉢	/ L 壁部片	突起の頂部欠損。口縁部は内側に斜めする。白線部に斜い網状文と汎施。外側は沈落文。内側は底縁に斜文。	灰青褐色	に赤い褐色	石英・角閃石・白色粒・チャート	103
10	深鉢	/ 口縁部片	底状V線。口縁部に円形刺突文。口縁部に沿って浮き。底縁部下に円形孔。	墨褐色	深黄褐色	角閃石・白色粒	104
11	深鉢	/ 口縁部片	口縁部に円形切妻文と連溝文。	灰青褐色	に赤い褐色	石英・角閃石・白色粒	一柄
12	深鉢	/ L 壁部片	内側するらかに底状凹線。円形刺突文と連溝文。	暗灰色	灰青褐色	白色粒・白色粒	一柄
13	深鉢	/ 口縁部片	口縁部内側する。口縁部に底状V線。	に赤い褐色	に赤い褐色	石英・白色粒・黑色粒	78
14	深鉢	/ 口縁部片	口縁部に長方形状に沈落。	褐灰色	灰青褐色	黑色粒・白色粒・チャート	112
15	深鉢	/ L 壁部片	横室比鉢のある底縁上位に斜位の刺突文。	に赤い褐色	に赤い褐色	石英・黑色粒・白色粒・赤褐色	P11
16	深鉢	/ 口縁部片	口縁部は短く内傾する。口縁部下の横紋底縁区画内に網文。	灰青褐色	に赤い褐色	白色粒・チャート	114
17	深鉢	/ 口縁部片	口縁部内側に突出する。口縁部下に横位沈落4点。	に赤い褐色	黑色	黑色粒・白色粒	153
18	深鉢	/ 壁部片	底縁区画後、側文先端。	黒褐色	に赤い褐色	石英・黑色粒・白色粒	67
19	深鉢	/ 壁部片	2条の横筋上に上下左右に円形刺突のある貼付文。	に赤い褐色	褐色	石英・黑色粒・白色粒・赤褐色	85
20	深鉢	/ 壁部片	横室比鉢側面に横溝状沈落。	浅灰褐色	に赤い褐色	石英・角閃石・赤褐色	一柄
21	深鉢	/ 壁部片	底縁区画後、側文先端。	褐色	に赤い褐色	石英・チャート	102
22	深鉢	/ 壁部片	底縁区画内に側文先端。	に赤い褐色	黑色	片岩・黑色粒・チャート	28
23	深鉢	/ 壁部片	連続V字状の沈落。	に赤い褐色	黑色	角閃石・白色粒	61
24	深鉢	/ 壁部片	底縁区画後、側文先端。外側に斜位孔。	黑色	黑色	白色粒・白色粒	95
25	深鉢	/ 壁部片	側坑のある底縁下に横縫斜文字。赤褐色文。	褐色	灰褐色	石英・角閃石・白色粒	59
26	片口 上面	/ 壁部片	両文後、直角内側状および直角方形状などの沈落。外側丁寧な七方孔。	黑色	暗灰褐色	白色粒・黑色粒	基
27	深鉢	/ 口縁部片	口縁部はゆるやかに外反し、端部わずかに内傾。無文。	褐色	明褐色	石英・黑色粒・白色粒	155
28	深鉢	/ 壁部片	模文後、魚鱗状・網状・蛇形・蛇行沈落。外側に斜位孔。	黑色	褐色	石英・黑色粒・白色粒	51
29	深鉢	/ 壁部片	横溝状沈落。	褐色	に赤い褐色	石英・黑色粒・白色粒	5
30	深鉢	底透:(5.4)/ 壁 下段～底部内	底部から外反して立ち上がる。無文。	明赤褐色	に赤い褐色	石英・黑色粒・白色粒・赤褐色	64

第2表 第2号住居跡 出土遺物観察表(1)



第15図 第2号住居跡出土遺物(2)



第16図 第2号住居跡出土遺物(3)

No.	名 称	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石 材	江 池	備 考
31	石盤	[24.1]	[19.5]	0.6	[0.2]	輝石岩	171	基部欠損。
32	スクリーパー	[9.9]	[5.75]	2.9	[181.5]	黒色安山岩	90	上部欠損。
33	裏面・圓石	9.2	7.9	5.0	331.6	輝石安山岩	94	圓石→碎石。
34	裏面・碎石	11.0	10.55	5.2	708.5	輝石安山岩	20	裏面底にくぼみ。表面は磨石に使用。
35	石皿・多孔石	31.9	18.9	5.8	4009	輝石安山岩	212	裏面に多孔。
36	石皿	[40.6]	[30.6]	[14.3]	20800	輝石安山岩	205	人形皿。
37	石皿	46.8	24.9	13.8	23600	輝石安山岩	206	大形皿。
38	石皿	[23.1]	[16.6]	4.0	[433.05]	緑泥片岩	211	
39	石皿	[23.55]	[24.9]	9.6	[9986]	輝石安山岩	227	人形皿。
40	研磨具	7.5	9.50	1.1	74.0	輝石安山岩	16	全体的に平滑。
41	扁平石斧	[1.2]	[3.1]	[2.3]	54.7	緑色岩類	14	基部のみ残存。

第3表 第2号住居跡 出土遺物観察表(2)

なお、遺構構築物として用いられている礫の中には、石皿を転用したものが5点（うち片面で多孔石を兼ねたもの1点）、板状節理を特徴とする輝石安山岩の礫が2点含まれていた。後者の板状節理を特徴とする輝石安山岩は、本遺跡より北西1.5km弱に位置する剣石山付近にて産出されるもので、木遺跡において自然礫として確認された例は皆無である。この2点の礫は、標高差にして200m前後、しかも今日なお急峻な碓氷の地まで、特定の石材を求めて人の往還が行われていたことを示唆しており、興味深い。

また、第1号住居跡のピット内部から砾の検出される例が多い旨前述したが、本遺構でも同様の傾向が認

められた。それに対する解釈も同様で、これらの種のほとんどは遺構構築物に該当しないものであろう。

出土遺物： 1・器破片 461 点、石器 11 点、剥片 10 点が出土した。遺物は主体部と想定される範囲、および連結部と第1号配石遺構を結ぶ線上に集中する。検出時点での調査の進捗状況から判断して、遺物の大半が表面ないし掘り方レベルでの出土と考えられる。

土器破片の総重量は 6,989.5g、破片 1 点平均 15.2g 弱となり、そのほとんどが小片であった。主な製作時期は後期初頭から前葉まで、土器型式にしてほぼ 4 型式分の幅（称名寺 1 式～堀之内 2 式）を示し、なかでも堀之内 1・2 式の割合が高い。ただし、中期末の加曾利 E・IV 式の例もわずかに含む。

第 14 図 1 は、炉に埋設されていた深鉢の胴部破片である。遺構の帰属時期を知るうえで重要な位置から出土した遺物であるが、遺存範囲において無文で、残念ながら細別時期を断定することができない。とはいっても、胎土の特徴、本遺構にて出土した他の土器を参照する限り、堀之内式に属することは確かである。

2～8 は、中期後葉～後期初頭の土器である。2 は、加曾利 E・IV 式終末の口縁部破片。文様帶の最上部で列点が横位に並べられており、いわゆる開沢類型（鈴木 1991 前掲）との近似が認められる。第 1 号住居跡出土遺物のうち、第 9 図 1・2 より先行する特徴をもつ。3 は、鉢の口縁部につけられる把手。2 個で 1 対をなすものである。2・3 に類似する鉢は、通常加曾利 E・IV 式とみるべきものであるが、少數ながら称名寺 1 式期にも製作されたと考えうる例もあり、注意を要する（加藤建設株式会社 2001）。5 は曾利式か。6 は加曾利 E・IV 式の胴部破片。7 は称名寺 1 式の胴部。繩文施文部に列点が施される例や縞文の磨り消しが行われない例は、称名寺 1 式でも新しい段階において散見され、装飾の二工程が簡略化、あるいは意匠が変容していく趨勢の一端と見なされる。一方、8 の胴部破片では列点が施されるのみで、後出の称名寺 2 式と見なされる。

9～15、20・21 は、後期前葉の堀之内 1 式土器。9～15 は口縁部、20・21 は胴部破片である。口縁部については、単位部分に円形の凹点が配され、それを結ぶように横位沈線 1 条が周回する個体を通例とするが、14 では繁縝化した跡がうかがえ、横位 2 条を要所で上下に連結し、棒状区画が表されている。15 は過渡的様相を示す例であり、断面形は堀之内 1 式の特徴をよく残すものの、粘土の貼り足しによって肥厚させた部分の縁にはキザミが施されており、2 式において多用される網状隆脊のはしりともみえる。

16～18、22～25 は、堀之内 2 式の精製深鉢。16～18 は口縁部ないしその付近、22～25 は胴部破片である。アサガオ形の深鉢が大半を占めるが、25 についてはくびれ部分の上が無文で大きく開き、下はわずかにふくらむ、いわゆる「小仙塚類型」の一種と考えられる。

26 は、注口上器の胴部二半の破片で、堀之内 2 式に属する。27～29 は文様が退化した深鉢。27 は粗製土器、その他も粗製的な要素を帯びている。いずれも堀之内式であるが、1・2 式の弁別は難しい。30 は堀之内 2 式土器の底部破片で、アサガオ形の深鉢とみられる。

石器の内訳は、圓石 2 点、石皿 5 点と、石織、スクレイバー、研磨具、磨製石斧の各 1 点である。圓石は磨石、第 15 図 35 の石皿は多孔石をそれぞれ兼ねている。38 の石皿は、近辺では産出しない綠泥片岩を用いている。40 では片面にひらく磨痕が認められ、なんらかの研磨に用いられたものと考えられるが、研磨の対象は不明である。41 は、縄文時代後期以降の関東地方以東に多い定角式磨製石斧の基部とみられる。

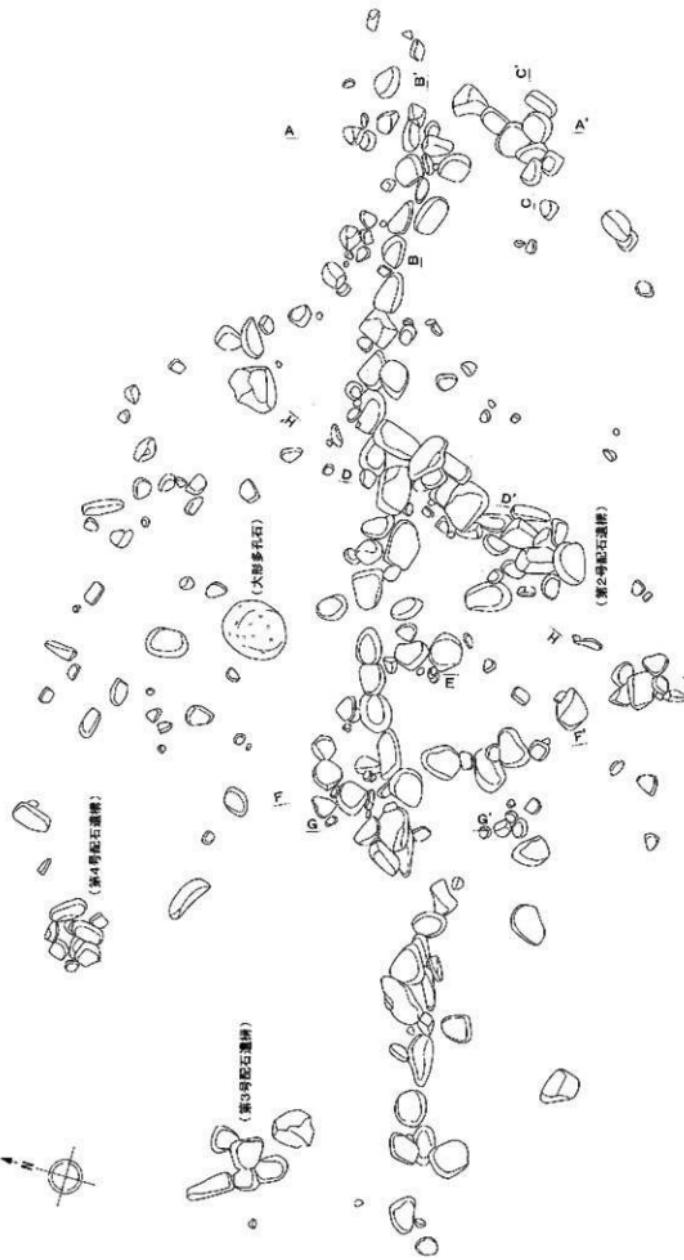
なお、剥片の石質の内訳は、黒曜石 4 点、チャート 6 点である。また、前項にて石皿 5 点の部材転用例についてふれたが、うち 2 点は連結部付近、1 点は連結部と第 1 号配石遺構を結ぶ線上、1 点は張出部に位置している。連結部付近で見つかったものとしては、さらに圓石 1 点、板状節理の輝石安山岩 1 点も加わる。

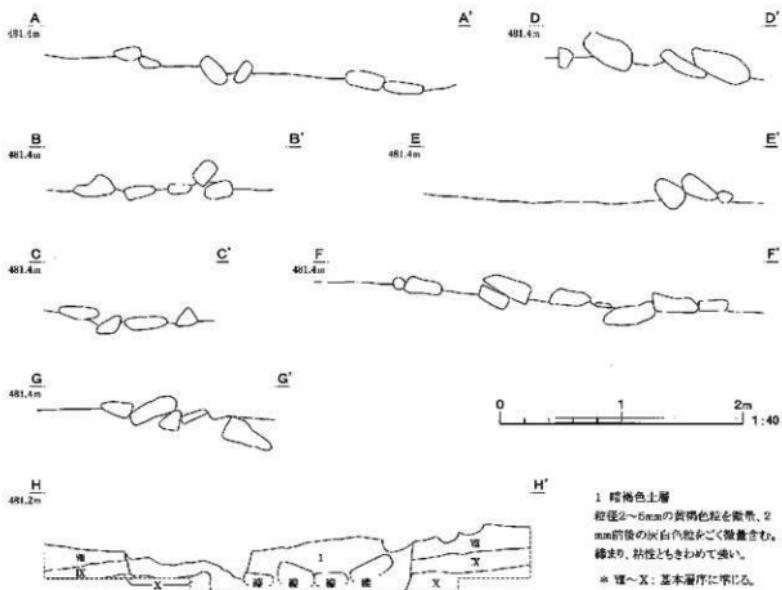
時期： 住居跡の特徴、出土遺物の内容から、縄文時代後期前葉に構築および廃絶されたものと推測される。第 1 号住居跡と比較すると、遺物の内容が若干新しく、住居の形態も後出的な様相を呈している。

第17図 第1号および周辺の配石遺構



大約度





第18図 第1号配石造構実測図

### (3) 配石造構

4基の配石造構が確認された。このうち第2号・第3号は、中央に立石が置かれる小規模な配石造構である。第1号は、調査区の南西部から北東部にかけて礫が弧状に分布するもので、より小単位に細別される可能性をもつが、本項ではひとまとまりの造構として扱うこととする。

#### 第1号配石造構

**位置**： E-1区からC-3区にかけて位置する。南西部で銅鏡形(散石)住居跡の第2号住居跡と接する。造構確認面の標高は481.0～481.1m、礫の配列が示す方位は、およそN-76°～Eである。

**残存状態**： 矶の配置状況は、概して良好に保たれているとみられる。

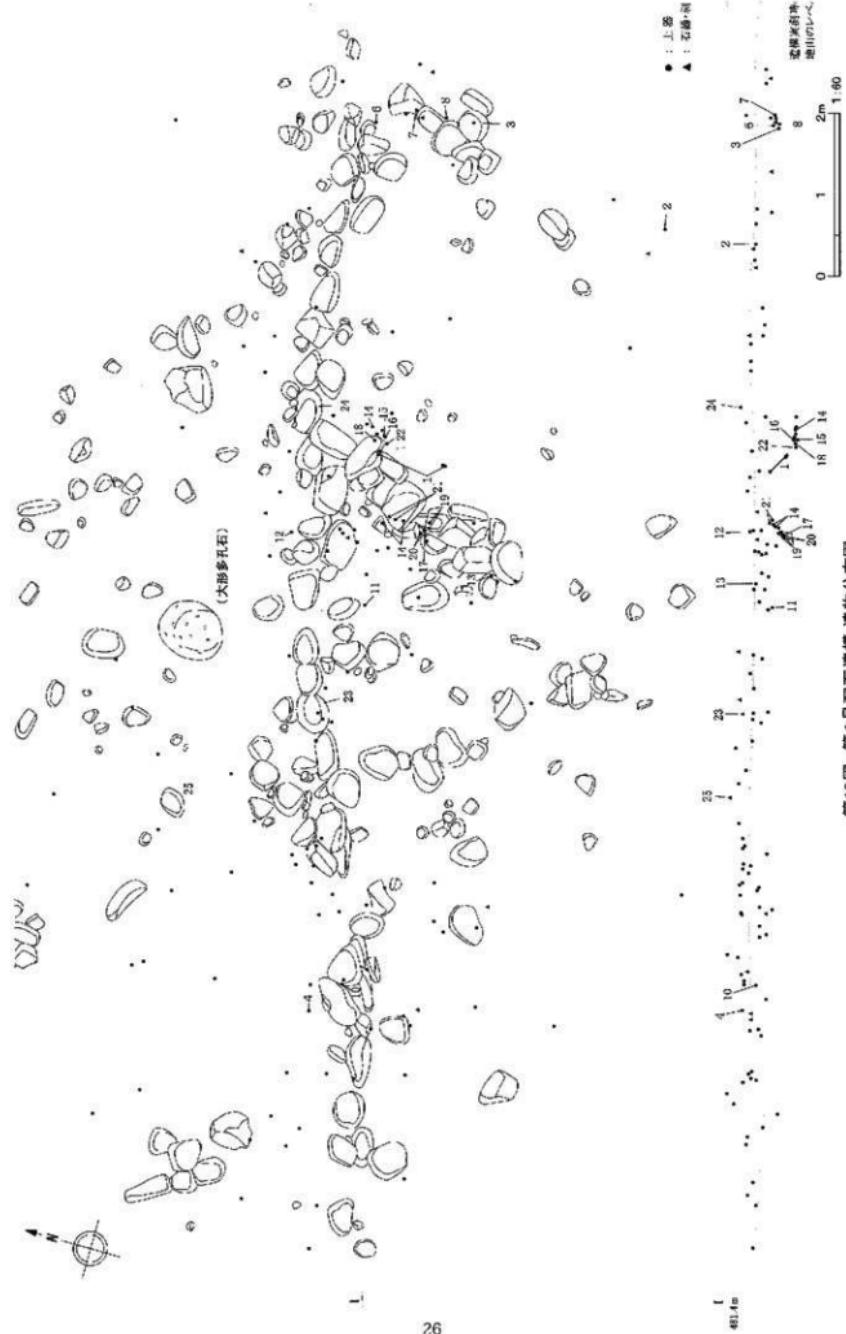
**形態**： 平面観は、北に凸の弧状を呈する。微視的には、弧状のラインと交わるように、3～4mほど礫を並べた箇所が数か所認められる。このうち中央南側の2か所は、第2号配石造構と組になって半円形に近い形状をなしている。

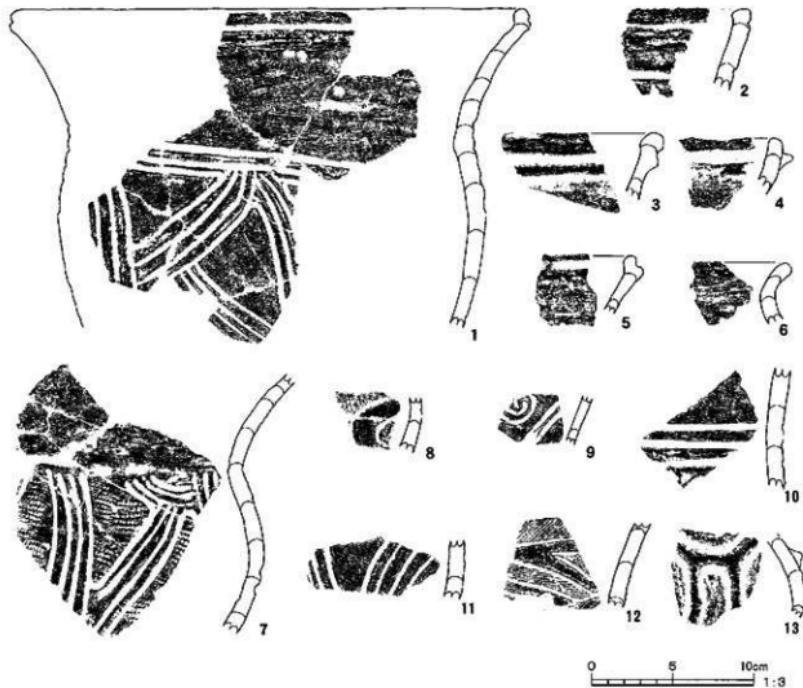
**規模**： 検出範囲において東西幅約15m、礫の分布が散漫な箇所も含わせると、南北幅約6mを測る。造構の両端とも調査区外に位置しており、全体の規模は不明である。

**付帯施設**： 矶の配置状況を記録した後、土坑(土塹)をはじめとする付帯施設の有無を確かめるため、礫をすべて除去して精査を行ったが、該当する痕跡は見つかなかった。また、現地調査終了直前に、弧状に展開していた配石と直行する方向に試掘溝を2か所設定して掘削を行い、土層断面の觀察による検討を

1 雪色土層  
粒径2～5mmの黄褐色を帶び、2mm前後の灰白色粒を多く含む。  
繊維あり、粘性ともきわめて強い。  
＊ 管～X：基本層序に準じる。

第19図 第1号配石遺構 遺物分布図

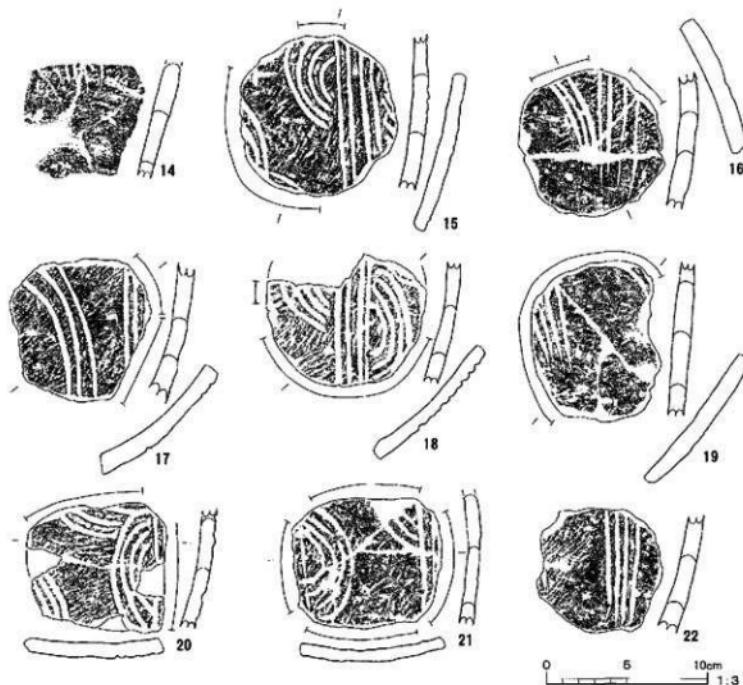




第20図 第1号配石遺構出土遺物(1)

No.	器種	剖面(外) / 備考	器形・文様などの特徴 / 著名	色調(外)	色調(内)	寸	七	注記
1	漆器	口部: (31.9) / 口 錐~明部上位片	口縁端部に内側のみ立ち上がる。口縁部底面下にくびれ 頭まで無文。軽微な模様・斑状などの沈線文。	に赤い朱色	絞物色	石英・黑色鉱・白色鉱	120-138mm サブレ1	
2	漆器	/ 口錐部片	斜錐部底面沈線2条。下位底面下に剥落。	浅黄色	灰黄色	黑色鉱・白色鉱・チ ヤート	97	
3	漆器	/ 口錐部片	横位沈線と斑状。	に赤い朱色	浅黄褐色	石英・黑色鉱・白色鉱	153	
4	漆器	/ 口錐部片	鉤状の凹溝。	に赤い朱色	灰黃褐色	黑色鉱・白色鉱	35	
5	漆器	/ 口錐部片	口縁部に内側する。口縁部に凹形剥炎と横位沈線。	に赤い朱色	角閃石・白色鉱	一括		
6	漆器	/ 口錐部片	口縁部は外反する。無文。内外面に赤色染影の痕跡みか。	に赤い朱色	に赤い朱色	石英・角閃石・白色鉱	165	
7	漆器	/ 明部片	くびれ部までは無文。頭部に譲文後、4番半位の漆膜を施 し、譲文を残り消す。/ 外面に辯付舟。	明朱褐色	褐色	石英・黑色鉱・白色 鉱・赤褐色	101	
8	漆器	/ 頭部片	沈線口面後、譲文。	に赤い朱色	灰黃褐色	石英・黑色鉱・白色鉱	158	
9	漆器	/ 頭部片	裏巻状の沈線後、譲文。	黒褐色	灰褐色	墨色鉱・口朱鉱	154	
10	漆器	/ 頭部片	横位沈線3条。/ 内外面にガラ。	に赤い朱色	淡青褐色	黑色鉱・白色鉱	111	
11	漆器	/ 頭部片	藍緑状の沈線。	明朱褐色	墨褐色	石英・角閃石・白色鉱	133	
12	漆器	/ 頭部片	沈線口面後、譲文表裏。	に赤い朱色	に赤い朱色	角閃石・白色鉱	7	
13	柱口 土器	/ 頭部片	縦模様。/ 内外面に赤色染影の痕跡。	褐色	褐色	石英・角閃石・白色鉱	83	

第4表 第1号配石遺構 出土遺物観察表(1)



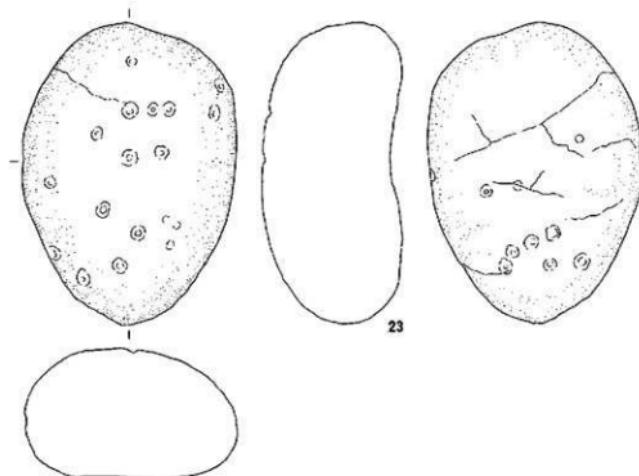
第21図 第1号配石造構出土遺物(2)

No.	器種	寸割計(cm)/現存	容形・文様などの特徴/備考	色調(外)	色調(内)	胎土	注記
14	漆拂	/漆拂片	鷺文・沈縄文。	褐色	にぶい黄褐色	石英・角閃石・白色粘	157-144サブトレ1
15	土製馬	9.9×9.8	鷺文・沈縄文の施された漆拂刷毛片再利用の円板状土製品。	褐色	明黄褐色	石英・角閃石・白色粘	サブトレ4
16	土製馬	9.2×8.9	鷺文・沈縄文の施された漆拂刷毛片再利用の円板状土製品。	褐色	にぶい黄褐色	石英・角閃石・白色粘	サブトレ3
17	土製馬	8.9×8.8	鷺文・沈縄文の施された漆拂刷毛片再利用の土製品。形状は丸みのある長方形。	褐色	灰黃褐色	石英・角閃石・白色粘	151
18	土製馬	[8.0]×9.9	鷺文・沈縄文の施された漆拂刷毛片再利用の円板状土製品。	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	石英・角閃石・白色粘	サブトレ3
19	土製馬	8.9×7.9	鷺文・沈縄文の施された漆拂刷毛片再利用の円板状土製品。	褐色	にぶい黄褐色	石英・角閃石・白色粘	148, 149, 151
20	土製品	8.0×8.7	鷺文・沈縄文の施された漆拂刷毛片再利用の土製品。形状は丸みのある長方形。	にぶい黄褐色	褐色	石英・角閃石・白色粘	150, 151
21	土製品	8.1×9.2	鷺文・沈縄文の施された漆拂刷毛片再利用の土製品。形状は丸みのある長方形。	褐色	明黄褐色	褐色	142-143
22	土製品	7.6×7.8	鷺文・沈縄文の施された漆拂刷毛片再利用の円板水上土製品。	褐色	にぶい黄褐色	石英・角閃石・白色粘	サブトレ2

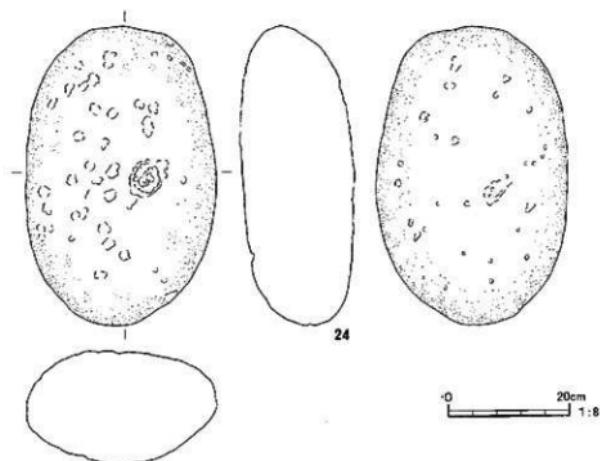
第25表 第1号配石造構 出土遺物観察表(2)

試みたが、結果は同様であった。

その他の所見：上記の試掘溝のうち、図17・18に示したトレンド(H-H')では、自然堆積である地山とは異なる色調の土の上に罐が置かれている状況を捕捉することができた。また、このトレンドの南西部では、土製円板を大きくしたような、縁辺に調整の施された土器破片8点が、折り重なったような状態で検出された。



23



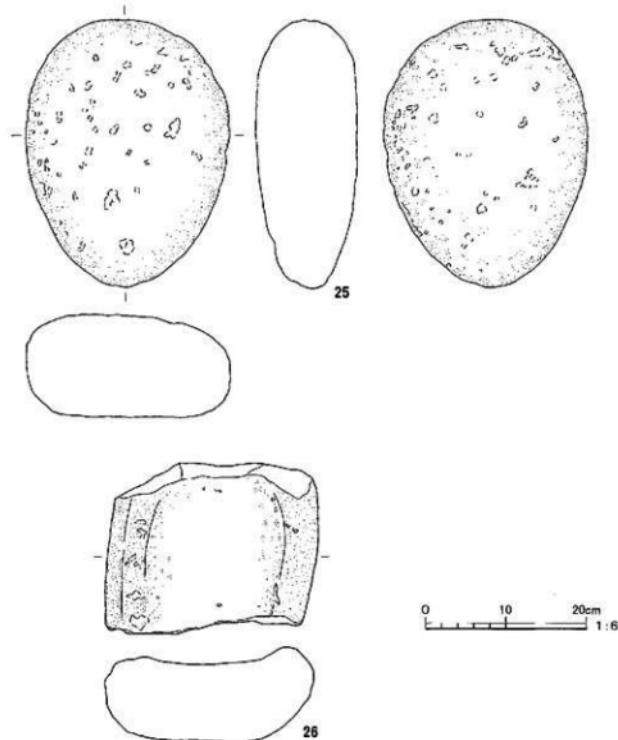
24

0 20cm  
1:8

第22図 第1号配石造構出土遺物(3)

No.	密著	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	注記	備考
23	多孔石	49.8	35.4	23.2	57,100	輝石安山岩	176	大形品。表面面や縁方に多孔。
24	多孔石	49.2	31.6	19.0	40,460	輝石安山岩	176	大形品。孔はやや浅い。

第6表 第1号配石造構 出土遺物観察表(3)



第23図 第1号配石造構出土遺物(4)

No.	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	法室	備考
25	多孔石	33.5	28.5	12.7	15,260	麻布安山岩	177	大形石。あるいは台石か。
26	石鏡	[21.5]	26.7	11.1	[10,370]	麻布安山岩	179	人形石。

第7表 第1号配石造構 出土遺物観察表(4)

以上のことから、本造構の少なくとも一部には掘り方が存在していた可能性が考えられる。なお、もう1か所のトレンチについては、掘削範囲がすべて地山であることが確認されている。

出土遺物：土器破片187点、土製品8点、石器4点、剝片5点が出土した。土器破片と土製品の総重量は4,498.2g、破片1点平均23.1g弱となる。

今回の調査における住跡出土遺物についても多分に当てはまることがあるが、本造構周辺で見つかった遺物が、造構本来の利用状況、あるいは機能を果たしていた時期を直接反映したものであるかどうかは不明瞭といわざるを得ず、実際のところ狹義の住跡遺物とは見なしがたい。とはいえ、それらの時期的傾向が、

少なくとも遺構が施設としての機能を停止する前後のおおまかな時期を示すとみると大過はないと考えられる。こうした認識に基づき、本文では、遺構とのレベルがほぼ等しく、平面分布上至近に位置する遺物を広義の伴出遺物として扱うこととする。

出土土器の主な製作時期は後期前葉、十器壇式における壇之内1式ないし2式に収斂する。ただし、後期初頭の称名寺式もわずかに認められる。

第20図1~7、9・10は、壇之内1式土器。1~7が口縁部ないしその付近を残す破片、9・10は胴部破片である。1~7では、弧状の継続沈線を並べた垂下文が1組4条と多条化の傾向を示し、かつ垂下文どうしが同じ条件の斜位集合沈線によって連結されており、1式後半へ終末段階の特徴を備えている。地文に繩文が用いられる点、渦巻状文が退化したモチーフがくびれ部分に配される点で、7の方がより古い特徴を残す。他の口縁部破片も、おおむね同段階のものと思われる。9もほぼ同時期であるが、2式において盛行するアサガオ形の器形をもつとみられ、斜位の区画内に配された渦巻文とあわせ、新相を帶びる。

11・12は壇之内2式の深鉢胴部。11は小仙塚類型のうち地文の繩文が施されないもので、垂下文がさらに多条化する。器形や文様の概況は1・7に通じるもの、沈線が浅くなり、縁の盛り上がりがナデ消されているところなど、細部の特徴は異なる段階であることを示している。12は、壇之内2式のアサガオ形深鉢の典型ともいえる側体である。13の胴部破片は、称名寺式の注口土器である。繩文は用いられず、この種の土器特有の隆脊が貼付されている。

第21図では、先述の試掘溝において、折り重なるなどして密集した状態で検出された土器破片を掲載した。いずれも同一個体で、14を除くすべての縁辺に磨ったような調整が施され、丸みを帯びた形状に仕上げられている。しいていえば1:盤円板に近似するものの、大きさや出土状況を見る限り、通常の土製円板とは同一説できない。性質用途などは不明であるが、注意を喚起すべき資料である。

一方、石器の内訳は、多孔石3点、石皿1点、剥片5点となっている。多孔石・石皿はいずれも大形品で、多孔石の検出頻度が目をひく。これら図示した例のほか、長径80cm強、短径70cm弱、厚さ70cm以上の巨大な多孔石が検出されたが、調査時の諸条件により、遺物としての採集を断念した。日常の生業に用いられたものとは考えにくく、自然の転石の露出部分を加工したものとみられる。多孔石を他種の石器と同様に生活用具としてみた場合、他の場所にて使用していたものを配石遺構の部材として転用したと解釈するのが自然である。しかし、こと本遺構の多孔石に関しては、あらかじめ所定の位置に据えることを重要な目的として製作され、転用という要素が希薄であった可能性も考慮すべきように思われる。なお、出土した剥片の石質は、いずれも黒曜石であった。

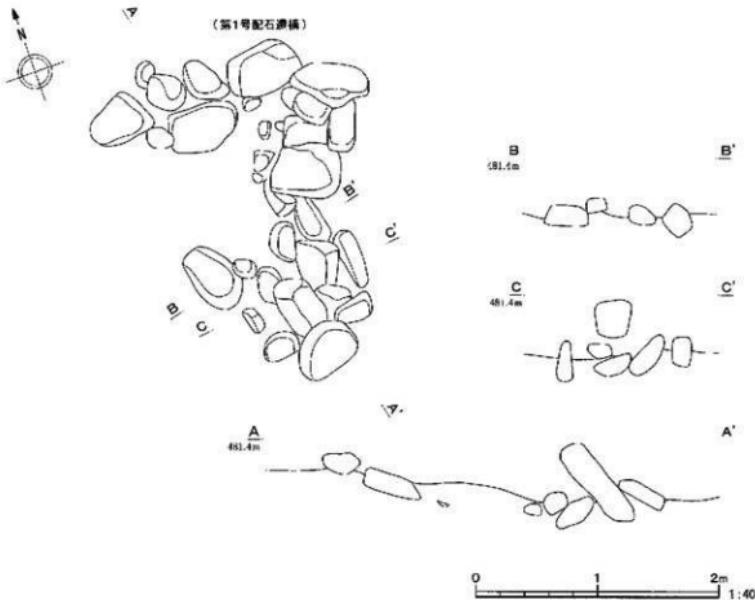
時期：近辺より出土した遺物の内容、および近在の遺跡にみられる類例との比較から、繩文時代後期前葉に構築された遺構である可能性が高い。

## 第2号配石遺構

位置：D-2区に位置する。遺構確認面の標高は480.9~481.0mを測る。北側の第1号配石遺構と近接し、その一部であるようにも見えるが、後述する立石の存在を重んじ、本項では単独の遺構として扱う。

残存状態：礫の配置状況は、概して良好に保たれているとみられる。

形態：平面観は、おおむね円形を呈する。範囲をせまくとらえるのであれば13、4個、第1号配石遺構付近のものも含めると、20個強の礫が用いられている。中央やや南側には、立石とおぼしき長さ80cm、幅20cmほどの礫が配置されているが、現状においては直立せず、北に40°ほど傾いている。



第24図 第2号配石遺構実測図

規 模： 直径 1.6m、最も下位にて検出された砾の下面からの高さは 94cm を測る。

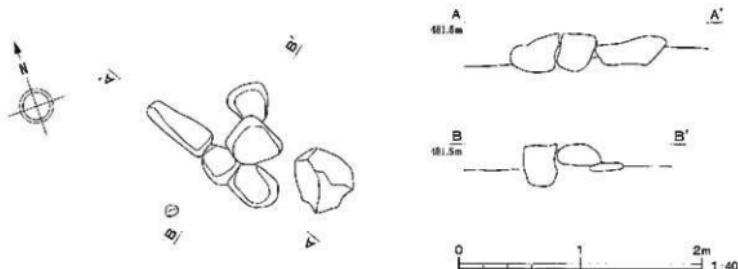
付帯施設： 砂の配置状況を記録した後、二坑（土壙）をはじめとする付帯施設の有無を確かめるため、砾をすべて除去して精査を行ったが、該当する痕跡は見い出せなかつた。

出土遺物： 本遺構に直接関連することが明確な遺物は出土していない。

時 期： 周辺より出土した遺物の内容、および位置や構造において第1号配石遺構との関連が深い点から、縄文時代後期前葉に構築された遺構と推測される。

### 第3号配石遺構

位 置： 主として R-2 区に位置する。遺構確認面の標高は 481.2 ~ 481.3 m を測る。南側の第1号配



第25図 第3号配石遺構実測図

石遺構と近接し、北東の第4号配石遺構とは3m弱を隔てる。

残存状態： 種の配置状況は、概して良好に保たれているとみられる。

形 態： 6個前後の礫が、平面不整円形に配置されている。

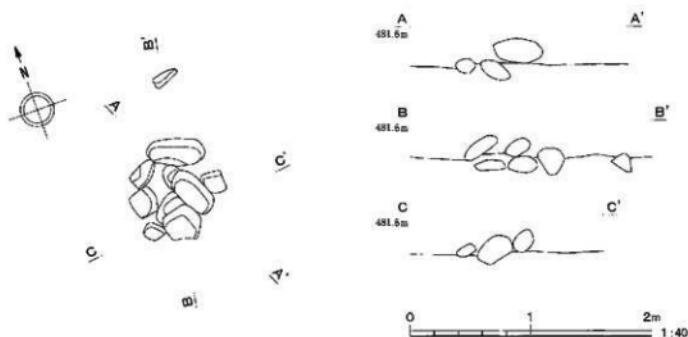
規 模： 種が分布する範囲は、現状で長径1.9m、短径95cmを測る。

付帯施設： 種の配置状況を記録した後、土坑(土塙)をはじめとする付帯施設の有無を確かめるため、種をすべて除去して精査を行ったが、該当する痕跡は見い出せなかつた。

その他の所見： 北西-南東の方向に3個の礫が並ぶように位置している。このうち、中央の種と南東にある種とが同一個体のように見えたため、種の除去作業時に接合を試みた。その結果、2つの種は本来中央の位置に据えられた、長さ約70cmの立石であることが判明した。

出土遺物： 本遺構に直接関連することが明確な遺物は出土していない。

時 期： 積極的な判断材料に乏しいが、周辺より出土した遺物の内容、および第1号配石遺構と近接する点から、縄文時代後期前葉に構築された遺構と推測される。



第26図 第4号配石遺構実測図

#### 第4号配石遺構

位 置： E-2区に位置する。遺構確認面の標高は481.3mを測る。南の第1号配石遺構、および南西の第3号配石遺構とは、ともに3m前後を隔てる。

残存状態： 種の配置状況は、概して良好に保たれているとみられる。

形 態： 10個前後の礫が、平面觀にしておおむね円形に配置されている。

規 模： 種が分布する範囲は、現状で長径1.2m、短径90cmを測る。

付帯施設： 種の配置状況を記録した後、土坑(土塙)をはじめとする付帯施設の有無を確かめるため、種をすべて除去して精査を行ったが、該当する痕跡は見い出せなかつた。

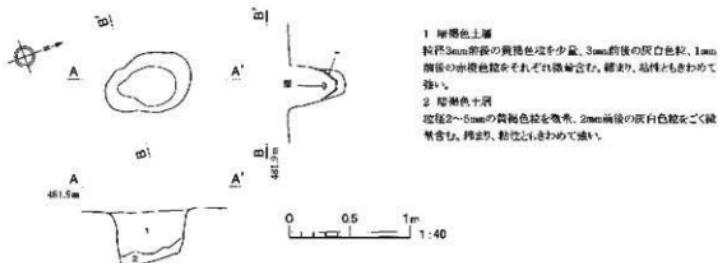
出土遺物： 本遺構との直接関連することが明確な遺物は出土していない。

時 期： 積極的な判断材料に乏しいが、周辺より出土した遺物の内容、および第1号配石遺構と近接する点から、縄文時代後期前葉に構築された遺構と推測される。

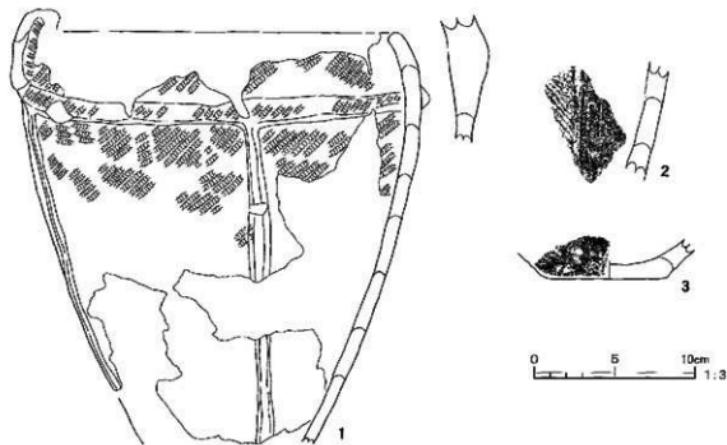
#### (4) 土坑・ピット

土坑 12 基とピット 17 基が検出された。分布に目立った傾向は見られず、前項にて挙げた各配石痕構との関連についても明らかでない。このうち第3号土坑は埋設土器を伴うもので、屋外埋甕と見なしうる。

なお、以下に所見文と図を掲げるものとして、都合 29 基の中から記載事項の比較的多い 7 基を選んである。その他の 22 基については個別の図示および記述を行わず、第 11 表に計測値などの摘要をまとめた。



第27図 第3号土坑実測図



第28図 第3号土坑出土遺物

No.	通称 ・記述 (cm) / 順序	形態・文様などの特徴 / 考察	色調 (外)	色調 (内)	分 類	規 準
1	漆鉢 口径: (21.0) 深さ: 1/3	把丁部および底部欠損。底面が内側に凸の壘底文。内縁から網底上半部にかけてLR複文、外縁上半部に羅付文。	暗褐色	黒褐色、白色斑、手 ケート	漆器	3.5~4.0 径×土5
2	漆鉢 ノ劇部片	漆塗型飾による網底文、LR複文を基位複文。	黒褐色	灰褐色	漆器	9
3	漆鉢 底径: (7.7) / 容量 無文。		褐色	灰褐色	漆器	1.5~10

第8表 第3号土坑 出土遺物観察表

#### 第3号土坑

位置：G-3区に位置する。遺構確認面の標高は、481.6mを測る。

残存状態：後述する埋設土器については破損が著しいが、土坑全体は良好である。

形態：平面橢円形、断面逆台形を呈する。

規模：長径60.0cm、短径50.0cm、深さ70.0cmを測る。

覆土：2つの層に細分される。本遺跡における他の遺構の覆土に比べて明らかに硬質であり、また2層の色調は地山（第Ⅳ層）と酷似していた。この点のみをもって人為の痕跡とは即断できないが、土坑の掘り込みがきわめて短期間のうちに、同じレベルの地山と同質の上によって埋まつた経緯を想定することは可能と思われる。

出土遺物：本遺構の中へ下位で、深鉢の副部下半以下の大形破片（第28図1）が検出された。このほか同一個体の小破片が覆土全体に散在しており、整理調査時では底部を除くほぼ全形が復元された。本来は、底部を打ち欠いた状態で埋置されていたものと考えられる。

出土した遺物は土器破片に限られ、破片数にして27点を数える。帰属時期は、縄文時代中期後葉から後期初頭の範囲に収まる。第28図3の底部破片は1とは別個体と判断され、2とあわせて他所から覆土に混入したものであろう。いずれも、加曾利EⅢ～Ⅳ式に属するとみられる。

なお、1は帰属時期について幅をもたせうる事例のひとつである。口縁部付近に横位1条、縦位区画として副部に4条の陣帶が貼付され、横位の陣帶上、および副部上半に、単節縄文LRが施されている。陣帶の用い方は中期末の加曾利EⅣ式にも通じるが、陣帶がいわゆる微隆起縄文の特徴から離れ、粗大で断面に観察を欠く。これに加え、縄文が横位回転押捺によって施されており、縦位の回転施文により副部下半～底部付近まで縄文が及ぶことを例とする加曾利EⅣ式の手法が順守されていない。以上の点を考慮し、本個体を後期初頭の称名寺式に属するものとしてとらえておきたい。

時期：埋設土器に関する所見から、縄文時代後期初頭に構築された遺構と推測される。

#### 第4号土坑

位置：G-3区に位置し、北にて第3号土坑と接する。遺構確認面の標高は、481.6mを測る。

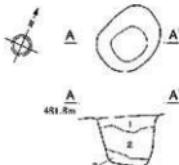
残存状態：おむね良好とみられる。

形態：平面橢丸長方形ないし不整橢円形、断面は逆台形を呈する。

規模：長径54.0cm、短径44.0cm、深さ42.5cmを測る。

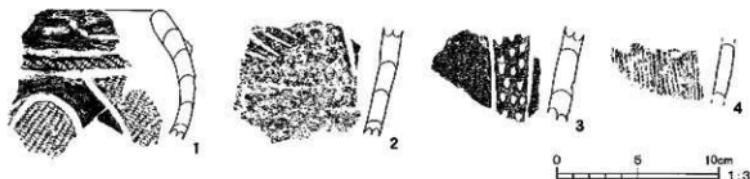
覆土：3つの層に細分される。人為を示唆する顕著な事象は認められない。

出土遺物：覆土より、土器の小破片16点と礫2点が出土した。遺物の分布状況は散漫で、明確な傾向をもたない。



第29図 第4号土坑実測図

- 1 基褐色土層  
粒径2～5mmの基褐色砂を簡單、2mm前後の灰白色砂、1mm前後の赤褐色砂をそれぞれ含む。堆積量も少く、性質とも悪い。
- 2 砂褐色土層  
粒径2～5mmの砂褐色砂、2mm前後の灰白色砂をそれぞれごく微量含む。堆積量も少く、性質とも悪い。
- 3 硅酸鈷色土層  
粒径5～10mmの硅酸鈷色砂を少量含む。堆積量も少く、性質ともさわめて良い。



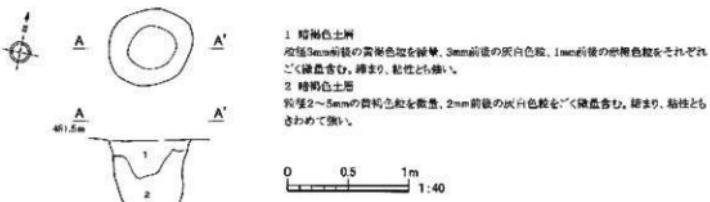
第30図 第4号土坑出土遺物

No.	器種	寸(測定cm)/既存	跡形・文様などの特徴/傷等	色調(外)	色調(内)	新 土	古 土
1	深鉢	/切削部	障壁上部および底内面に縦文。	黒褐色	暗灰黄色	黒色粒・白色粒	9
2	深鉢	/削削片	底面横文と斜文の交換。/端面削れる。	黒褐色	灰黄褐色	石英・黑色粒・白色粒	7・一柄
3	深鉢	/削削片	底面区面内に円柱刻灰文。	灰灰褐色	にぶい灰褐色	黒色粒・白色粒	3
4	深鉢	/削削片	縦文条縞文。	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	黒色粒・白色粒	4

第9表 第4号土坑 出土遺物観察表

出土した遺物の帰属時期は、縄文時代中期後葉から後期初頭の範囲に収まる。第30図3は、第3号土坑の埋設土器と同様、中期末から後期初頭か判断の難しい個体である。他は、おおむね曾利式に属するものとみられる。

時期：出土遺物が小破片に限られるため断定はできないが、縄文時代中期後葉～後期初頭の間に構築された遺構と推測される。



第31図 第9号土坑実測図

#### 第9号土坑

位置：P-2区に位置し、南西にて第2号住居跡と接する。遺構確認面の標高は、481.3 mを測る。

残存状態：おおむね良好とみられる。

形態：平面指円形、断面は箱形を呈する。

規模：長径 72.0cm、短径 60.0cm、深さ 56.5cm を測る。

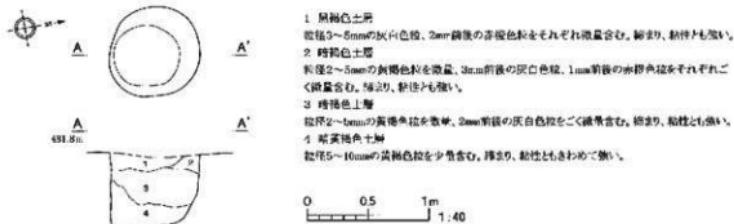
覆土：2つの層に細分される。人為を示唆する顕著な事象は認められない。

出土遺物：なし。

時期：判断材料に乏しいが、色調をはじめとする覆土の特徴などから、縄文時代の遺構と推測される。

#### 第10号土坑

位置：D-2区。北に2~3mを隔てて第1号配石遺構、北東約2mの位置に第2号配石遺構がある。遺構確認面の標高は、480.9 mを測る。



第32図 第10号土坑実測図

残存状態： おおむね良好とみられる。

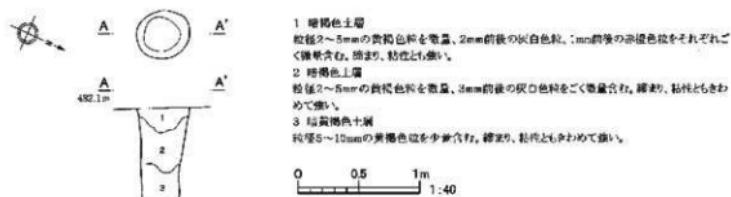
形態： 平面円形、断面は箱形を呈する。

規模： 長径 75.0cm、短径 73.0cm、深さ 61.0cm を測る。

覆土： 4つの層に細分される。人為を示唆する顕著な事象は認められない。

出土遺物： なし。

時期： 判断材料に乏しいが、色調をはじめとする覆土の特徴などから、縄文時代の遺構と推測される。



第33図 第1号ピット実測図

#### 第1号ピット

位置： I-4区。南東およそ6mを隔てて、第2号および第3号ピットが位置する。遺構確認面の標高は、482.0 mを測る。

残存状態： おおむね良好とみられる。

形態： 平面円形、断面はU字形を呈する。

規模： 長径 44.0cm、短径 40.0cm、深さ 80.0cm を測る。本遺跡の中で最も深い遺構である。

覆土： 3つの層に細分される。人為を示唆する顕著な事象は認められない。

出土遺物： なし。

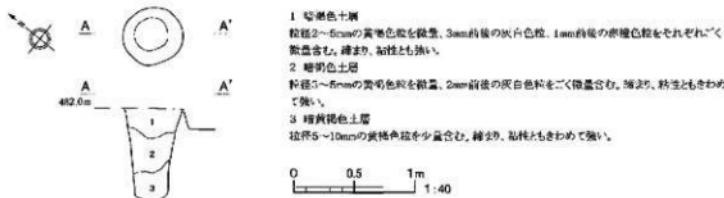
時期： 判断材料に乏しいが、色調をはじめとする覆土の特徴などから、縄文時代の遺構と推測される。

#### 第2号ピット

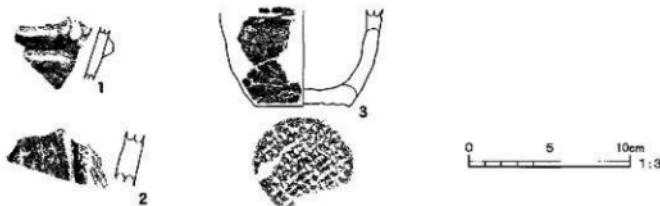
位置： II-4区。北西およそ6mに第1号ピット、南西およそ4mに第3号ピットがそれぞれ位置する。遺構確認面の標高は、481.9 mを測る。

残存状態： おおむね良好とみられる。

形態： 平面円形、断面はU字形を呈する。



第34図 第2号ピット実測図



第35図 第2号ピット出土遺物

No.	名様 /形質	形質 /特徴	器形・文様などの特質/面相	色調(外)	色調(内)	断土	記述
1	破片 /網目片	陶器 /内外面にガラス。	灰青色	褐褐色	白色粒、赤褐色砂	一柄	
2	破片 /網目片	絞模による網目文、縄文。	にがい青褐色	淡黄色	白灰、向開口、白色粒	一柄	
3	環状 底径:(5.9)/網 部下部~底部	既存形上位に近縁のあるものは蟹文。底面に網代模。	にがい青褐色	黒褐色	白灰、黑色粒、白色粒	一柄	

第10表 第2号ピット出土遺物観察表

規 模：長径 50.0cm、短径 46.0cm、深さ 77.0cm を測る。

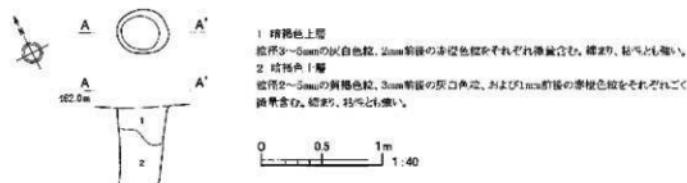
覆 土：3つの層に細分される。人為を示唆する顕著な事象は認められない。

出土遺物：覆土の中位～下位にて、土器破片4点が出土している。第35図では、その全点を示している。1は中期中葉、2は加曾利E IIIないし E IV式に属する。3は中期前葉の所産とみられる小形の深鉢である。

時 期：出土遺物が少なく、小破片が過半であるため断定はできないが、色調をはじめとする覆土の特徴などを加味し、縄文時代の遺構と推測される。

### 第3号ピット

位 置：1-4区、北におよそ6mを隔てて第1号ピット、北東およそ4mに第2号ピットがそれぞれ位置する。



第36図 第3号ピット実測図

遺構確認面の標高は、181.9 mを測る。

残存状態： おおむね良好とみられる。

形態： 平面円形、断面はU字形を呈する。

規模： 長径45.0cm、短径37.0cm、深さ72.5cmを測る。

覆土： 2つの層に細分される。人為を示唆する顕著な事象は認められない。

出土遺物： なし。

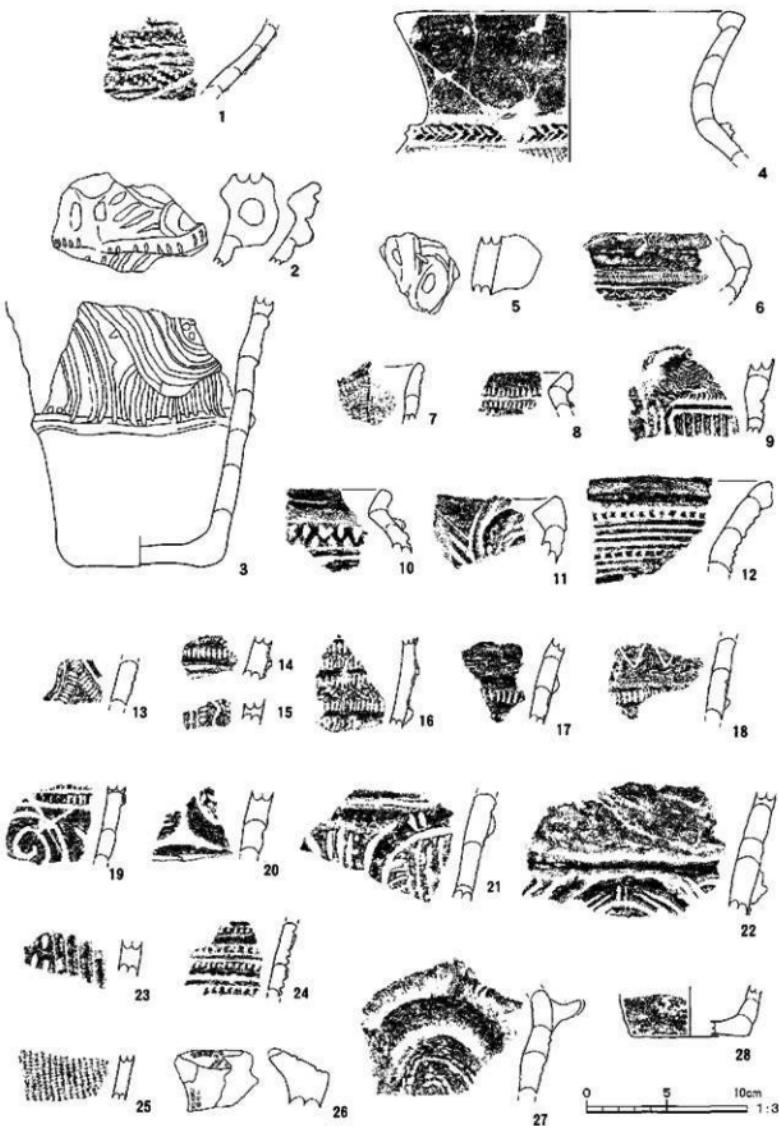
時期： 判断材料に乏しいが、色調をはじめとする覆土の特徴などから、縄文時代の遺構と推測される。

遺構名	グリッド	形状					備考
		平面形	断面形	長径	短径	深さ	
第1号土坑	G-4	椭円形	逆台形	166.01	58.0	52.0	北側一部調査区外、出土遺物なし。
第2号上坑	G-4	椭円形	逆台形	75.0	56.0	48.5	上部破片1点出土。
第5号下坑	F-4	椭円形	箱形	48.0	39.0	-	出土遺物なし。
第6号下坑	F-3	椭円形	不規則	76.0	59.0	52.0	土器破片1点出土。
第7号上坑	F-3	椭丸長方形	箱形	57.0	42.0	36.0	上部破片1点、複数1点出土。
第8号土坑	F-3	椭丸方形	箱形	55.0	53.0	32.5	土器破片1点、複数2点出土。
第11号下坑	C-2	不規則	不規則	87.0	59.0	17.0	出土遺物なし。
第12号土坑	B-2	椭円形	不規則	71.0	57.0	41.5	出土遺物なし。
第4号ピット	H-3	椭円形	箱形	55.0	32.0	43.0	出土遺物なし。
第5号ピット	G-3	椭丸長方形	U字形	60.0	49.0	56.0	土器破片9点、複数2点出土。
第6号ピット	G-3	椭丸長方形	U字形	43.0	38.0	49.0	出土遺物なし。
第7号ピット	G-4	椭丸方形	逆台形	39.0	37.0	48.0	上部破片11点出土。
第8号ピット	G-4	椭円形	U字形	41.0	36.0	61.5	土器破片3点、複数7点出土。
第9号ピット	F-4	椭円形	箱形	48.0	39.0	35.5	土器破片8点、複数1点出土。
第10号ピット	G-3	椭丸方形	U字形	45.0	43.0	38.5	土器破片2点出土。
第11号ピット	F-3	椭円形	U字形	47.0	38.0	42.0	出土遺物なし。
第12号ピット	G-2	椭方形	U字形	43.0	37.0	40.0	土器破片4点出土。
第13号ピット	C-2	円形	U字形	39.0	34.0	43.5	出土遺物なし。
第14号ピット	F-2	椭円形	箱形	55.0	48.0	48.0	上部破片3点、複数1点出土。
第15号ピット	F-1	椭円形	箱形	42.0	35.0	27.0	出土遺物なし。
第16号ピット	F-1	椭円形	U字形	45.0	38.0	56.5	出土遺物なし。
第17号ピット	C-1	椭円形	U字形	55.0	48.0	35.0	出土遺物なし。

第11表 土坑・ピット一覧表

#### (5) 遺構外出土遺物

遺構との関連が不明な遺物として、土器破片1,714点、石器4点、土製品と石製品各1点が出土した。本項末尾の第17表として、グリッド別の出土遺物点数などを掲げてある。これによると、二器破片および土製品の点数にして旧G-3区が184点(3,022.2g)と最も多く、これに旧I-3区の166点(3,064.2g)が次ぐ。旧G-3区と旧I-3区は、いずれも第1号住居跡の範囲と重複しており、左記2区出土の遺物は、同住居跡の覆土出土遺物に相当する可能性もある。また、破片1点平均の重量では、旧G-4区出土遺物が102.9gと他を圧倒している。同区では第5~8号土坑が検出されているが、これらの遺構となんらかの関連を有するものであろうか。そのほか、旧G-4、旧H-3、旧H-4、旧I-2、旧I-4の各区にて、土器破片およ



第37図 這構外出土遺物(1)

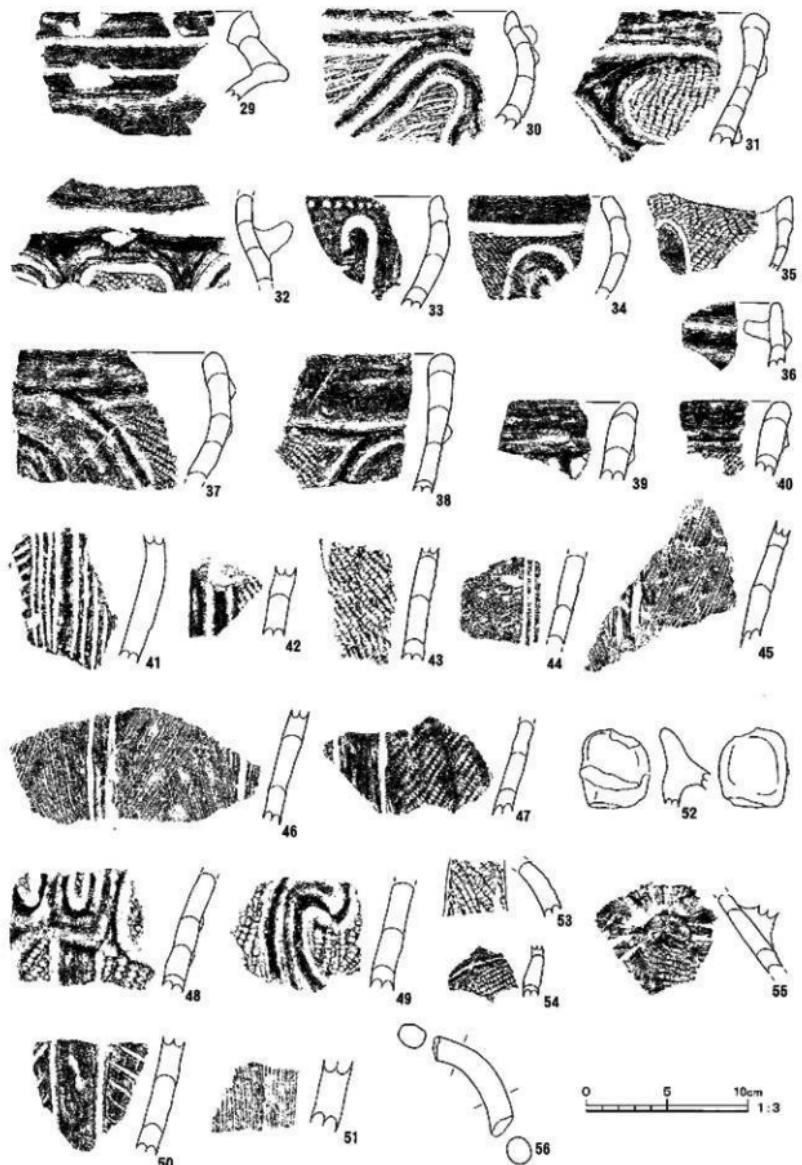
No.	器種	計測値(cm) / 手筋	器形・文様などの特徴／施文	色調(外)	色調(内)	胎土	記述
1	深鉢	/ 脚鉢片	縹文後、浮遊式に特徴のキザ。	にぶい褐色	黄褐色	石英・黑色粒・白色粒	前H-3区
2	深鉢	/ 仁様鉢片	深起張たる円形容の突起えぐり、周溝にキザ。口縁部と脚部下側に特徴的底紋。	にぶい赤褐色	黒褐色	石英・角閃石・白色粒	表上
3	深鉢	底径: 10.1 / 口 鉢内位 - 底部	脚部上部に床底文および重底状文の底板文、斜突文。略幅下位は無文。	にぶい褐色	黒褐色	石英・角閃石・白色粒 ・碧玉	前H-4区
4	深鉢	口径: ②1.6 / 口 底 - 脚部上位片	口縁部内側に肥厚。口縁部は無文。くびれ部の底面に尖羽模様のみで、脚部に無文。	暗褐色	にぶい褐色	石英・黑色粒・白色粒 ・チャート	前H-1区 ・チャート
5	深鉢	/ 突起片	ねじれたS字状の突起。	にぶい褐色	にぶい褐色	石英・黑色粒・白色粒	前H-3区
6	鉢	/ 白線帯付近片	黒文帯付近に、2列の連續斜文文、横位、波状の押引文。	灰褐色	灰褐色	片岩・チャート	前D-1区
7	深鉢	/ 口縁部片	波状口縁。押引文。	にぶい赤褐色	にぶい褐色	白色粒・赤褐色	前H-4区
8	深鉢	/ 口縁部片	口縁部頭外側に内面には、横位の連續斜文文。	にぶい褐色	にぶい褐色	石英・黑色粒・白色粒	前H-1区
9	深鉢	/ 脚鉢片	底折貼付文が欠損。河文、達板形文形、平行波線区面内に複数出現。	灰黃褐色	黒褐色	石英・黑色粒・白色粒	前H-3区
10	深鉢	/ 口縁部片	口縁部底外側に内面に埋。刻痕による複数状痕、横位沈滑。	褐色	にぶい褐色	石英・黑色粒・白色粒	前B-1区
11	深鉢	/ 口縁部片	口縁部内側に突出。縫合文、平行波線文。	にぶい黃褐色	黒褐色	鷺卵・石英・黑色粒	1件: 前H-5 ・前D-3区
12	深鉢	/ 口縁部片	口縁部外側が器表法に肥厚。平行波線、連續斜文形。	暗褐色	にぶい褐色	石英・黑色粒・白色粒 ・表土	
13	深鉢	/ 脚鉢片	平行沈滑、ヘラ状工具による複数刻痕文。外縁に塗付着。	暗褐色	にぶい褐色	石英・黑色粒・白色粒	前C-1区
14	深鉢	/ 脚鉢片	押引文、蘇鐵状工具による連續斜文文、背溝・平行沈滑。	にぶい褐色	黒褐色	石英・角閃石・白色粒	前J-4区
15	深鉢	/ 脚鉢片	平行波線、連續斜文文、押引文。	にぶい褐色	灰褐色	石英・角閃石・白色 ・粒	前D-1区
16	深鉢	/ 脚鉢片	座節間にへら先工具による連續斜文文を2列配置し、波状に押引文。	にぶい赤褐色	灰褐色	片岩・角閃石・チャート	前D-1区
17	深鉢	/ 脚鉢片	底折下部にへら先工具による連續斜文文。	赤褐色	暗赤褐色	石英・黑色粒・白色粒	前H-4区
18	深鉢	/ 脚鉢片	縫合状に底張。連續斜文文2列目、既削。	明赤褐色	灰褐色	石英・角閃石・白色粒	前F-3区
19	深鉢	/ 脚鉢片	底折間の狭い隙間に縫合状に連續斜文文、誤穿状の沈線。	にぶい褐色	灰褐色	片岩・炭田・チャート	前B-1区
20	深鉢	/ 脚鉢片	底削文。/ 外縁に塗付着。	暗褐色	にぶい褐色	石英・黑色粒・白色粒	前E-1区
21	深鉢	/ 脚鉢片	陰削文、沈滑、刻痕、加波紋。	にぶい赤褐色	にぶい褐色	石英・チャート	前B-1区
22	浅鉢	/ 脚鉢片	縫合の墨書き下部に底溝、陰削文、沈滑。	赤褐色	褐色	石英・黑色粒・白色粒	前H-1区
23	深鉢	/ 脚鉢片	縫合ギリ沈滑、刻突文。	にぶい赤褐色	灰褐色	石英・黑色粒・白色粒 ・1件: R2- 前D-3区	
24	深鉢	/ 脚鉢片	施款付の横位沈滑、連續斜文文。	にぶい赤褐色	黒褐色	鷺卵・石英・黑色粒	前G-4区
25	深鉢	/ 脚鉢片	平行捉文。	褐色	にぶい赤褐色	石英・黑色粒・白色粒	2件: 108
26	深鉢	/ 突起片	底張おおが墨書きの一部に舟形文。	にぶい褐色	灰褐色	石英・チャート	前H-3区
27	深鉢	/ 脚鉢片	縫合の高さ點付文。縫合な舟形文。	にぶい水溶色	褐色	鷺卵・石英・チャート	前D-2区
28	深鉢	底径: 10.0 / 脚鉢片	脚部下位は無文。	明赤褐色	黒褐色	鷺卵・石英・チャート	区外

第12表 造構外出土遺物観察表(1)

び土製品 100 点以上の出土をみている。

なお、今回の調査では、調査進行上の都合により、遺物の位置記録・表示用(4mグリッド: 旧グリッド)、遺構用(5mグリッド)と2通りのグリッドを併用しており、第4図にそれぞれの位置割りを明示している。

土器の製作時期は、これまで造構と関連づけて紹介してきた例に比べ、古い時期へ向けて幅を広げており、上限は前期後葉にまでさかのぼる。一方、新しい時期は後期前葉にとどまり、造構外出土遺物とほぼ一致している。こうした傾向は、当地が住居跡や配石遺構が構築される以前よりなんらかの形で利用されていたこと、およびそれらの配納後、長らく人為の及ばない場所となっていたことをあわせて示唆しているように思われる。



第38図 遺構外出土遺物(2)

No.	器種	剖面(era) / 形名	器形・文様などの特徴 / 補考	色調(外)	色調(内)	断土	社記
25	表拂	/ 口縁部	山根部は内側に凸出。口縁部は外の直進。内外面に赤褐色の痕跡ある。内外面にギザ。	赤褐色	赤褐色	瓦岩・石英・チャート	前A-1区
30	深鉢	/ 口縁部	縁文後、藤原、熱帯文による区画。	黄褐色	赤褐色	石英・白色粒・白色斑	前C-1区
31	表拂	/ L縁部	縁部は内側に凸出。	赤褐色	赤褐色	石英・黑色粒・白色斑	西H-2区
32	深鉢	/ 口縁部・近片	縁部の一部がエラ状に突出。縁部区画内に縁文。	赤褐色	赤褐色	石英・黑色粒	3土6
33	深鉢	/ 口縁部	L縁部に連続L縁部剥落。差口字状の近縁。	赤褐色	赤褐色	石英・白色粒・白色斑	前A-1区
34	深鉢	/ 口縁部	横紋は終了時に縁文変移、沈鉢文。	赤褐色	黄褐色	石英・角閃石・白色斑	前I-2区
35	深鉢	/ 口縁部	該段部欠け、沈鉢文後、口縁部上端から模文残存。	赤褐色	褐灰色	石英・チャート	前I-4区
36	深鉢	/ 口縁部	内側に脚印跡多め。外側に揮文。内外面にギザ。	赤褐色	赤褐色	石英・黑色粒・白色斑	前H-2区
37	深鉢	/ 口縁部	縁文後、藤原、絞繩・区画・縁文通り消し。	褐色	赤褐色	石英・黑色粒・白色斑	H4執造跡
38	深鉢	/ 口縁部	口縁部は黒文。藤原、閉閉区画、縁文。	赤褐色	赤褐色	石英・黑色粒・白色斑	前H-3区
39	深鉢	/ 口縁部	口縁部は赤文。底部から筋跡が下がらる欠缺。	褐色	赤褐色	石英・黑色粒・白色斑	前C-3区
40	深鉢	/ 口縁部	垂条下に模文残存。	灰黃褐色	灰黃褐色	赤褐色・白色斑	前C-3区
41	深鉢	/ 施部	施部による堅文。模文剥離、斜位施部跡。	赤褐色	赤褐色	石英・黑色粒・白色斑	前I-1区
42	深鉢	/ 施部	施部の剥離。模文。	赤褐色	赤褐色	石英・黑色粒・白色斑	I往101
43	深鉢	/ 施部	施部、LR施文と模文施文。	赤褐色	赤褐色	石英・黑色粒・白色斑	I往105
44	深鉢	/ 施部	不明瞭ながら模文残存、模文剥離。	灰黃褐色	赤褐色	石英・角閃石・白色斑	前I-4区
45	深鉢	/ 施部	施部堅文、施文。	褐色	赤褐色	石英・角閃石・白色斑	2往1区・前I-1区
46	深鉢	/ 施部	施部堅文、尖端文。/ 15と同一個体とあわれる。	赤褐色	赤褐色	石英・黑色粒・白色斑	2往12-13区
47	深鉢	/ 施部	LR施文、沈鉢堅文。	褐色	赤褐色	石英・角閃石・白色斑	前I-4区
48	深鉢	/ 施部	施文、施文。	灰褐色	赤褐色	石英・角閃石・白色斑	前I-4区
49	深鉢	/ 施部	施文、施文。	赤褐色	赤褐色	石英・角閃石・白色斑	前H-1区
50	深鉢	/ 施部	沈鉢堅文、斜位施部。	褐色	灰褐色	石英・黑色粒・白色斑	前A-1区
51	深鉢	/ 施部	施部堅文。	赤褐色	赤褐色	石英・黑色粒・白色斑	前J-1区
52	体	/ 把下部	接状把下部片。無文。	赤褐色	赤褐色	角閃石・チャート	前C-3区
53	体	/ 把手部	體状把手部片。模文施文。	赤褐色	赤褐色	石英・黑色粒・白色斑	前H-2区
54	深鉢	/ 施部	沈鉢区画内に施文。	赤褐色	赤褐色	石英・黑色粒・白色斑	前F-1区
55	深鉢	/ 施部	メラ状の突起施部欠損。施部に模文。	赤褐色	赤褐色	石英・黑色粒・白色斑	前F-1区
56	体	/ 施部	体の把手部片。模文施文。	赤褐色	赤褐色	石英・角閃石・白色斑	前G-3区
58	足	/ 把手部	体の把手。	赤褐色	赤褐色	黑色粒・チャート	前G-1区

第13表 造構外出土遺物観察表(2)

前期後葉の土器： 第37図1は、諸機b式の深鉢腹部上半の破片である。キャリバー形を呈するもので、大きく開く部位に相当する。貼土紐の貼り足しによる浮線文の上には、鋭いキザミが施されている。

中期中葉の土器： 2～25は、勝坂式期の土器破片である。6・7は勝坂I式。ベン先文とも呼ばれる細かい押引文が認められる。8、13～18は、勝坂II式。押し引きによる波状文または波状沈線紋が用いられる。2～4、9～12、19～25は勝坂III式ないし同式併行の土器。2・3は同一個体で、いわゆる焼町類型の深鉢である。5、11、23も同類か。4は樽形を呈する深鉢で、やや下って加曾利E I式併行とも見なしうる。12は、三原田式土器の一例である。27・28は、阿玉台II式土器で、おおむね勝坂II式と同時期と考えられる。胎土に實母の混入が顯著であるため、識別が容易である。

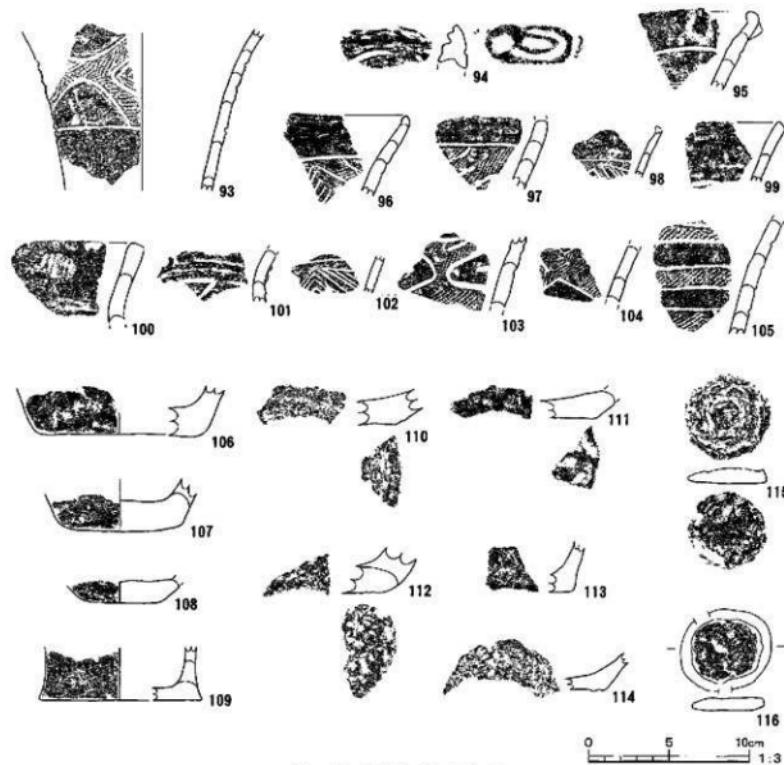
中期後葉の土器： 第38図29は、勝坂III式期終末～加曾利E I式期初頭の浅鉢。内外面とも、赤色塗影の痕跡が認められる。30は、加曾利E I式、31～34、42・43は、加曾利E III式に相当する。41、



第39図 造構外出土遺物(3)

No.	類徴	計測値(cm)/底質	器形・文様などの特徴/備考	色調(外)	色調(内)	胎土	記
57	深鉢	/突起部	上面は側面がある円形で、中央部に凸起状の凹ぐれり、周辺部に凹窓、外面側に凹窓のえぐりがある。底質は、底質付。	褐色	褐色	石英、角閃石、白色粘	前H-3区
58	深鉢	/突起部	底部はひじき状。口縁部に円形刻印文。	にぶい褐色	にぶい褐色	角閃石、白色粘	前I-1区
59	浅鉢	/突起部	中央部が盛り抜水にくぼむ円形突起。/赤色絞りの施跡あり。	赤褐色	にぶい赤褐色	黑色粘、白色粘	前I-4区
60	浅口土器	/把手	上面半円形状で中央がくぼむ。全体に連続弓形刻印文。	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	黑色粘、白色粘	前G-3区
61	深鉢	/突起部	側斜部にくぼみのある突起。	にぶい青褐色	にぶい青褐色	石英、角閃石、白色粘	前G-2区
62	深鉢	/口縁部	口縁部は内側に弧曲。底質後、サ基部は同。	明褐色	褐色	石英、雲母粘、白色粘	前G-2区
63	深鉢	/口縁部	口縁部は内側に弧曲。鶴文後、サ基部は同。	褐色	褐色	石英、黑色粘、白色粘	前H-3区
64	深鉢	/網状部	鶴文後、沈文後、文面透け出し。/内面もさき。	灰褐色	褐色	石英、黑色粘、白色粘	前I-4区
65	江戸上器	/網状部	網状状に施絞文。	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	石英、角閃石、白色粘	前I-4区
66	深鉢	/口縁部	ゆるやかな波状口縁。口縁部内側が肥厚。波状部の波状部に文のえぐりとない。内面に内凹孔。口縁部に凹縫狀のえぐり。底質は白。	灰褐色	灰褐色	石英、黑色粘、白色粘	前H-4区
67	深鉢	/口縁部	内側に連なる波状口縁。底質部に内凹孔。口縁部に凹縫狀のえぐり。底質は白。	褐色	灰褐色	石英、角閃石、白色粘	前I-2区
68	深鉢	/口縁部	波状口縁。底部下に横筋が付く。口縁部と底質間に当筋状のえぐりとない。外山に横筋付。	褐色	灰褐色	石英、黑色粘、白色粘	前I-3区
69	深鉢	/口縁部	ゆるやかな波状口縁。底質部下に捺入人の円形押圧文。	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	石英、チャート	前H-1区
70	深鉢	/口縁部	陰文、陽文、模状文、漢文式透。	灰褐色	にぶい褐色	黑色粘、白色粘	前I-3区
71	浅鉢	/口縁部	口縁部は波状口縁。口縁部に円形竹管文。	褐色	淡黄褐色	石英、角閃石、白色粘	前I-2区
72	深鉢	/口縁部	レット等は想う内質。口縁部は波状、鋸歯、波状部内に溝文、黒褐色	黒褐色	黒褐色	石英、黑色粘、白色粘	前I-1区
73	深鉢	/口縁部	口縁部に捺入式透文。	灰褐色	灰褐色	アレート、粗砂粒	前G-3区
74	深鉢	/口縁部	口縁部に捺入式透文。柄部に横筋透。	褐色	にぶい黄褐色	石英、角閃石、白色粘	前G-3区
75	深鉢	/口縁部	捺入式透文に施絞文。身部の捺入透。	暗褐色	にぶい褐色	石英、角閃石、白色粘	前I-2区
76	深鉢	/口縁部	口縁部内側が肥厚。口縁部に波状である。口縁部無文。	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	石英、角閃石、白色粘	前H-1区
77	深鉢	/口縁部	口縁部内側が肥厚。施絞文。	灰褐色	灰褐色	白色粘、チャート	区外
78	深鉢	/口縁部	蓋状口縁。飛鏃頭透文。/溝文。内外透なし。	墨褐色	灰褐色	コロウ、チャート	前I-2区
79	深鉢	/口縁部	網状透文を捺入に貼付。	にぶい褐色	褐色	石英、黑色粘、白色粘	前I-3区
80	深鉢	/口縁部	わざかにくぼむ浅い透文。	褐色	にぶい黄褐色	石英、黑色粘、白色粘	前H-4区
81	深鉢	/網状部	透文。問文。刺突文。	にぶい褐色	にぶい褐色	石英、当角粘、白色粘	前I-1区
82	深鉢	/刺突部	上下に円形刻印文の捺入付文。	にぶい褐色	にぶい褐色	石英、角閃石、白色粘	前G-4区
83	深鉢	/網状部	手付に円形竹管文のある捺付文。刺突のある點突、底質。	褐色	褐色	石英、白色粘、白色粘	前I-3区
84	深鉢	/網状部	くびれ部に横筋透2条。/外山に捺付透。	灰褐色	にぶい褐色	石英、黑色粘、白色粘	前G-3区
85	深鉢	/網状部	透文後、細文施文。	灰褐色	にぶい褐色	石英、黑色粘、白色粘	前I-4区
86	深鉢	/網状部	捺入式透文による透文文の左右に中筋が透文によくらむ透2条。その外側に透文。	にぶい褐色	反褐色	石英、黑色粘、白色粘、チャート	前H-2区
87	深鉢	/網状部	透文。透文。	褐色	明褐色	石英、角閃石、白色粘	前I-1区
88	深鉢	/網状部	透文。	褐色	にぶい黄褐色	角閃石、白色粘	前C-3区
89	深鉢	/網状部	矢羽根状に捺入透文。	褐色	にぶい褐色	石英、角閃石、白色粘	前H-1区
90	深鉢	/網状部	透文。/外山に捺付透。	褐色	灰褐色	石英、角閃石、白色粘	前H-1区
91	深鉢	/網状部	江戸透文。蘭口下に透文あり。	にぬい透骨	にぬい透骨	石英、角閃石、白色粘	前I-1区
92	深鉢	/網状部	透文後、捺入透文。さらに春海透の透文。/外山に捺付透。	灰褐色	にぶい褐色	石英、黑色粘、白色粘	前I-1区

第14表 造構外出土遺物観察表(3)



第40図 遺構外出土遺物(4)

44～46は、曾利式土器とみられる。35～40、47～49、52～55は加曾利EIV式。ただし、36、47はE.III式に含まれる可能性もある。52・53は鉢の把手。54は小形の個体。壺や瓢形土器など、深鉢以外の器形か。55は鉢である。欠損しているが、本来は52・53のような橋状の把手をもつ。56は注口土器の把手の一種。割れ口の中央には、接合を強固にするための細い芯棒の痕跡が認められる。あるいは後期初頭～前葉に属するかもしれない。50・51は細別時期不詳。

後期初頭～前葉の土器：第39図に、称名寺式および堀之内1式土器を掲載した。57～65は、称名寺式土器。57～61は、把手または突起の破片である。57は、第1号住居跡出土遺物の第9図2よりも新相を示し、典型的な齒紋追漿沈紋が認められる。59は浅鉢、60は注口土器の把手であろう。61は深鉢の一部かとも思われるが、判然としない。また、59の例は後続する堀之内1式期でも認められる。65は、第1号配石遺構の第20図13と同様、称名寺式に特有の注口土器である。

66～92は、堀之内1式土器。66では、単位部分の口縁部から頭部にかけてC字状の降帯が貼り付けられており、1式でもやや古い段階に属するとみられる。87は、小形の側体。91・92は粗製土器の一種で、

No.	種類	寸割量(cm)/状態	器形・文様などの特徴/備考	色調(外)	色調(内)	胎土	記号
93	深鉢	/網底片	本鉢底部に網文発見。	にぶい褐色	にぶい褐色	石英・黑色粒・白色粒	前 G-3 区
94	深鉢	/口縁部片	外凸に成流、内面に円錐状のえぐりを有する表面。	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	白色粒・チャート	前 G-3 区
95	深鉢	/口縁部片	口縁部に内側に凹型、口縁部に小突起を貼付し、網底式鉢。	灰青褐色	にぶい褐色	石英・角閃石・白色粒	前 F-2 区
96	深鉢	/口縁部片	ゆるやかな波状口縁。口縁部内面が肥厚する。皮膜部下灰青褐色	にぶい褐色	石英・黑色粒・白色粒	前 I-3 区	
97	深鉢	/口縁部付表片	沈縫文縦、横文有文。	黒褐色	にぶい黒褐色	石英・黑色粒・白色粒	区外
98	深鉢	/口縁部付近片	沈縫文縦、細縞文を記憶。	にぶい褐色	黒褐色	石英・黑色粒・白色粒	前 C-3 区
99	深鉢	/口縁部片	網底式鉢。口縁部は黒文。外面に赤褐色の斑駁あり。	にぶい褐色	にぶい黒褐色	石英・黑色粒・白色粒	前 F-1 区
100	深鉢	/口縁部片	平凸口縁部。口縁部は黒文。	にぶい褐色	灰青褐色	石英・黑色粒・白色粒	前 A-1 区
101	深鉢	/網底片	2枚の深鉢にキガリ。腹部に沈縫文。	にぶい褐色	黒褐色	石英・角閃石・白色粒	前 II-3 区
102	深鉢	/網底片	沈縫文後、網縫文を充填。ノリと同一個体の可能性あり。	にぶい褐色	黒褐色	石英・黑色粒・白色粒	前 G-3 区
103	深鉢	/網底片	沈縫文後、網縫文を充填。網縫文範囲以外部分に網目。	にぶい褐色	にぶい黒褐色	石英・黑色粒・白色粒	前 H-3 区
104	深鉢	/網底片	沈縫文後、網縫文を充填。	にぶい黒褐色	にぶい黒褐色	石英・黑色粒・白色粒	前 H-4 区
105	深鉢	/網底片	再び沈縫文後、網縫文を充填。外縁に斜柱有。	灰褐色	褐色	芦柑・チャート	区外
106	深鉢	底径: 10.0 / 網底片	網底部下段は無文。	にぶい黒褐色	淡黄色	石英・角閃石・白色粒	前 I-3 区
107	深鉢	底径: 17.0 / 底部片	網底部下段は無文。	にぶい褐色	褐褐色	石英・黑色粒・白色粒	前 C-2 区
108	深鉢	底径: 4.7 / 底部片	網底部下段は無文。	にぶい褐色	黒褐色	石英・黑色粒・白色粒	前 I-2 区
109	深鉢	底径: 10.0 / 網底片	網底部下段は無文。	にぶい褐色	灰褐色	石英・黑色粒・白色粒	前 H-4 区
110	浅鉢	/底部片	網底部下段は無文。底面深代裏。	にぶい褐色	にぶい黒褐色	石英・黑色粒・白色粒	前 I-3 区
111	浅鉢	/底部片	網底部下段は無文。底面に四頭押注痕。	褐色	にぶい黒褐色	石英・黑色粒・白色粒	前 II-2 区
112	深鉢	/底部片	網底部下段は無文。底面深代裏。	にぶい褐色	にぶい黒褐色	石英・黑色粒・白色粒	前 I-4 区
113	深鉢	/底部片	網底部下段は無文。底面文有文。	褐色	黒褐色	石英・黑色粒・白色粒	前 II-2 区
114	深鉢	/底部片	網底部下段は無文。	にぶい褐色	灰褐色	石英・黑色粒・白色粒	前 I-3 区
115	深鉢	底径: 4.8 / 底部片	小さな底鉢。内面に網目有。	にぶい褐色	灰褐色	石英・黑色粒・白色粒	前 G-2 区
116	他形	3.9 × 4.4	深鉢の無文網目を再利用。表面を研磨。	にぶい褐色	褐褐色	石英・黑色粒・白色粒	前 H-1 区

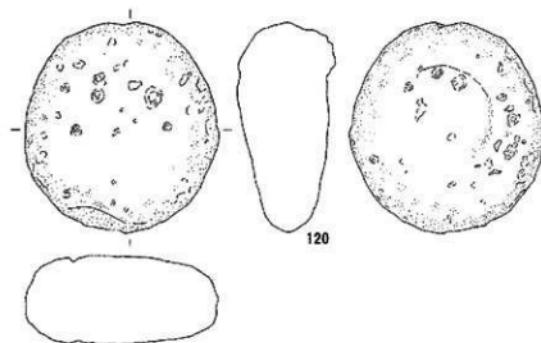
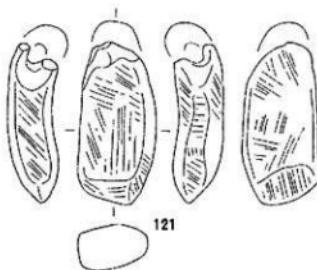
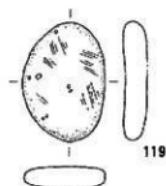
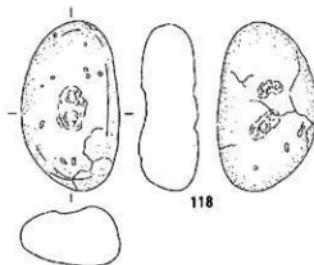
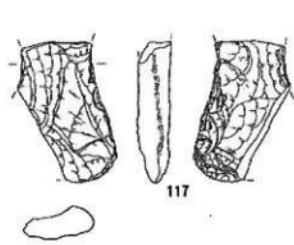
第15表 遺構外出土遺物観察表(4)

2式期との弁別が難しいものの、便宜上にここにまとめた。

後期前葉の土器： 第40図に、堀之内2式土器、各時期の底部破片などを一括した。93～105は堀之内2式土器。アサガオ形の深鉢が大半を占める。100・101のみ、くびれを有する器形である。106～115は底部破片。時期を明確にできない例が多いが、109、115については、それぞれ形状が示す特徴、成形技法の点から、堀之内2式のものであることが分かる。また、110・111は、浅鉢の可能性がある。116は、本遺跡で唯一出土した上製円板である。川いられた上器の製作時期は明らかでない。

ところで、後期前葉の集落遺跡といえば、出土上器に占める粗製土器の割合が精製土器のそれを凌駕する例が多いように思われるが、本遺跡にて出土した当該期の粗製土器は僅少であり、むしろアサガオ形深鉢が卓越するような印象さえある。生業のさかんな場所とみるとには、少なからず違和感がある上器の内容といえよう。

石器・石製品： 第41図に示した。内訳は、打製石斧、川石、研磨具、多孔石、垂飾りの各1点である。118の圓石は、磨石を兼ねている。また、滑石製の垂飾りが採集されている点は注目される。



[ 117 + 119 ] 0 5 10cm 1:3

[ 120 ] 0 10 20cm 1:6

[ 118 ] 0 10cm 1:4

[ 121 ] 0 5cm 1:1

第41図 遺構外出土遺物(5)

No.	器種	貢さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石 材	記 号	備 考
II7	打製石斧	[8.6]	5.95	2.06	[106.3]	輝石安山岩	横C-3区	
II8	磨石・砥石	13.9	8.1	4.9	681.5	輝石安山岩	アビット	両刃・磨石。片側面も使用。板状。
II9	研磨片	7.2	5.0	1.5	61.1	輝石安山岩	横C-3区	全体的に平場。
II10	多孔石	29.2	24.1	12.3	8450	輝石安山岩	横C-4区	全表面やまばらに多孔。
II11	立鉢	[3.4]	[1.6]	1.0	8.3	輝石	前II 1区	側面絞に穿孔。

第16表 遺構外出土遺物観察表(5)

位 置	七 器		石 斧		十 刀 牙		刮 片(黒曜石)			剣 刃(チャート)		
	枚(個)	重さ(g)	枚(個)	重さ(g)	枚(個)	重さ(g)	枚(個)	重さ(g)	枚(個)	重さ(g)	枚(個)	重さ(g)
III A-1グリッド	13	359.2										
III B-1グリッド	65	1,339.2										1 10.5
III D-2グリッド	19	232.0										
III C-1グリッド	37	810.7										
III C-2グリッド	16	451.0										
III C-3グリッド			1 106.3									
III D-1グリッド	1	107.3										
III D-2グリッド	2	159.1					2	3.2				
III D-3グリッド	5	97.0										
III D-4グリッド	8	278.1										
III E-1グリッド	4	114.5										
III E-2グリッド	1	9.8										
III E-3グリッド	3	92.4										
III E-4グリッド	2	50.1										
III F-1グリッド	29	326.4										
III F-2グリッド	14	183.1										
III G-3グリッド	41	631.7										
III G-4グリッド	39	1,472.7										
III C-1グリッド	16	253.7										
III C-2グリッド	52	1,062.7										
III G-3グリッド	184	3,622.2	1	64.1								
III G-4グリッド	158	11,116.9	1	5420.0								
III H-1グリッド	79	1,569.9				1 16.0						
III H-2グリッド	54	1,329.6										
III H-3グリッド	184	2,745.1	1									
III H-4グリッド	122	2,023.5	1	681.5			1	0.6				
III I-4枚残辺	3	217.4										
III J-1グリッド	65	1,985.8										
III J-2グリッド	194	2,985.9										
III J-3グリッド	166	3,064.2										
III J-4グリッド	159	3,225.5					2	0.5				
III K-1グリッド	46	694.6										
表土	12	362.3										
表面以外	11	217.1										

第17表 遺構外出土遺物 グリッド別集計表

## 第5章 まとめ

第2・4章の内容を適宜補足しつつ、今回の調査の成果について概括する。

**住居跡：**2軒が検出された。主として掘り方レベルから出土した両住居跡の遺物が示す時期幅は、第1号が縄文時代後期初頭の称名寺1式～司前葉の堀之内2式、第2号が称名寺1式～堀之内2式となり、多数を占める遺物の時期は、後者の方が若干新しいような印象を受ける。

検出された2軒の住居跡は、いくつかの点で好対照をなしている。第1に、構築構築材である礎の残存状況である。第1号では、張り出し部と推測される範囲でわずかに版石らしき様が確認されたに過ぎない。これに対し第2号では、主体部の中心付近を除き、敷石ないし配石が顕著に残されていた。そのようすは、敷石というより、むしろ「積石」「組石」といったおもむきに近い。第2に、遺物の出土状況。出土量の差にもまして、残された遺物の種類は明らかに第2号の方がまさる。石器の出土数は、前者が0点、後者が11点である。また、第1号は付帯施設を一切残していなかったが、第2号では土器埋設炉が検出されている。そして第3に、配石遺構との関連性である。前者は第1号配石遺構のラインから3mほど北へずれ、後者は連結部において配石遺構と位置的に重複しているのである。

ところで、柄鏡形住居跡について、関東地方全域を俯瞰すれば敷石をほとんど知らないケースは珍しくなく、その解釈として、構築当初から敷石が施されなかつたという見方と、住居の廃絶時に敷石が抜去されたという見方がある（岩井 1998）。どちらかが唯一の正解ということではなく、地域や個別の遺跡によって、一方もしくは双方が当てはまるのであろう。関東地方南部では、敷石が認められない、もしくは敷石を限定的に有する事例の方がむしろ優勢となる。ひるがえって、用材に事欠かない関東山地周辺部では、敷石をよく残す例が主流である。ただし、敷設していた礎を抜去したと見なしうる例も、東京都青梅市K-5遺跡SI-3・4（加藤建設株式会社 2001 前掲）、埼玉県荒川村純原遺跡第11号住（栗島 1988）（いずれも称名寺式期）など、敷石住居が存在した時代の全般を通じてしばしば認められる。群馬県城の西部では、とりわけ敷石が残される割合が高く、構築当初より敷石が低調な住居跡は異例に属する。ここでは、第1号住居跡にて敷石が検出されなかつた原因として、上記のような礎の抜去が行われた可能性を指摘しておきたい。

なお、2軒とも埋甕が検出されていないが、これは堀之内1式期に關東地方全域において認められる傾向と符合し、首肯できる現象である。

**配石遺構：**第1号配石遺構を中軸とし、近接して小単位の第2～4号が点在している。これらの配石遺構の新旧関係は不明で、おおむね堀之内1式期に構築ないし廃絶されたと推測されるにとどまる。また、堀之内1式期といえば、配石遺構の下部施設として上坑もしくは土壙（墓穴）が検出される例が増加を始める時期であるが、本遺跡では該当する遺構は発見できなかつた。

第1号配石遺構について、礎が当時の地表面に単純に据え置かれたのではなく、少なくとも一部では掘り方を設けて礎を埋置していた可能性が、試掘溝の調査によって示されたのはひとつの成果であった。また同試掘溝では、堀之内1式の土器破片の縁辺に加工を施した土製品8点が、密集し、一部は半らに積み重ねられた状態で出土している。配石遺構の掘り方というべき位置から出土したこれらの土製品については、置かれた意図や経緯を詳しく知るすべを見出せないが、ともあれ同遺構の構築時期との関連が深いばかりでなく、構築の際に行われた行為の一例を示すと考えうるもので、まことに興味深い。なお、第1号配石遺構は、礎の配列が示す弧線が複数の小さな弧線に分節するように見え、それに従うと3つ（第2号住居跡の範

囲を含めると4つ)の小単位に分けて把握することもできる。

第2~4号配石遺構のうち、第3号では立石が折れた状態で検出され、第2号でも立石の可能性がある跡が見つかっている。第4号については、立石の存在が明確でない。

**土坑・ピット：**都合29基が検出された。配置状況に明確な傾向はつかえがない。このうち第3号土坑は、後期初頭の埋設土器を伴うもので、周辺に住居跡の痕跡がないことから、屋外埋葬と考えられる。本遺跡で時期の推測できるものとしては、最も古い遺構ということになる。

ところで第3号土坑は、上部を塗灰覆土の特徴が地山と酷似しており、精査のおりにはどの段階で充填と見なすか判断に苦慮した。この種の覆土は、土坑の掘り込みをつくった際に生じた掛上、もしくはそれと同質の土を用いてごく短期間のうちに埋め戻されたものと推測される。住居跡内のピットをはじめ、今回の調査で検出された遺構の大半も、第3号遺構ほどではないものの、プラン確認の際には日視に適した日光となる時間帯(1~2月の午前10時~12時)を選び、念入りな観察を行ったうえで把摸が可能となったものであった。

本遺跡、ひいては周辺地域に限らず、縄文時代中期後葉から後期中葉にかけて、すなわち敷石(柄鏡形)住居跡が採用される時期には、こうした識別困難な覆土をもつ遺構がしばしば見受けられる。敷石住居跡に平面プランや壁面の立ち上がりが明瞭でない例の多いことはとみに知られているが、付帯施設までもが検出しにくいとなると、それは遺構そのものの有無の判断が難しく、検出には相応の注意と工夫が必要であるということを意味する。たとえばローム台地上の遺跡において、基本層序の黒褐色土~暗褐色土層の面にて遺構確認が困難であれば、いきおい地山の色調が明るくなるローム層付近まで遺構確認面を下げて調査することになる。地山がロームで覆土がロームブロックを主体とする場合、一見遺構は存在しないかのようであるが、よく見ると、暗褐色土など色調の暗い土が板土の範囲において斑状もしくはひび割れ状に入り込んでいることがある。また、ダンボールなどの棒で突くと、地山に比べ板土の方がブロック単位に崩れやすいというケースもある。肉眼観察にあたっては、前述した太陽光の角度も重要である。さらに、確認面では検出が容易でも、下に向かうほど地山との境界があいまいになる例もあり、ことは一筋縄ではいかない。

今回の調査では、不明瞭な遺構への対応いかんによって、調査の成果が大きく左右されることをあらためて痛感したこともあり、以上蛇足ながら付記した次第である。それにしても、上記の時期において検出しづらい遺構、とりわけ住居跡が散見される現象には、いかなる背景があるのか。ここでは臆測をわざかに挙げることしかできないが、第3号土坑に関する推測と脈通じ、なんらかの作用によつてほぐされた遺構周辺の地山が遺構を埋め、木末の地山と融和したとする見方ができるかもしれない。その作用のひとつとして、敷石(柄鏡形)住居跡が魔除される際、前述のような裸、あるいは柱の抜去といった損壊を受けているケースが想定される。

**住居跡および配石遺構群の構築(廃絶)順序：**当該種の遺構は、おおむね同時期、後期前葉場之内式房に構築されたものである。先述したように、住居跡に関しては第1号が第2号に先行すると考えられる。第2号住居跡の連結部と第1号配石遺構とが交錯する箇所の配石は、3段前後を積んで念入りに行われており、かつ石皿や凹石など転用された石器の含有率が高い。詳細は不明であるが、一連の遺構の中で特別な意味をもつ位置であったことは想像に難くない。

一般に、敷石(柄鏡形)住居跡と配石遺構が一組となって検出された遺跡では、住居跡が先行し、次いで配石遺構が構築されるという理解が行われている。本遺跡においてこの見解を明確に肯定するような事象は多くないが、以下に挙げてみる。まず、第2号住居跡の連結部東部の最下部において並べられた疊は、第1号配石遺構の主要な疊よりも下位に位置しており、同住居跡が構築された時点すでに配石遺構のデザ

インが考慮されていたことを示唆している。

また、敷石（柄鏡形）住居跡の研究成果のひとつに、構築時に設けられた敷石のほか、廃屋儀礼行為の一環として行われる敷石の存在を想定し、廃絶後の敷石に相当する現象として「環濠方形配石」「周堤縁」という配石状況を充てる見解がある（山本 1998）。環濠方形配石は、壁柱穴に沿って、多くはそれを覆うように小砾が方形に配置されるものである。周堤縁は、連結部付近から主体部の外壁をとり囲むように砾を上積みするもので、そこから派生して列状の配石を伴うことがあるという。構築時期は、いずれも堀之内式期から加曾利 B1 式期（とくにその前半段階）までに限られる。関東地方南西部の山間地域、中部山地、および伊豆半島域での類例が多く、関東地方北部や埼玉県域といった関東山地寄りの地域での事例増加がかねてより予測されていた。本遺跡の第2号住居跡において環濠方形配石の痕跡を見い出すことはできないが、配石の状況は周堤縁の形容と整合する。検出直後の段階で配石遺構と誤認しかねないような光景であった点は、周堤縁の多くの共通する特徴でもある。前述した周堤縁の例の分布域からみれば、本遺跡は外縁地域に属するが、列状配石との結びつきにおいて特化した一例として把握することができるかもしれない。

以上検討してきた内容をまとめると、第1号住居跡が廃絶されてまもなく第2号住居跡が構築され、さらにそれが本来の機能を停止したのち、同住居跡付属の周堤縁、および第1号配石遺構がほぼ同時に構築された、というおおまかな経済が想定できる。一連の経過に要した期間は、1型式期に収まる短いものであった。

**遺物の分布状況：** 調査区北西部にて密度が高く、第1号配石遺構をはさみ、西東へ向かって次第にその密度を減ずる。とくに、南東部のA～D-1 区は、無遺物・無遺構地帯ともいべき範囲となる。当該区では、念のため他所の遺構確認面より1層下の第IX層上面までジョレンがけを行ったが、結果は同様であった。

**土器の内容：** 遺構外出土遺物を含めた時期幅は、绳文時代前期後葉の諸儀式から後期前葉の堀之内2式までである。このうち内容に欠落のない範囲は、中期末の加曾利 EIV 式から堀之内2式まで。さらに、数量的に主体を占めるのは後期前葉の堀之内1式土器で、同じく堀之内2式、後期初頭の称名寺式が続く。これらが示す幅は、本遺跡全体の土地利用の継続時期、あるいはその最盛期を示唆していると考えられる。

今回の調査で得られた土器破片を概観するに、特筆に値するような個体はほとんどなく、狹義の「括資料」も皆無である。ここでは、資料の集合からうかがえる傾向を2点示すにとどまる。まず、加曾利 EIV～称名寺式土器のうち、深鉢の把手部分が残る破片が、住居跡付近で比較的まとまっていた。第14 図2（第2号住居跡）、第9図1・2（第1号住居跡）、第39 図57（旧H-3区：遺構外側ながら第1号住居跡付近）の4点は、称名寺式の型式変化の一端をよく示している。また、堀之内式土器について、粗製土器の比率が高いという通例に反し、精製土器が大半を占める点は注意される。

**石器の内容：** 19点が出土した。遺跡全体での内訳は、石皿5点、多孔石4点、石皿・多孔石1点、磨石・凹石3点、研磨具2点、石鑓1点、打製石斧1点、磨製石斧1点、スクレイバー1点となっている。このうち、石皿と多孔石のほとんどは遺構構築材に組み込まれたものである。また、上記の集計対象外である剥片は、24点(52.0g)と微量にとどまる。上述した堀之内式土器における粗製土器の少なさとあわせ、本遺跡の出土遺物の内容は、生業活動を反映したものとしては貧弱といえる。俗な表現を借りれば、遺跡から日常的な生活臭があまり漂ってこないのである。

**その他の遺物：** 第1号配石遺構の試掘溝にて出土した土器破片転用の土製品8点と、遺構外出土ながら滑石製の垂飾1点が特筆される。土製品は、その出土状況から、第1号配石遺構の構築が始まる前後に埋置されたものと考えられる。類例の検索と適切な呼称の付けが、今後の課題となる。垂飾は旧H-3区からの出土で、平面位置は第1号住居跡の範囲内に収まっており、同住居跡との関連を想定する余地を残している。

近隣遺跡との関係：本遺跡のほど近く、南東約200mには、坂本北裏遺跡が所在する。本章の最後として、同遺跡の概要を記し、本遺跡との関連について考えてみたい。

坂本北裏遺跡は、松井田町大字坂本字北裏1,225番地他に位置する。1997-1998(平成9・10)年に4,100ヶ所を対象として調査が行われ、堅穴住居跡と敷石(柄鏡形)住居跡各1軒、配石遺構(報告書中の表現は「環状配石遺構」)4基、集石遺構3基、石壠炉2基、土坑5基の検出が報じられている(松井田町埋蔵文化財調査会 1999)。各遺構の時期については、堅穴住居跡が縄文時代中期中葉(勝板式期)、敷石住居跡が後期前葉(壙之内式2式期)、配石遺構、石壠炉、土坑はそれぞれ中～後期、集石遺構は不明とされている。このうち敷石住居跡に関しては、時期がやや重って中期後葉～後期初頭の所産となる可能性がある。

調査区北東部の「環状配石遺構2」、北側中央の「環状配石遺構1」、および北西部の敷石住居跡と「環状配石遺構3」を結ぶラインには、わずかながら櫛が点在しており、これらの遺構がおおむね横一列に並んで配置されている印象を受ける。また、調査区中央南北寄りでは、記のラインとほぼ直交する方向に櫛の配列が認められる。

こうした坂本北裏遺跡のあり方と本遺跡とを対照してみると、両遺跡とも地図の等高線に沿うような方向で弧状の配櫛が行われ、それと接するように住居跡をはじめとする小単位の遺構が分布している点で、おおむね共通の構成をとっていることが分かる。また、敷石住居跡の時期に関する所見の更新が許されるのであれば、坂本壙下遺跡は同北裏遺跡より遺構の構築時期が新しく、住居跡は巨視的に見て南東から北西への位置を新たにしていった経緯を推測することができよう。2遺跡の中間区域を考慮に入れると、一帯には合計3～4列ほどの弧状列石が存在していた可能性がある。同様の構成をとるものとしては、安中市野村遺跡例(千川・小野 2001)などが挙げられる。同例では、3列の弧状列石の内側(南部)に隅丸方形の列石が設けられているが、坂本北裏遺跡に見られる弧状の配石と直交する方向の配石は、この種の列石の一部であろうか。

以上のように、坂本壙下と同北裏の両遺跡は、一連の過程によって形成されたひとまとまりの遺跡と考えられる。2度の発掘調査で得られた資料・記録は、縄文時代の配石遺構の構造や歴史的意義を究明するうえで貴重な総となりうる情報を含んでいる。本緒は坂本壙下遺跡の基礎的情報をまとめることでその責を全うするが、周辺遺跡の様相をも視野に入れた二次的な検討によって明らかになる知見もあるように思われる。さらなる追究を期して、結論に代えていたい。

#### 【主要参考文献】(総著者50音順)

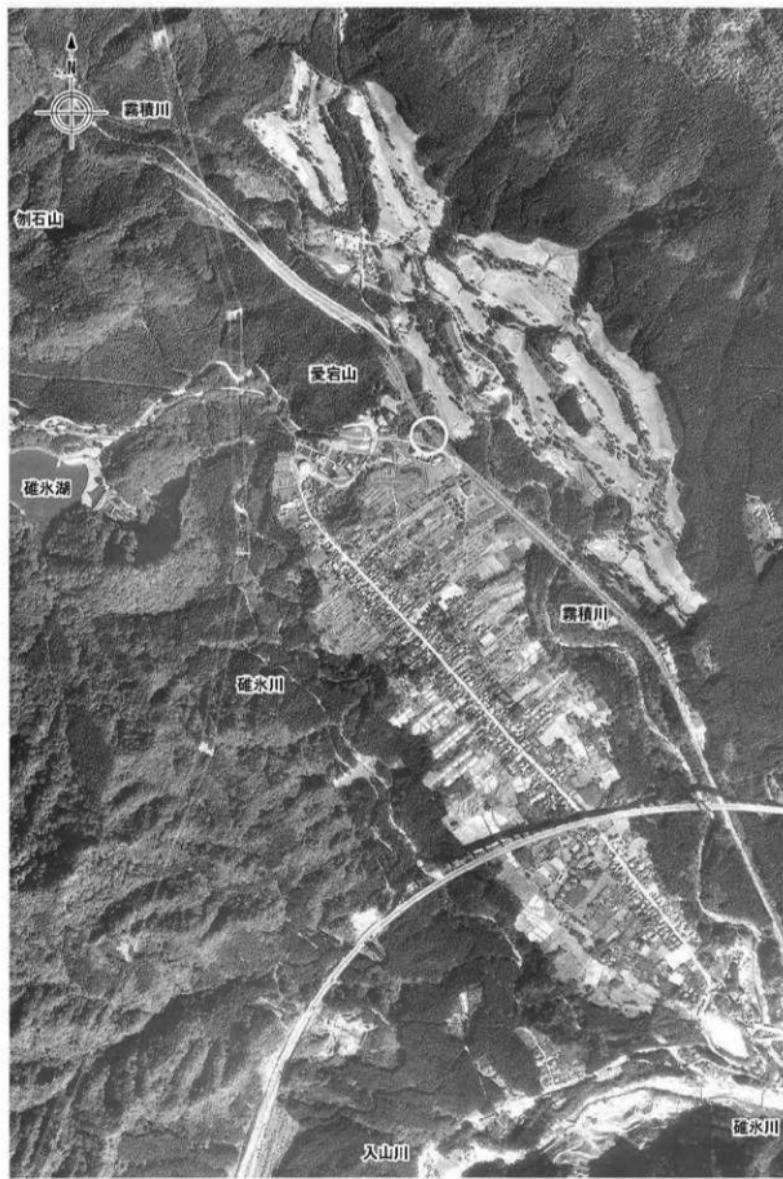
- 秋田かな子 1995 「柄鏡形住居の一構造－張川部をめぐる空間処遇の理解－」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第6集 帝京大学山梨文化財研究所
- 阿紹伸一郎 1995 「後・晩期社会と集団一住居の分析を中心に」『奈和』33 奈和同人会
- 阿部芳郎 1994 「西ヶ原貝塚出土の壙之内1式土器とその変遷 SK02上坑周辺出土土器の位置づけと式終末段階の検討一」『西ヶ原貝塚II/東谷戸遺跡』東京都北区教育委員会社会教育課
- 阿部芳郎 1998 「壙之内2式土器の構成と地域性－下総台地における壙之内2式土器成立期の様相一」『縄文時代』第9号 縄文時代文化研究会
- 阿部芳郎 1999 「精製土器と粗製土器－学史的検討と土器型式による地域認識の問題－」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第9集 帝京大学山梨文化財研究所
- 栗島義明 1988 「越原遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業報告書 第72集 財團法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 石井算 1984 「壙之内2式土器の研究(予稿)」『考古研究集録』第5冊 濱北ニュータウン埋蔵文化財調査団

- 石井 寛 1987 「柄鏡形住居址・敷石住居址の成立と展開に関する考察」『御文時代』第8号 網文時代文化研究会
- 石坂 茂 1985 『荒砥二之姫遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 石坂 康 1990 「群馬県内の称名寺式土器」『網文後期の諸問題』 網文セミナーの会
- 石坂 康 2002 「縄文時代中期本葉の横状集落の崩落と環状列石の出現－各時期における既存的集落形成を視点とした地域的分析－」『研究紀要』第20号 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 今村 明輔 1977 「称名寺式土器の研究(上・下)」『考古学雑誌』第63巻第1・2号 日本国古学会
- 岩井 尚子 1998 「敷石住居址の石材敷設状況からみた集団と集落構成」『陰台史学』第103号 隅台史学会
- 大江正行 はか 1990 「仁田遺跡・葛井遺跡」群馬県教育委員会・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 小川 和博 1984 「堀之内2式土器編年上の課題一東關東を中心として一」『奈和』15年記念論集 奈和同人会
- 加藤建設株式会社 2001 「東京都青梅市K-5遺跡」 株式会社新日本建物
- 金子正人 はか 1999 「松島泉跡水堀松井田 古本北裏遺跡」松井田町埋蔵文化財調査会報告書(10) 松井田町埋蔵文化財調査会
- 小林 修 ほか 2003 「赤城木道跡群I 赤城木大御室跡」赤城村埋蔵文化財緊急調査報告書 第21集 赤城村教育委員会
- 青谷 通保 2001 「堅穴住居の型式学的研究－縄文時代後・晚期の諸問題－」『奈和』23 奈和同人会
- 鈴木 能雄 1990 「称名寺・堀之内式上器の諸問題」『網文後期の諸問題』 網文セミナーの会
- 鈴木 徳雄 1991 「称名寺式の妻口文様器の系統－文様書系統論』と文様書逆統説の再討議－』『土器考古』第16号 土器考古学研究会
- 鈴木 徳雄 1994 「称名寺式の形態と埴内坡」『東海大学校地内遺跡遺跡発掘調査報告書』4 東海大学校地内遺跡遺跡調査会
- 鈴木 徳雄 1994 「敷石住居址の連続多石圓造設 群馬県内に於ける敷石住居内底設の一様相－』『群馬県考古学手帳』vol.4 群馬県土器研究会
- 鈴木 徳雄 1995 「称名寺式における充填排列系統の成立－放塙結合方式の複合と変遷過程－」『群馬県考古学手帳』5 群馬県土器研究会
- 千田 茂・小野和之 2001 「評村遺跡(中期)」『安中市史』第4巻 安中市
- 千田 幸生 1997 「新潟東源ヶ原遺跡(行田Ⅲ遺跡)」日本道路公団・群馬県教育委員会・松井田町遺跡調査会
- 大工原 寿 2003 「第2章 縄文時代」『安中市史』第2巻 安中市
- 知久 浩昭 1997 「堀之内1式土器研究序説」『唐澤考古』16 唐澤考古会
- 中島 庄一 1985 「縄文土器文様の研究－上巣文様からみた称名寺式器の地縁集団の構造－」『東京考古』3 東京考古談話会
- 中島 庄一 1989 「称名寺式土器条式」『縄文土器大観3 中・後期』 小学館
- 内田 泰民 1989 「堀之内・加曾利B式土器様式」『縄文土器大観3 中・後期』 小学館
- 両宮政光 はか 1997 「行田市木平遺跡(行田Ⅱ遺跡)」日本道路公団・群馬県教育委員会・松井田町遺跡調査会
- 山本 晃久 1986 「縄文時代後期前葉の集落」『神奈川考古』22 神奈川考古学会
- 山本 晃久 1987 「敷石住居終焉のもつ忌憚」『古代文化』第39巻1~4号 北桂法人古代学協会
- 山本 晃久 1996 「敷石住居址研究の現状と課題」『バネルディスカッション「敷石住居の謎に迫る」資料集』 神奈川県立埋蔵文化財センター・財団法人かながわ考古学財団
- 山本 晃久 1998 「柄鏡形(敷石)住居と廻屋儀礼－環状方形配石構造と周堤壁－」『列島の考古学』渡辺誠先生謝辞記念論集 渡辺誠先生謝辞記念論集刊行会

# 写 真 図 版



調査終了直前の記念撮影より



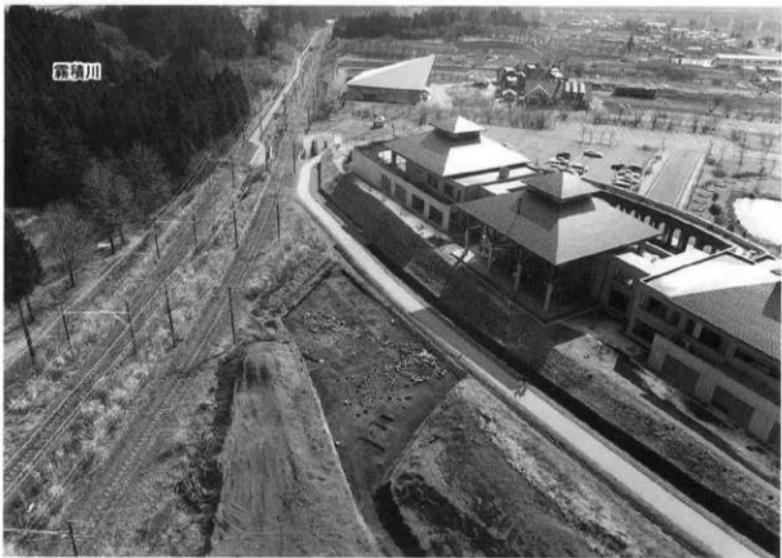
遺跡の位置および周辺の地形

(国土地理院、2001年10月撮影)

写真図版 2



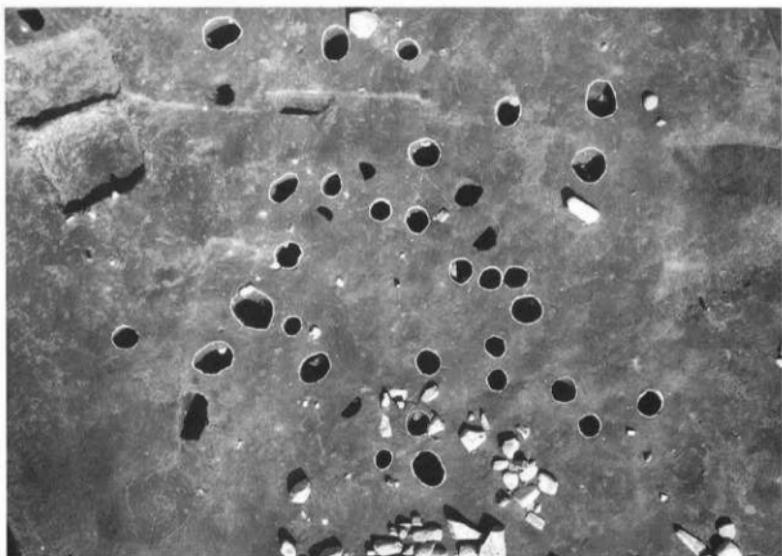
遺跡遠景(東から)



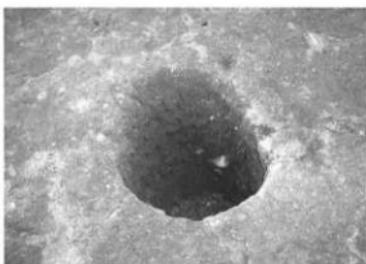
遺跡遠景(西から)



遺跡全景



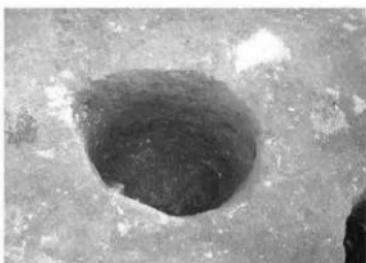
第1号住居跡



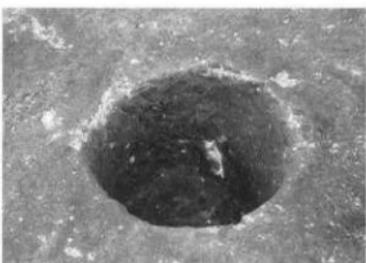
第1号住居跡 P-2



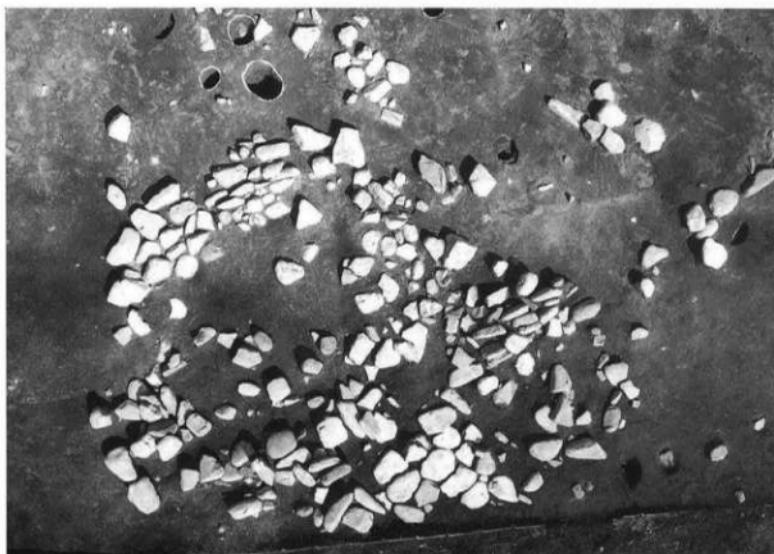
第1号住居跡 P-19



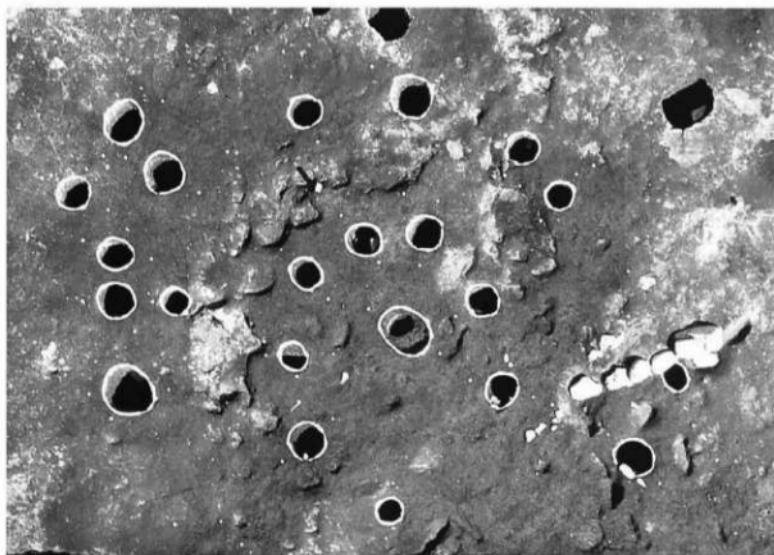
第1号住居跡 P-26



第1号住居跡 P-27



第2号住居跡 敷石検出状況



第2号住居跡 ピット



第2号住居跡 炉



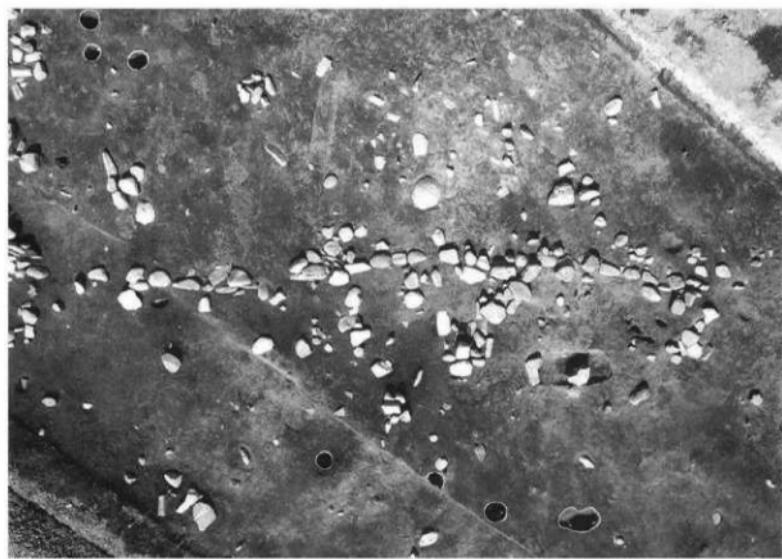
第2号住居跡 P-14



第2号住居跡 P-16



第2号住居跡 凹石出土状況



配石遺構群



第1号配石遺構 サブトレンチ調査状況



第1号配石遺構 サブトレンチ内遺物出土状況



第2号配石遺構



第3号配石遺構 検出状況



第3号配石遺構 立石復元状況

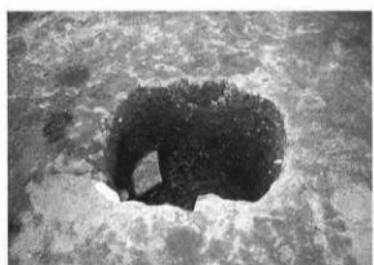
写真図版 8



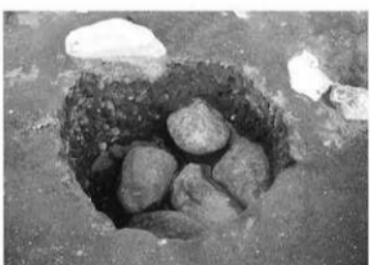
第3号土坑 遺物出土状況



第4号土坑



第9号土坑



第10号土坑



第1号ピット



第2号ピット



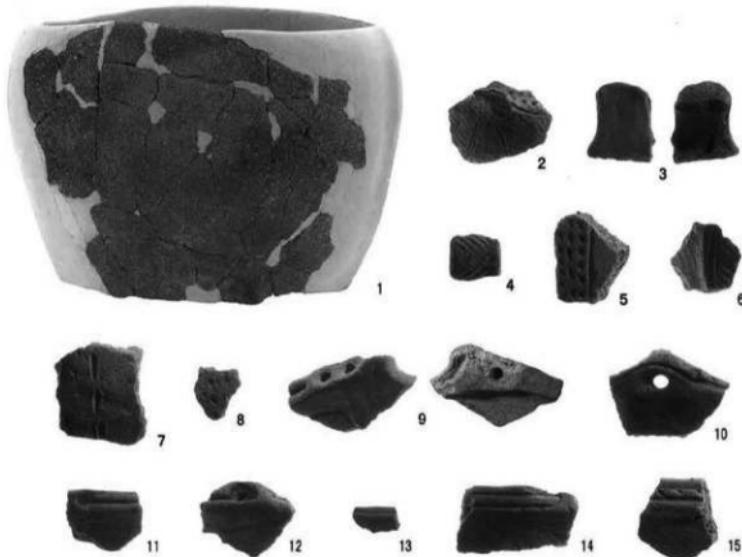
第3号ピット



調査風景

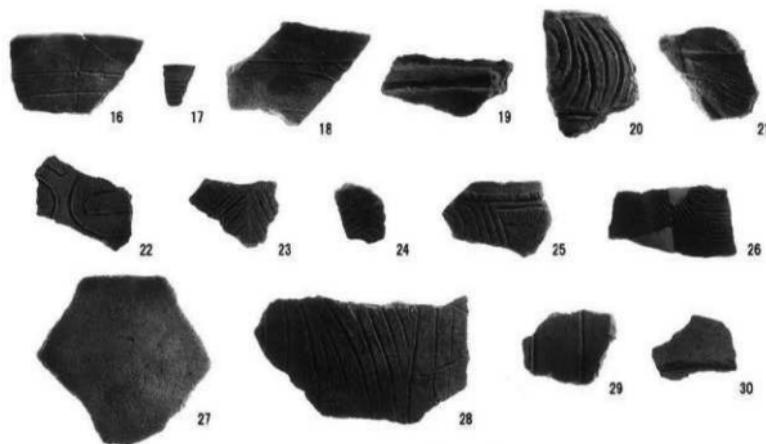


第1号住居跡 出土遺物

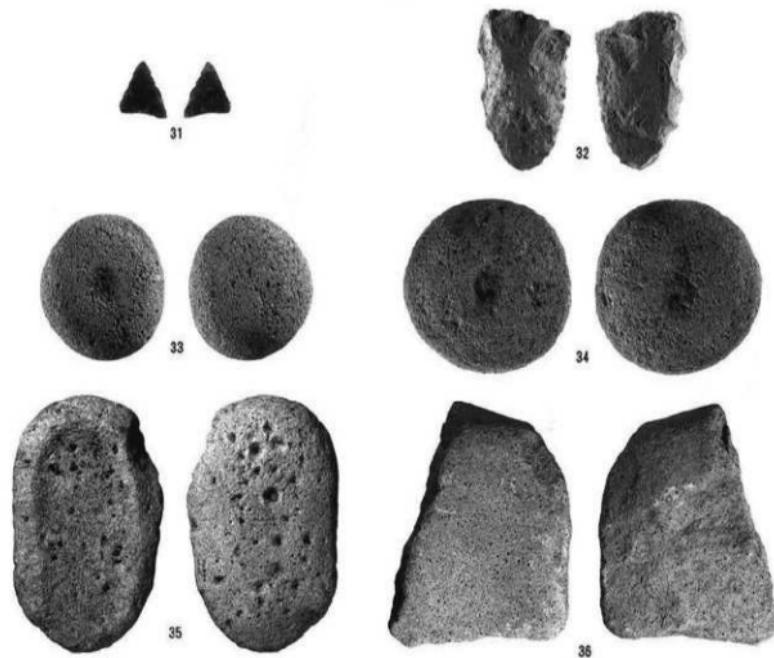


第2号住居跡 出土遺物 (1)-①

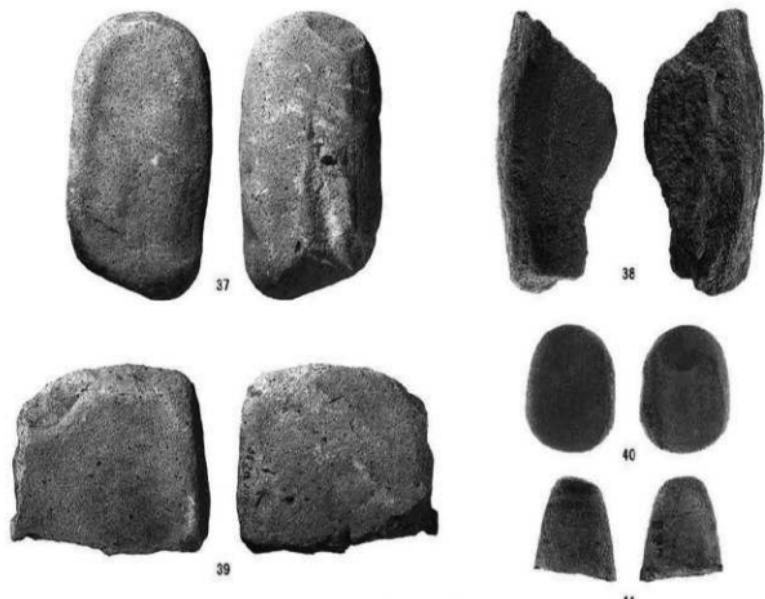
写真図版 10



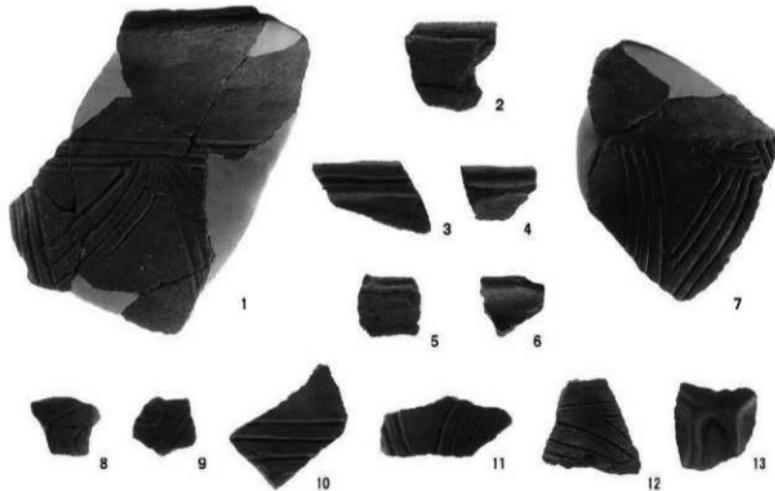
第2号住居跡 出土遺物(1)-(2)



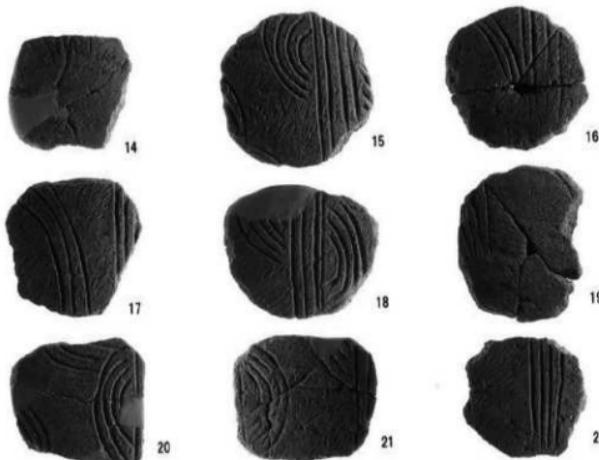
第2号住居跡 出土遺物(2)



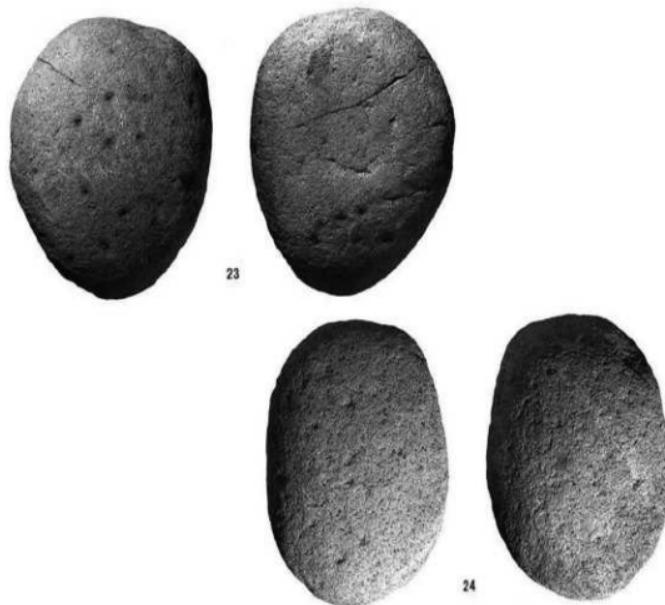
第2号住居跡 出土遺物 (3)



第1号配石造構 出土遺物 (1)



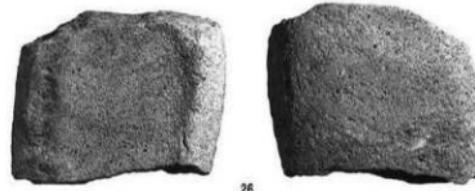
第1号配石遺構 出土遺物(2)



第1号配石遺構 出土遺物(3)



25



26

第1号配石造構 出土遺物(4)



1

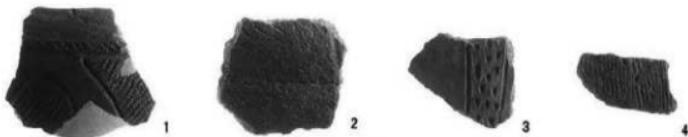


2



3

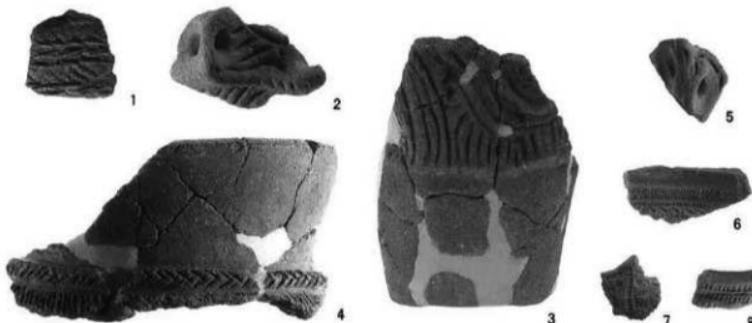
第3号土坑 出土遺物



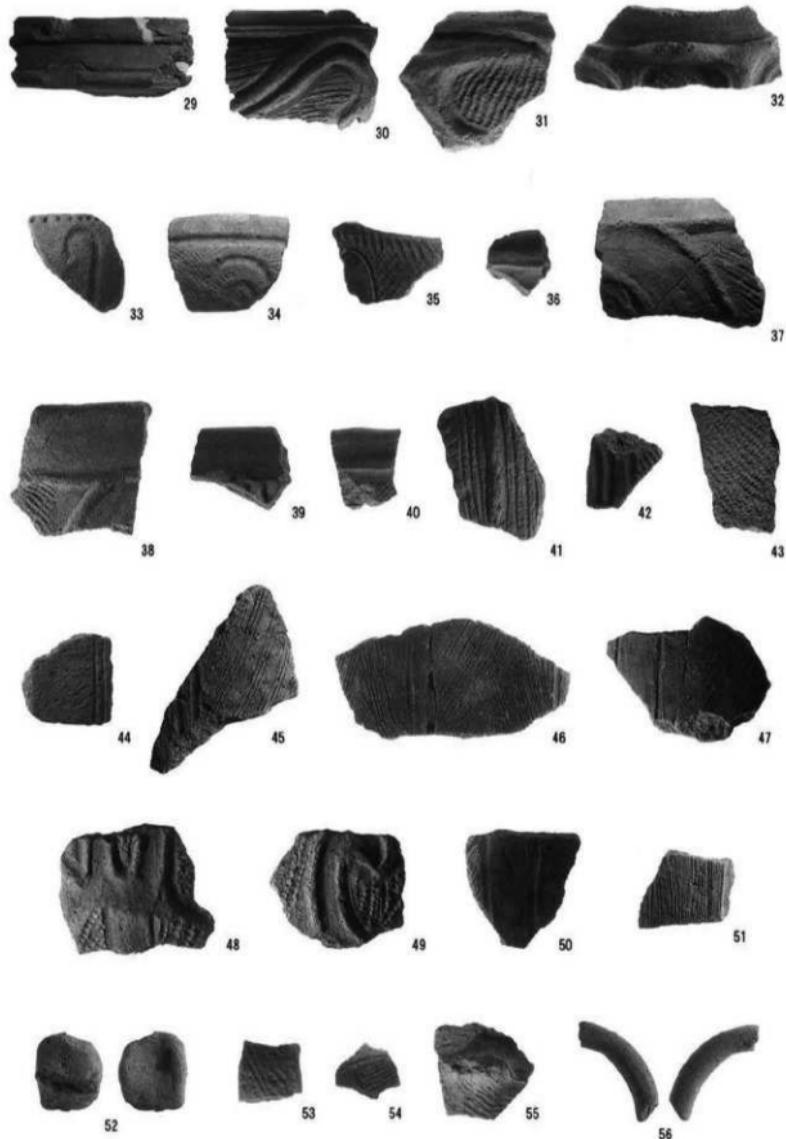
第4号土坑 出土遺物



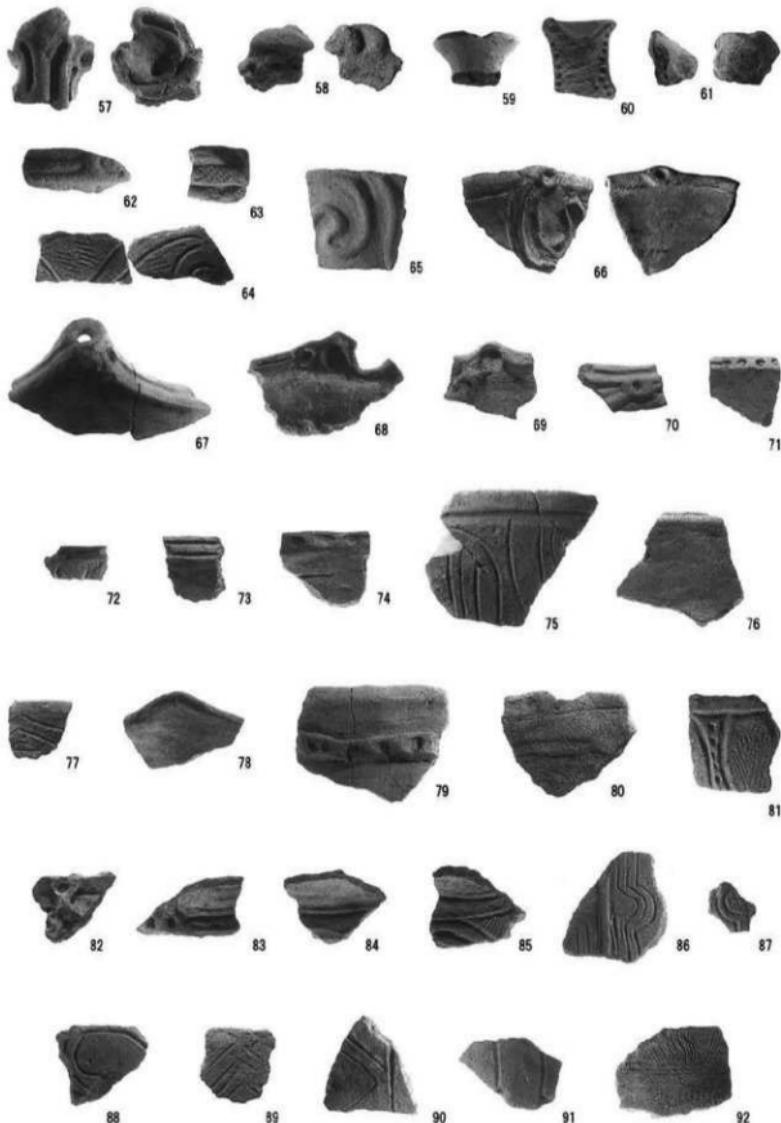
第2号ピット 出土遺物



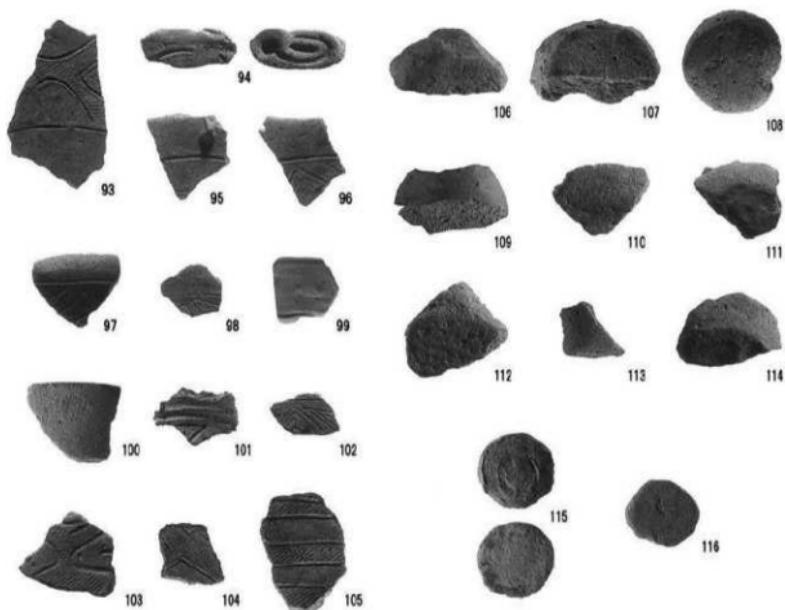
遺構外出土遺物(1)



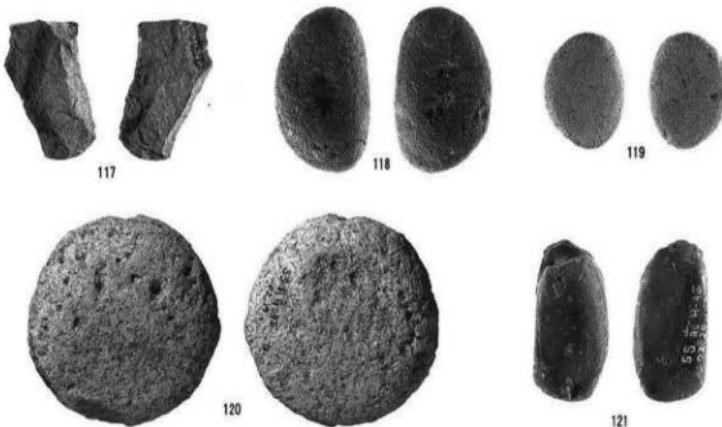
造構外出土遺物 (2)



造構外出土遺物 (3)



遺構外出土遺物(4)



遺構外出土遺物(5)

## 報告書抄録

ふりがな	さかもとせきしたいせき						
書名	坂本塙下遺跡						
副書名	横川駅周辺地域整備事業（「点間輸送事業」）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次							
シリーズ名	坂本塙下遺跡調査会報告書						
シリーズ番号	(1)						
編著者名	監 伸明 和久裕昭 長井 正欣						
編集機関	松井田町教育委員会・坂本塙下遺跡調査会						
編集機関所在地	〒379-0292 群馬県みどり市松井田町入字新里245 TEL 027-393-1111						
発行年月日	西暦 2004(平成16)年9月30日						
所取遺跡	所在地	遺跡コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
坂本塙下遺跡 他	群馬県みどり市松井田町 大字坂本字塙下211-1	104019	36°21'05" 36°20'93"	138°43'20" 138°43'32" (東経度±誤差)	2004.01.19 ~ 2004.09.30	約550 m <sup>2</sup>	鉄道文化 むら開拓 施設建設
所取遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
坂本塙下遺跡	集落跡	縄文時代 後期前葉	磐石(祠壇形)住居跡 2軒 配石遺構 4基 土 坑 12基 (うち1基は埋没土坑を伴う) ピット 17基	縄文土器 石 器 土 製品 石 製品	約2,600点 19点 9点 1点	配石遺構跡を複数とし、 その外側と内側で遺物 の分布密度に格差あり。 第1号配石遺構の下部 より、土器破片を円板状 に整形した七製品が 出土。	

坂本堰下遺跡調査会報告書(1)

**坂本堰下遺跡**

— 横川聚落辺地域整備事業(一点簡略化事業)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2004(平成16)年9月24日 印刷

9月30日 発行

編集・発行 松井町教育委員会

坂本堰下遺跡調査会

〒379-0292 群馬県高崎市松井町大字新屋245

TEL 027-393-1111

印刷 日本特急印刷株式会社